

俳句雑誌

令和七年二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十八巻第二号

水 明

2025 2月号



《今月のかな女》

白魚や肱枕して酔はぬ人

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

白魚は、シラウオ科に属する沿海魚で、体長六〜七cm、透明で内臓が透いて見え、眼だけが黒い可憐な魚。その寿命一年と、実にはかない。白魚を着に酒を呑んだのは零余子であろう。酒豪と聞いていたが、少し疲れて肱枕の仮寝姿である。それを脇で優しく見守っているかな女の眼が感じられる。山本紫黄の句「白魚の本場の白い洗面器」とは実に対照的な俳句で、なかなか味わい深い作品である。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

今朝の冬切つ先ひかる轆轤鉋

境 延昭

季音月

行く秋や遠き目をして陶狸

大場順子

季音花

渡月橋わたりきる間の時雨かな

横山君夫

水明集

つがひ鶺鴒一声交はし翔びたてり

岡田宣子

鼓笛集

風条条たゆたふ落差冬の水

霜多光代

山紫集

秋の水痛みの海へ注ぎけり

河野はるみ

水明

令和7年
2月号

今月のかな女

今月の巻頭句

筆づかひ(作品)

パイプオルガン(近詠)

竹の秋(近詠)

百尺竿頭主宰作品の鑑賞

ゆずり葉季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

『水明誌』を繙く

講演「境涯俳句と写生句」

俳誌望見

現代俳句鑑賞

句集喝采

山本鬼之介

大村節代

菊池ひろこ

五明昇

檜鼻ことは

境延昭
鈴木康世
島津初花
ほか

大場順子
池田雅夫
梅澤佐江
ほか

横山君夫
笹本啓子
保坂翔太
ほか

黒澤麻生子

秋尾敏

梅澤輝翠

網野月を

菅原卓郎



「水明」年間作品回顧

拈華微笑
六花
隨所作主
桜花爛漫
一陽來復
心情を詠ず
心の詩

大橋 勉代
菊池 ひろこ
五明 昇
境 延昭
島津 初花
松宮 保人
町野 広子

水明集

岡田 宣子
菅原 真理
篠崎 紀子
ほか

作品鑑賞

水琴窟 (水明集十一・十二月号鑑賞)

鼓笛集

山本 鬼之介
池田 雅夫

山紫集

水明塾・全句講評講座

網野 月を

水明例会報・各地句会報

新珠賞作品募集のお知らせ

水明忌・春の吟行会・全国大会のお知らせ

風声・発展基金御礼

後記

102 101 100 92 81 72 78 70 66 54 52 50 48 46 44 42 40

題字：長谷川かな女 表紙：内田恵子 カット：福田千春

箸づかひ

山本鬼之介

裸木やその名を誇る樹の名札

書割にしたき景色や夕枯野

荒星満つる山のホテルの大玻璃戸

容よく箸を使うて雑煮餅
巫女舞の巫女の寒さを御覧ぜよ
縫初の媪きめたる腰と肩
伝来の皿と親しむ松の内
復元の平城京を冬の月

パイプオルガン

大村節代

足早に集ひ来る人冬の服
冬着さまざま全身耳の三十分
オルガンの響く余韻や冬日和
パイプオルガン残りし舞台冬ぬくし
音のシャワー消え冬の町へと人も消ゆ
冬日差しステンドグラスに神宿る
教会堂のリードオルガン冬のこゑ

サントリーホールのパイプオルガンは、パイプ数五八九八本で、世界最大級と言う。そのパイプオルガンの無料コンサートがあるというので、いそいそと出かけた。
素晴らしいパイプオルガンに一流の奏者、夢心地の三十分であった。帰りに近くの霊南坂教会にステンドグラスを拝みに寄った。人間と神との出会いが描かれているという縦三メートル、横一三メートルの巨大なステンドグラスの前では、無信心な私も敬虔な心地になった。

竹の秋

雪あかり音源となる砂時計
落葉とぶ天文台の闇広し
大枝を揺らす聖夜のヒマラヤ杉
寝ころべば雲の近さの冬芝生
春の闇砂利軋ませて駐車せり
暖色の路面電車の来る臙
湯の音も香も昭和なり竹の秋

菊池ひろこ

大谷選手のホームラン―盗塁の記録が四〇―四〇になったというニュースが流れた日、拙宅の浴室の壁に同じ数字を見て驚いた。それは湯舟―シャワーの温度表示だった。シャワーはその後、家人が四一に変えたが。以前の家では洗面のたびに、マツチでガス湯沸器に点火していた。洗面所の窓からは風に揺れる数本の竹が見えた。やがて初の東京オリンピックに向けて国道二四六号線拡張工事が始まり、その影響で現在の家に移った。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

十月号

日和下駄来よ新涼の甃

舞妓や芸妓が行き交う京都の町並みといえば、規則正しく並べられた甃(石畳)の道路が思い起こされる。閑静な石堀(いしべ)小路を始め、二寧坂(二年坂)、高台寺通(ねねの道)、白川通、浄福寺通、小川通など、浴衣がけで出かけたい写真スポットが目白押し。新涼の一日、「カランコロン」と鳴る日和下駄の特徴的な音があたりに独特の風情を醸し出す。

川幅を広ぐるやうに流灯会

流灯会は盂蘭盆(うらんぼん)などで、神仏のために流す灯籠流しの行事のこと。竹や木などで作った枠に紙を貼り、火を灯して川へ流すことで、お盆を迎えた先祖の霊が迷わずあの世へ戻れるように祈る。京都のお盆を代表する風物詩である「嵐山灯籠流し」では、数多の灯火が川面一杯に広がる幻想的な風景が、マスコミにも毎年のように取り上げられる。

隠れ里いま水引の花盛り

水引(ミズヒキ)は夏から秋にかけて、細い茎に小さな花を咲かせるタデ科の多年草。お正月飾りや慶事の熨斗(のし)に添える水引に似ていることからこの名がある。各地の山野の林縁など湿り気のある薄暗い環境に生育し、何となく物寂しさを漂わせる。山間の隠れ里に今を盛りと咲き誇る水引の花に、里人の来し方行く末を想わせる一句だ。

舟もやふ夾竹桃の岸辺かな

公害や乾燥、病害虫に強く、夏の暑さでほかの花が咲かない時期に次々に花を咲かせる夾竹桃は、各地で「市の花」に指定され都市緑化の一役を担ってきた。ピンクや赤、白の花が咲き乱れる岸辺に舫う白いプレジヤートはまさに一幅の絵を見る思いがする。ただ近年ではその強い毒性から、誤って口にしないよう嚴重な注意喚起がなされている。

一寸見は十三七つ秋裕

「お月さんいくつ 十三七つ」という童歌の解釈には諸説あるが、「十三夜の七つ時(四時ごろ)の出たばかりの月のことで、まだ若い意」というのが一般的だ。掲句はうら若き令嬢が秋裕に身を包んで日本舞踊のお稽古にでも向かう景

か。裕の着用時期に特別な決まりはないが、秋裕には新涼から秋冷に至る季節らしい織りや染めの物が好まれる。

十一・十二月合併号

「君が代」に千の字二つ 秋日燦

「君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」は、一〇世紀初頭の最初の勅撰和歌集、『古今和歌集』を初出とする日本国歌。歌の中に数の多い「千」の文字が二つ詠み込まれているが、「千代に八千代に」は千年も、さらに幾千年もと、永久の栄えを祈る句である。初代「君が代」初演は明治三年九月八日。秋日の燦々と降り注ぐ中、往時に思いを致す静逸な一句だ。

月白や蹶起の森が動き出す

秩父事件は明治十七年、悪徳金貸や政府の悪政を批判し、農民の救済を訴えて起した日本近代史上最大の農民蜂起である。十一月一日、秩父・榛神社に蹶起した困民党の奮闘は今も語り継がれ、多くの人々に感銘を与えている。月が東の空に昇るのを前に、空がだんだん白んでいく月白（つきしろ）には、より良い未来をめざして立ち上がった秩父農民の志が込められており、まさに蹶起の森が動き出すかのようだ。

野佛を蹴倒すほどに黍嵐

野仏は道端に祀られている仏様のことで、阿弥陀如来、六

地藏、馬頭観音、千手観音、道祖神、庚申塔などさまざまな形がある。いずれも遙か昔、その土地に暮らしていた誰かが何かを願って建立し何百年も残ったもので、まさに路傍遺蹟とも言えよう。「黍嵐」は黍畑を吹き抜ける強い風のことだが、野仏を蹴倒すほどすさまじい。昨今の異常気象にあつては、葉擦れの音に秋らしい趣きを感じる暇も無い。

彼の歌が弾む峠の濃竜膽

「りんりんりんどうの花さくころさ」ではじまる『りんどう峠』（西条八十作詞、遠藤実作曲）の歌は、島倉千代子のデビュー二作目として昭和三〇年にリリースされた。竜胆（竜膽）の花が咲く頃、姉が嫁ぐ様子を描いた切ない歌詞が「りんりん」と鳴る馬の鈴の音と相まって心に響く。りんどう峠に実在のモデルは無く各地の呼称にはあやかりが多いが、峠路に青紫色の花を見ると思わず彼の歌が口をつく。

風鐸を鳴らしに山を秋の風

風鐸は仏堂や仏塔の四隅に吊り下げられた青銅製の鈴のようなもので、強い風が吹くとカランカランと鈍い音がする。古来、強い風は流行り病や邪気を運んでくると考えられており、この音が聞こえる範囲は聖域で災いが起らないと言われていた。比叡山や高野山など山中の大寺にはひととき大振りな風鐸が設えられているが、これを鳴らさんと山内に吹き募る秋風には、はや冬の到来を思わせる厳しさがある。

ゆずり葉

◆季音十一月

檜 鼻 ことは

黍あらし島津突破の関ヶ原

近藤徹平

つい最近、特急しらすぎ号で、敦賀より名古屋に行くことがありました。米原駅を過ぎ、次の停車駅は関ヶ原を通過しての大垣駅。車窓より眺める景色はとても静かで穏やか。数百年前に天下分け目と言われる激戦が行われた地であったことが嘘のようです。

句は世に名高い「島津の退き口」を詠んだもの。慶長五年、九月十五日の午後、関ヶ原合戦で西軍が総崩れになる中、最後まで戦場に残っていた島津義弘隊は、敵中突破による前進退却を敢行し、多大な犠牲を払いながらも大将の義弘を薩摩に帰国させることに成功しました。

詠者がこの地を訪れたのは、収穫の時期を迎えた黍を倒さんばかりに吹く強い風が吹くころ、ちょうど合戦が行われたのと同じ季節であったように推察します。上五の季語「黍あらし」により、まざまざと当時の激しい戦いの様子が浮かんでくるようです。「島津の退き口」の舞台であった大垣市上

石津町には、島津隊の島津豊久や長寿院盛淳らの菩提寺や墓があると伺います。いい旅をなさいましたね。

秋の旅「古寺巡礼」をふとこころに

大場順子

このような旅を試みたいものです。出来る事なら句にあるように気候穏やかな秋の頃に。和辻哲郎の「古寺巡礼」は、実際に訪れた寺院を紹介する形で、それぞれの寺院の持つ歴史的な背景や美術、建築、そしてその場所に息づく精神的な価値について述べられた名著として知られています。学生のころに一度読んだ覚えがありますが、もう一度読み返してみようと書棚を探りました。さて、旅をするなら、老舗の宿に数日滞在して、その地の電車や路線バスを利用しながら、気の向くままの古刹巡りしてみたいなどと妄想を膨らませながら、句を拝読した次第ですが、詠者の秋の旅、何処にかれたのでしょうか。機会があればその時のお話をお伺いしたいです。

初秋や少年独り逆上がり

山田美佐尾

逆上がりはコツさえつかめば、誰でも出来るようになると言うことですが、これがなかなか難しく、苦勞された経験をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。日曜日の校庭なのか、逆上りの練習をしている少年。鉄棒にはその少年が独りだけのようです。そのほうが、友達や先生や他の誰かがいる中で練習するよりは、失敗しても気にしなくてよいし、それに、自分のペースで集中できるということもあります。少しづつできるようになったのが嬉しくて、そのコツを忘れないように黙々と楽しんでいるのかも知れません。その少年は、鉄棒に掴まり自分と向き合う時間の中で、自分を見つめ直す場をそれとは気づかないうちにもっているようでもあります。子どもの頃を思い出し、独り逆上がりをする少年の姿に自分自身の昔の姿を重ねながら、少年を見守るように見ている詠者の姿を、想像いたしました。

お局を偲び小江戸を秋日傘

曲淵徹雄

川越は、未だ行ったことがなく、一度機会を見つけて訪ねてみたいと思っている地のひとつです。

江戸の情緒を此処彼処に残す通りや街並み、屋敷を見ながら、一人しずつに、その辺りを散策する。まことに良い時間をお楽しみのことです。秋の日差しを遮るように傘をさす足取りはゆったりとした時間の中に溶け込み、江戸時代当時の

風物やその時代に生活していた人たちのことに思いを寄せつつ、五感を存分に使って散策を楽しまれているご様子が伝わってきます。川越は鰻の名店も多いと伺います。川越を訪れることができたその日には、蒸してから焼く関東風の鰻を、是非、老舗の名店で味わってみたいものです。

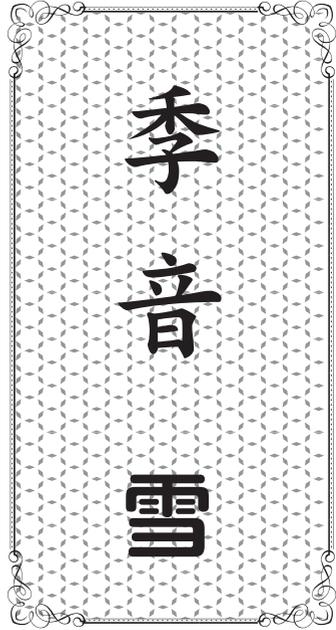
手のひらで風押し返す風の盆

河野はるみ

越中八尾の風の盆は、三百年の歴史を有し、立春から数えて二十日に当たる「風の厄日」九月一日に、風神鎮魂と豊作を祈願して行われ、唄・三味線・太鼓・胡弓を担う地方衆と踊り手が三日三晩、八尾の町を彩ります。男踊り、女踊りがあります。女性の踊り手は未婚の女性で、二十五歳で引退すると伺いました。

編み笠に、町流しごとの揃いの浴衣に黒帯を締めた出で立ちはまことに艶やか。「手のひらで風押し返す」と詠まれていますように、水のように柔らかく、風のように軽やかな手つきで踊る女踊りは、ゆるやかに美しく、見ている者の心を魅了します。コロナ禍でしばらくの間、自粛されていた風の盆ですが、再開の運びとなったことは誠に喜ばしいことです。句を拝読し、越中八尾へ出かけたくなりました。

♪見送りましょかよ 峠の茶屋まで 人目がなければ あなたの部屋まで 八尾坂道 別れてくれれば 露かしぐれかはらはらと♪：懐かしい風の盆の唄声を思い出します。



冬の海 島津初花

障子越し揺らぐ茶会の裾捌き
内浦の海は懐枇杷の花
海鳴りの昼に鱸酒ゆるされよ
民宿の襖開ければ河豚の鍋
幾度も大岩立てり冬の海

切つ先ひかる 境 延 昭

帰り花 鈴木康世

今朝の冬切つ先ひかる轆轤鉦
受皿に陶の匙おく葛湯かな
またぎの里の熊の胆を乾す長の家
遊び毛を頸に光らせ日向ぼこ
隙間風建具ひとつの四畳半

遊女塚真紅の木瓜の帰り花
日溜りに白たんぼの返り花
通ひ路の垣に二輪の帰り花
荒れ果てた庭に一輪返り花
堤防に浜昼顔の狂ひ咲き

時 雨 十倉和子

風鐸の音色はやさし時雨呼ぶ
斎捧ぐ僧に時雨るる御廟橋
若沖のにはとりと聞く一時雨
しぐるるや矮鶏駆け戻る庫裡の裏
堂ふかく小夜しぐれ聴く涅槃像

若狭ふぐ 鳥羽和風

船小屋の柱は丸太初明り
雪搔や大黒柱に蔵の鉤
若狭ふぐ阿納に浮きたる置筏
寒の水父はもとより医者嫌ひ
綿津見へ波荒荒と冬の海

秋の夜 永野史代

童心に衝撃の銃ガザ深秋
点されて仏間の障子仄暗し
母の味子が受け継ぎぬ栗ご飯
父・母と酒酌み交はす秋夜かな
秋の夜の門灯しづかに点り出す

彼や是や 星野和葉

ぼんぼんと在り処あらはに花八手
シンバルの音が離れぬ冬の星
冬星座あの迷ひ犬今どこに
捨てがたき登頂の山の古曆
波立てて柚子湯に溶かすあれやこれ

二人 町野広子

裸婦像の四肢のびやかなる秋思
秋の夜や何話すでもなく二人
同居には同居の孤独秋の夜
手囲ひをはみ出して飛ぶレモン果汁
もう誰も居ぬ古里の野紺菊

見舞ふ 茂木和子

重ね着て母のぬくもり背中より
風邪見舞ふ至つて元気な母なれど
影絵の狐障子の裏で「こん」と啼く
障子開け閉て俄仕込みの江戸仕草
切り貼りの障子岡本太郎風

二人旅 森本早苗

北斎の「浪裏」見入る瀬戸小春
奥嗟峨や時雨るるも佳し二人旅
婆三人二人聞き役冬うらら
熱爛や娘夫婦と灘五郷
柀の香の留まれる鬼門かな

時雨みち 山中みどり

人形町で牡丹刷毛買ふ冬桜
褌をとる指の白さや時雨坂
傘傾げ道ゆづり合ふ時雨道
今年逝きし人想ひ出す柚子湯かな
遣り残す事のあれこれ柚子の風呂

辺境伯領 網野月を

茶の花 井上燈女

はげしきや鐘なり冬の世を渡る
冬の日の儚き騎士の羽飾り
人妻やノースポールの白眩し
極寒や牧歌むさぼる眠子
歩をなくし英雄伝説吟ずれば

薪を割る音の重たく冴えわたる
牡蠣売女財布まるめて店を閉づ
茶の花や窓なき納屋に人の声
直送の泥葱の匂ひほしいまま
霜月や母の手紙は問ひばかり

終楽章 石井喜恵

枯木立 石山かつ子

跡継ぎに譲る母屋や夕紅葉
門灯の翳む秋夜の小糠雨
不意に止む象牙の撥や霜の夜
咆哮を鎮め深山月冴ゆる
冴え渡るシンバル一打終楽章

天恋ふるかに枝突き上げて枯木立
枯木立溪の奥より風が吹く
雪吊の縄の遊びをたしかむる
本堂の赤い絨緞経を待つ
解説のできぬ家系図冬夕焼

猿まはし 大橋 廼代

行く手 小倉 倭子

釣殿の窓に嵌めたる冬紅葉
ふれ太鼓銀の水尾ひく城の鴨
ご祝儀をうくは霜やけ小猿の手
角刈りの黒外套の予報官
急霰や二虺車へ積む黒ピアノ

久々にふつと詩ごころ小春日和
シクラメン言の葉優し助詞使ひ
竜の玉ひとり行く手の優越感
邪なことは水に流して浮寝鳥
耳元に透き徹る声寒月下

冬めく日 大村 節代

氷 雨 栢尾 さく子

一部屋を灯して暮す秋の夜
秋の夜赤本含む草双紙
爪先に重心しつかと冬めく日
冬めく日口の軽さは親譲り
口切や月光宿るにじり口

紫黄師の夢延々と氷雨の夜
立冬の黄蝶ただよふ如く飛ぶ
三つ程柚子浮いてゐる一人風呂
雪虫と興じし友も今は亡く
蒼穹に火よりも赤き冬もみぢ

檸檬 菊池 ひろこ

檸檬盛りある小卓の風通し
右の手に檸檬にぎりてプラス志向
八十路にも岐路はありたり帰り花
神無月壁に家伝の槍を置き
人さし指で鴨狙ひ撃つお濠端

冬立つ 五明 昇

冬日和真つ直ぐ上る野良の烟
川船や障子に揺るる波の影
紛れなき万有引力枯葉散る
帰り花山稜仰ぐ遭難碑
菜畑に滋味を育む今朝の霜

俳句

3月号
予告

2月25日発売

予価 1,100円(本体1,000円)®

巻頭作品50句 大木あまり
作品21句 三村純也・小林貴子

特集

一物の強さ

▼総論 一物仕立ての魅力
▼実作指南 季語をどう生かすか
▼鑑賞 取り合わせとの違い／一物句の切れ
▼作品五句 忘れられない一物の句
▼季語を見つめて

特別寄稿 岡本眸…………… 恩田侑布子

好評連載

虚子の遺産(最終回)…………… 井上泰至
飯田龍太の世界…………… 廣瀬悦哉
小林秀雄の眼と俳句…………… 青木亮人

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団

発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

季音月

古 曆 大場 順子

行く秋や遠き目をして陶狸
海はみ空の色を写して冬序曲
詩を愛す人には見えて帰り花
「序の舞」の焚くには惜しき古曆
冬曙や国生み神話思はるる

口紅の色 梅澤 佐江

冬紅葉散るや遠流の隠岐島
並ぶ埴輪に太古の匂ひ冬来る
牡蠣鍋や心許せる人とゐて
枯葉舞ふ道ヒロインのごと歩みゆく
手の甲に口紅試す小六月

秋津島 池田 雅夫

初空に翳るものなし秋津島
大木を祀る荒縄初景色
菰樽を開けて一献年始客
獅子舞の頭と脚の息びたり
寒の水鶏は白雲啄みぬ

プレゼント 内田 恵子

ふはふはの馬房の寝藁クリスマス
室の花モデル歩きを真似てみる
暗唱の文語の聖句白障子
重ね着や雀の減つてくる都会
カラフルな一両電車ゆく枯野

高嶺晴 丸山 マスミ

上毛は今日高嶺晴根深引く
風呂吹や屋台の椅子を詰め合うて
夕茜小江戸を統ぶる時の鐘
酒蔵に醪の踊る深雪晴
猪捌く人を遠見の寒鴉

隙間風 高島寛治

立冬や軒を寄せ合ふ伊根の家
冬初め真鯉が黒さ増してをり
小春日や水路の亀と歩を合はず
路地は冬曲輪の跡地漫ろ行く
寄り合ひに空席二つ隙間風

冬麗 松宮保人

山茶花や長き垣根は今盛り
時化空や男腕組む冬の浜
冬麗や戯け顔なる埴輪たち
ひたすらに車窓に毛糸編む女
孫子居て共に啜りし晦日蕎麦

紫野・標野 正木萬蝶

昼下りに陽の射す庭の帰り花
陸奥の姫の足跡帰り花
先達を追ふも届かぬ枯野道
紫野標野も枯れて妹いづく
漢方の効き目ゆるりと花八手

年用意 松井由紀子

小春日を詩人「ぢやあね」と歩み去り
冬ぬくし水脈のびやかに番ひ鳥
泣き寝入りせし子へ花の掛蒲団
隙間風猫背のままの小半日
母憶ふことしきりなり年用意

自愛 荒井俱子

道端で話す生き死に返り花
自愛とはときに怠惰や霜強し
猫ねまるポインセチアのある出窓
枯はちす竜の伝説残る沼
虎落笛こつてり煮上ぐタンシチュウ

冬構 森川義子

風ざわたる瀬戸穏やかに冬めけり
姿よき作務衣の僧の冬構
目葉で始まる一日冬に入る
白鳥のしづかに己が影を曳く
凧にあらぬ方向く風見鶏

茶の花

山田 美佐尾

目を細めたれど通らぬ針の糸
レコードの針通る道夜半の冬
秋日和唄ふわらべの「通りやんせ」
茶の花や村の辻なる石仏
さみしげな真白き小花お茶の花

経済白書

近藤 徹平

積ん読の経済白書炬燵猫
大枯野竜虎の戦見し地藏
夜半の冬受話器の誘ふ月旅行
百穴にコロポックルの影枯木
讚美歌や赤絨毯を白ドレス

冬の星

井上 玲子

冴え冴えと夜空の綺羅や冬の星
湖に光のシャワー冬の星
冬の星仰ぐや峡の露天風呂
数へ日や庭師忙しく銚とぐ
母の部屋隙間風とて懐かしく

干蒲団

大塚 茂子

冬銀河無限の空の伝言板
全身の骨のゆるびし干蒲団
宮の庭掃き清められ暦果つ
アンコール止まぬ第九や暦果つ
深谷葱おつ切り込みにたつぷりと

日記書く

青木 鶴城

「はい！柳葉魚はお待たせ」屋台酒
枯蟻螂後期高齢みな盛ん
大枯野色とりどりに熱気球
借景の肘掛け窓や冬至梅
連綿と綴る日記や年の暮

耳を澄ませば

日高 道を

残照や表参道枯葉舞ふ
竹春や谷戸に流るる般若経
秋深しかの山川は音を消し
酔ひ醒めの仁丹三粒秋の風
夜寒さや短波ラジオは途切れ勝ち

囲炉裡開く 原田 秀子

束の間に緞帳下ろす冬茜
晴へと帰る一群冬茜
塵はらふ南部鉄瓶冬に入る
寒星や別れし友の星探す
睦まじき家族の歴史古曆

立 冬 檜鼻 ことは

牛蒡引く八十路の母の年の功
さりさりと喧嘩の後の青林檎
立冬や針を合はせる古時計
病院の帰りにふたつ蒸饅頭
何もかも眠りてオリオン谷の村

討 入 忌 上戸 千津子

討入忌今日の昔を幾そ度
熱爛を囲む手拍手音痴調
後れ馳せに古刹彩り冬紅葉
空家裏に石臼一つ冬日浴び
声なしの妣に聞きつつ年用意

松茸山 西浦 千枝子

松茸山の奥へ奥へと空なくす
茸の輪に心昂ぶる至近距離
枯野原手毬のやうに弾む犬
雪道へ降りてたじろぐハイヒール
冬茜 生家に残る手水鉢

山日和 野口 和子

畳屋の深夜の灯り年用意
うたた寝の犬の躰や冬の夜
山日和庭に大鍋蒟蒻玉
手拭で母縫ふ袋柚子湯かな
银杏落葉山の社を輝かす

十二月 福田 千春

佇めば枯野に微か呼吸音
パールネックレスぶつんと切れた十二月
かけ込みの整骨医院十二月
備忘録に書いても忘れ十二月
あちこちに脚立の出番十二月

秩父夜祭 熊倉千重子

バスを降り狭山茶の花香る道
茶の花や心して入る躰り口
秩父夜祭とどろく太鼓天揺らす
すき焼を食うて多弁に反抗期
買物メモ書いて忘れて年の暮

年の暮 松山清子

銀杏黄葉の映ゆる図書館ガラス
反古にする書類のあまた年の暮
一人居の施錠確かむ年の暮
生かされて余命未知なり日記買ふ
片言の孫と手遊び日和ほこ

☆ ☆

特集 俳句に方言をどう使うか

エッセイ 宮坂静生・筑紫磐井・坪内稔典・マブソン青眼
五十嵐秀彦・及川真梨子・上地安智

巻頭作品10句

大高霧海・中村和弘・坂本宮尾
波戸岡旭・井上論天・岩岡中正
中西夕紀・天野小石

俳壇

3月号
2月14日発売
定価1000円(税込)
巻頭エッセイ
清水 伶

八木健進 滑稽俳壇

俳壇賞受賞第一作30句……………市村栄理
四季巡詠33句【第Ⅳ期】……………和田順子

季節の移ろい〜二十四節気……………はりまだいすけ
俳人の住む町……………辻村麻乃・谷口愼也
編集室の風景……………水明俳句会
二度目の俳句入門……………長谷川 權
旧派の俳句……………秋尾 敏
知つてるようで知らない俳句用語……………井上泰至

俳句と随想12か月 安田のぶ子・矢野景一

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

季音花

渡月橋 横山君夫

渡月橋わたりきる間の時雨かな
 小春日や長寿の猫の毛づくろひ
 流暢な日本語ガイドパリ小春
 境内の浪曲会や神の留守
 花石路や法話の締めには笑ひ湧き

砂子路 保坂翔太

砂子路の彼方の鳥や秋の雲
 減反の田んぼ一面花芒
 悲しみを胸に「和顔施」冬に入る
 熊撃てば大き笹や山揺るる
 雲払ふ木がらし白銀の高嶺

冬銀河 笹本啓子

滔滔と打たせ湯太し冬銀河
 捕獲獣戻しし山の眠りをり
 流木の打ち上ぐ浜や虎落笛
 蓮枯れて連れ呼ぶ鷺の声のみぞ
 手袋の片手ばかりの小抽斗

根来塗 染谷風子

裸婦像に小袖着せたき今朝の冬
 三島忌や夕陽に映ゆる二重橋
 磔刑の義民の墓よ冬の虹
 貧乏神も呼んで乱痴気年忘
 年酒を受くる大杯根来塗

花八手 石川理恵

短日や倍速で観るミステリー
 職人の行き来せはしき小六月
 居間からの死角にひそと帰り花
 隣家との境は冥し花八手
 空つばの巢を浮かせをり枯木立

枯葉舞ふ

下川 光子

少年の小枝のタクト枯葉舞ふ
隙間風父との会話とぎれがち
山眠る武人埴輪の眼の憂ひ
カピバラは湯から出られず冬至の日
クリスマスソングときめきの甦る

初 雪

渋谷 きいち

初雪が隠す雪せつちん隠山の宿
肩の初雪払ひ落として珍客来
山に初雪里に地酒の一升瓶
山越えて悒鬱が来る冬の空
冬青空樹間の透ける雑木山

冬のいろいろ

河野 はるみ

サンサインスのしらべの湖よ白鳥来
言の葉を詠ふ勤労感謝の日
禅寺の石段かざる草珊瑚
樽酒を社務所に納め年用意
土岐川の古代の欠片月冴ゆる

手焼煎餅

曲淵 徹雄

焦がれあふ男体女体秋の嶺
木犀や小鼻ふくらむ仁王像
噛みこぼす手焼煎餅秋惜しむ
橋詰に淡き街灯暮の秋
小春日や図体晒すラッセル車

鱒

梅澤 輝翠

柿落葉すぐりすぐりて葉とす
独り寝の目覚めうながすしづり雪
鮭の鱒化粧塩して一の膳
朝市に神棚並ぶ神無月
独り居に点鬼簿重し年の暮

冬の星

越田 栄子

枯野道なれど明日へと続く道
人影の消えて星降る枯野原
遠き日の想ひ巡らす冬北斗
ぐづる子の背中とんとん冬銀河
冬の星重きノーベル平和賞

柚子湯

森

和子

香りごと赤子受け取る柚子湯かな
冬至とは思へぬ銀座日和かな
熱の子を看取る夜更の虎落笛
虎落笛相槌を打つ家族ゐて
木の瘤に潜む力や虎落笛

冬銀河

西幅
公子

雪洞の蠟燭灰か冬銀河
ポインセチア第九の響く大都会
残照の水平線を神の旅
過ぎ去れば平らかな道冬深し
蕎麦掬ひ齧る葱箸香り立つ

花八手

鈴木
木玲子

苔むした羅漢咲花八手
厳めしき表札横に花八手
鈴の音の草履かけだす七五三
たそがれて冬三日月の遙かなり
冬の街バベルの塔の忽然と

木の葉

山戸
美子

友逝きて好評の店閉むる冬
無理矢理の好意に迷ふ冬の暮
清掃や木の葉時雨に追ひつかず
縦笛の上達早し木の葉坂
冬銀河訃報は常に突然で

花八つ手

寺内
洋子

古民家に手水鉢あり花八つ手
花八つ手ここは隣家の境界線
花八つ手日陰をわづか明るうす
木の葉髪忘れしふりの齡思ふ
冬来しを告げまはるやに灯油売り

野楽会

松島
寛久

稲打ちや土器で飯たく弥生人
留守詣被団協の夢叶ふ
戦争の終へぬ星に年越蕎麦
野球あり大谷ありて年越蕎麦
松虫や一村包む野楽会

あんこ玉 石田慶子

包丁研ぎいざ大根の桂剥き
しぐるるや差入れに買ふあんこ玉
立冬の街に手拍子大道芸
枯野道につこり笑ふ道祖神
冬の空酸素ボンベと研修医

黄の絨毯 野村美子

大井川軋む列車や冬に入る
人力や急ぐ車夫の手夕時雨
凧や黄の絨毯の今朝の道
数寄屋造りの組子障子や冬景色
冬座敷差し手の妙の遊び駒

クリスマス 田中章嘉

人生は過去を偲びて年の暮
曾孫まで生き永らえてクリスマス
真牡蠣食む天下晴れての酒の席
深谷葱新萬札で買ひ求め
青首の大根がみな夕日浴び

ポインセチア 宮崎チアキ

裸木の秀を渡りゆく鳥たちよ
裸木の放つきらめき雨上がり
天が紅ねぐらへ急ぐ寒鴉
数へ日や満月愛でて旅じまひ
胸に抱く深紅のまことポインセチア

神宮外苑枯木立 瀬戸雄二郎

赤帯は切られる印枯木立
電飾を外せば只の枯木道
枯木立みんなスマホを持つて居り
枯木立 燥いで歩く塾帰り
花八ツ手ぼんやり咲いて外廁

冬銀河 野平美紗子

広き野や天を仰げば冬銀河
くつきりと冬の銀河が父の郷
亡き夫のセーター羽織り夜の街
夜も更けて編むセーターの一目かな
古里の中田島より冬銀河

朝時雨 葛城 千世子

学らんでとばす自転車朝時雨
右に左に鏡に見入る冬帽子
鳥の糞まみれを洗車小六月
息白し川面を風の流れゆく
暮早し二転三転する花席

鍋奉行 綿貫 ひさの

ふはふはの出し巻卵冬の朝
鯛焼の六つの味をひとつづつ
焼諸や「チン」の音してほつかほか
電車乗り買出しに行くおでん種
寄鍋や新参奉行名告あぐ

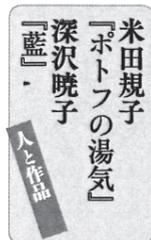
冬の城 高橋 満耶子

幽玄な光の回廊冬の城
体操の「まりと殿様」冬うらら
入浴中の口の筋トレ師走かな
三日後の筋肉痛や今朝の冬
平和賞に悲願を託し冬の星

特集 続・続

令和の新創刊

「息」[KENOBI]「幻日」
「自由律の風」「深花」「泰山木」「天秤」
「noi」[風琴]「傍点」[窓]「まるたけ」
「岬」[リポサール]「るびい17」



米田規子
「ポトフの湯気」
深沢暁子
「藍」
人と作品

俳人協会
埼玉県・千葉県支部合同
野田吟行会

葛西茂美

巻頭三句

照井翠／加古宗也

山崎十生／衣川次郎

遠藤風琴／和田桃

今月の華
伊藤瓊子／山本敏倅

諸家書架
堀田季何

関俳句と短歌の10作競詠
鈴木総史十立花開

二ノ宮一雄
一望百里

関好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫馨井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

諸家書架

堀田季何

二ノ宮一雄

俳句四季
Haiku Shiki

2025年3月号

2月20日発売
定価1100円(税込)

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

講演「境涯俳句と写生句」

(水明塾 2024. 11. 30 於さいたま共済会館)

「軸」主宰

秋尾 敏



秋尾敏です。お招きいただきありがとうございます。千葉県野田市で「軸」という俳誌を出していますが、埼玉県の生まれで、高校も大学も埼玉県です。

本日は、「境涯俳句と写生句」というお話をいたします。一般に境涯俳句は「作者の人生・境涯に根ざした俳句」で、「病氣・逆境・貧困・差別などを詠う」と定義づけられています。

それに対して写生句は、一般には眼前の事物のすがたを写し取った句だと理解されているわけです。

しかし、高浜虚子は、大正十三年の「ホトトギス」誌上で、写生句とはどのような俳句かという質問に対し、「表面は簡単な叙景叙事であるが、味へば味ふ程内部に複雑な光景なり感情なりが寓されてゐる」というような俳句が「写生句」なのだと答えています。

私は、虚子のこの解答は素晴らしいと考えています。正岡子規の句を例に考えてみましょう。

鶏頭の十四五本もありぬべし

子規(明三十三年)

この句は一般に写生句の代表のように言われており、しかし、意見の違いもありました。

・斎藤茂吉 芭蕉も蕪村も追隨を許さぬ傑作。
・高浜虚子 無視(句集に載せない)。

・志摩芳次郎

単なる報告。

・西東三鬼

病床の作者と無骨で強健な鶏頭の対比。

・山本健吉

「ぬべし」は鮮やかな心象風景。

ここで大岡信が、前年の「ホトトギス」の「根岸草廬記事」という写生文集に、河東碧梧桐の次のような文章があることを発見します。

或る日子規の庭にある鶏頭がひとり言を言った。

今年の夏から自分等の眷属十四五本が一処に半壺程の中に育てられたが初めの内は松葉牡丹にさへ押しつけられるやうな有様(後略)

この文章を思い出した子規が、その場にいた虚子に呼びかけた「ぬべし」だということです。

俳句の内容は読み方で決まります。そのとき、幾通りにも深く読める俳句がすぐれた写生句だということです。

私自身は、大岡説に加えて、碧梧桐の文章に次のような部分があることに着目しています。

我々はこゝに生長し初めてから段々此内の主人と親しくなるにつれて主人の消息が気になるやうになつた。

我々は此主人の庭に生長して千辛万苦を経て漸く他の草花を圧倒して来た処を思へば主人の経路と甚だ似て居る部分が多いやうに思はれる。此似た経路を踏んで来て今いくらかの

名誉を担ふて此主人の土となるのは寧ろ我々の本望であるのだ。

これは病床の子規に気を使った文章ですが、少々子規におもねった感もあります。それを虚子は嫌つたのだと思います。一般に「写生句」の見本のように言われている鶏頭の句ですが、「境涯俳句」として読むこともできるといふことです。しかも、鶏頭が弟子のことだとすれば、そのやり方は旧派の月並流に違いないのです。

つまり、俳句は〈読み方〉で決まります。

では、俳句にはどんな読み方があるのでしょうか。ここでは簡条書きに羅列しておきます。文学の入門書や筒井康隆の小説『文学部唯野教授』でも読んでみてください。

文献学

読めるようになるための全てを研究。

印象批評

単なる感想・思い付き。

鑑賞

読み手にとっての作品の価値。

解釈

読み手として「意味」を見出ししていく。

マルクス主義

「境涯」を階級の問題として読む。

実証主義

文献学を批判。雑誌その他の資料。

分析批評

科学的アプローチ・同じ方法論で比較。

文芸学

科学的アプローチ・同じ方法論で比較。

作品論

科学的アプローチ・同じ方法論で比較。

構造主義

現象に潜在する構造。

ポスト構造主義

脱構築。二項対立からの脱却。

テクスト論

作者の意図からの離脱

ポストコロニアル批評

クイア・リーディング

作家論

境涯 風土

九十年代以降は「脱構築」が流行りで、「テクスト論」や「クイア・リーディング」がさかんに行われていますが、「作家論」も重要で、境涯俳句という視点は今も有効だと思います。例えばA I俳句が話題になっていますが、A I俳句と人間の俳句の違いは、作家論のあるなしだと思っからです。A Iに作家論はあり得ません。

さて、ここで近代境涯俳句の出発点ともいべき大正三年の「ホトトギス」十月号を読みましょう。これは「子規居士十三回忌記念号」の第一部です。

大正三年というのは、宝塚少女歌劇の公演が始まった年で、夏目漱石が「こゝろ」の連載を始めます。八月には大熊内閣がドイツに宣戦布告。まさに「モダン」に突入したという感じですね。

「ホトトギス」十月号「雑詠」欄の巻頭は石島雉子郎の十句です。埼玉県行田の生まれで熊谷中学中退。救世軍士官学校から救世軍大佐となった人です。布教のために朝鮮にわたって『京城日報』の選者になります。

兵役のなき民族や月の秋
蜻蛉や盗るにまかせて門瓦（廃宮）
雉子郎

日本の植民地となった朝鮮を詠っています。コスモポリタ的な視点かと思えます。

二席は前田普羅の十句。

人去んで我れ笛に還る月夜かな
秋出水蛇を追ふ声暗し
秋出水乾かんとして花赤し
普羅

「我れ笛に還る」は素敵ですね。

三席は原石鼎の九句です。私どもの「軸」は、師系ということでは石鼎かの「鹿火屋」の系譜とされています。

秋風や模様の違い皿二つ

この有名な句も、この十月号に載ったのですね。新婚なのに食器を揃えられないという貧しさを詠んでいるので、これも境涯俳句です。

さて、いよいよ四席が村上鬼城の九句です。

瘦馬のあはれ機嫌や秋高し
水草に蜻蛉の翅の光かな
鬼城

これも有名な句ですね。一句目は境涯俳句とされる句です

が、二句目は写生句ですね。

私の大学の師の松本旭先生は鬼城の研究家で、鬼城の境涯俳句を書いて、俳人協会第一回評論賞を受賞されました。

一方、鬼城の「若竹」を継ぐ加古宗也氏は、鬼城の写生句を評価すべきだと主張されています。鬼城のこの一句目も、写生句として読めるわけです。しかし、二句目に人生を読むこともできないわけではありません。俳句は読み方次第ですね。

八席と九席に、長谷川零余子とかな女が並んでいるので紹介しておきましょう。

8席 長谷川零余子

二階から下り来る月のあるじかな

零余子

沙魚釣に槌のひゞきは佃かな

〃

9席 長谷川かな女

死ぬ猫を見る恐ろしや秋の暮

かな女

眉かきて顔おとろえぬ秋近し

〃

すでに二人は五年前の明治四十二年に結婚しています。かな女は二十七歳ですね。この二人の句も写生句として読むこともできるし、境涯俳句として読むこともできます。

この時代の「ホトトギス」は、鬼城の境涯俳句がクローズアップした時代でした。四、六、九月号で巻頭を取り、翌年も、六、八、九、十二月号で巻頭です。

その結果、大正六年に『村上鬼城句集』が刊行されることになります。序はなんと大須賀乙字と虚子の二人が書いています。この二人はそんなに仲が良いわけではないのですが、なぜか二人で鬼城を推しています。

虚子は十九ページに及ぶ序を記し、鬼城の聴覚の障害に就いて生活の労苦を詳しく書いています。

一方、乙字は、芭蕉、路通、一茶を例に境涯俳句の意義を説いて鬼城を称揚しています。

ところが、大正十二年になると、虚子は境涯俳句をスルーし始めます。この年の「講話会」では次のように語ります。

鬼城のやうな人になると、その主観なり境遇なりに触れた句が大変面白い、といふことはありますけれど、他の多くの人の句になると、特別な境遇にゐる為に面白いといふことは無いのです。

こう説いて「客観写生」などと言いだし、昭和になって「花鳥諷詠」というスローガンに展開していきます。

おそらくこれは大正十年の関東大震災の影響もあって、「雑詠」欄への投稿が、類想的な境涯俳句ばかりになってしまったからではないでしょうか。

この後は、石田波郷が境涯俳句を推し進め、新興俳句の境涯俳句対「ホトトギス」の写生、という対立構造が生まれます。けれど今見てきたように、近代俳句に境涯俳句の種を蒔

いたのは虚子なのです。

昭和十七年に波郷が書いた境涯俳句論は有名です。

俳句は境涯を詠ふものである。境涯とは何も悲劇的情緒の世界や隠遁の道ではない。又哀別離苦の詠嘆でもない。すである文学的劇的なものではなくて、日常の現実生活に徹しなくてはならない。

これは波郷が徴兵されて結核に罹患する前に書かれた文章です。波郷は結核に罹患して境涯俳句になったわけではなく、その前から理念として境涯俳句を説いていたのです。

戦後しばらくは境涯俳句の時代です。昭和二十五年に波郷の『惜命』が刊行され、境涯俳句がブームとなります。生活の厳しさが境涯俳句を生みだしていったとも言えるでしょう。林翔は角川書店の「俳句」に、「敗戦後の窮乏の時代に、皆が生きることに必死だった、「境涯俳句」と呼ばれる俳句が沢山詠まれました」と書いています。

昭和三十一年、河出書房から「俳句の作り方」という本が出され、その中で飯田龍太は、芭蕉、一茶に続けて原石鼎、村上鬼城、飯田蛇笏を取り上げて、「人生に徹し、深く境涯に根ざした句が読者をとらえるという俳句の原則は、芭蕉の時代も今日も決して変わっていない」とまとめています。

今は、近代文学の「境涯」は、個人の自覚の上に成り立つものだから、江戸時代の文学には適用できないと考える人が多いのですが、龍太は、芭蕉にも一茶にも境涯はあったと考

えたようです。

私も龍太の説に賛成します。江戸時代の人にも、それなり個人の自覚はあったはずで、特に一茶の時代には国学という学問が徳川幕府の統治という時代状況を相対化し、古代の天皇制に戻そうとしていたわけですから、状況を相対化する思考力はあったと考えるべきです。一茶の『おらが春』には「境界」という言葉が出てきますが、それは現在の「境涯」のことだと考えてよいと思います。

戦後の境涯俳句の時代は三十年代になっても続きます。昭和三十七年にはハンセン病に罹患した村越化石の『獨眼』（琅玕洞）が刊行され人々に衝撃を与えます。当時の角川書店の『俳句年鑑』の「年間回顧」欄には「療養者と俳句」「収容所俳句」などの項が設けられていますし、また、昭和三十九年の「俳句研究」八月号は「特殊環境の俳句」を特集し、スラム街、ハンセン病棟、清瀬療養所、収容所の俳句などが掲載されています。

以上をまとめますと、境涯俳句は、社会が変化し、貧富の差が拡大する時代に繰り返し現れる現象であるように思われます。芭蕉、一茶、鬼城、波郷の時代は、いずれも経済構造が変化し、新たな格差が作られる時代でした。

多様性への認識が高まっている現在、障害や性差をはじめあらゆる既成の認識が脱構築されていく中で、従来、境涯と思われなかったものが境涯と認識されていくこともあると思います。文学とは状況認識です。これからの俳人が、何を境涯と考えていくかに注目したいと考えます。

俳誌望見 梅澤輝翠

「玉梓」

令和六年九、十月号 通卷一―三号
主筆 名村早智子 発行所 京都市左京区

平成十八年、名村早智子氏が京都で創刊、師系山口誓子、津田清子。「誰の心にも詩がある」生活に深く根ざした詩を詠むをモットーとする。(隔月刊)

表紙は名村袖香氏による。もうすぐ二十周年を迎える「玉梓」に「深い青」のイメージ、そこから水や大河へとつながるを意識してお言葉。彩どり豊かな千代紙を繊細に配しての美しい心引かれる表紙です。

主筆句「銚離子」一五句より

端居して母の見しもの見てあたり
 団らんに戻らず父の夕端居
 帰省子待つ奥の間を空けて待つ
 立ち上る銚 正面に東山
 この宵は月に献ずる銚離子
 母と父の端居の姿、子どもの頃の誰れしもが持つ心のふる里。そして帰る子を持つ親の嬉しさが、句の中に二度も詠まれる待つに込められている。
 四句、立ち上る銚の背景までしかと詠めるのは、京都に住まいする人でなければと思われる句です。
 真朱集 主筆選 二二名 各七句より三句
 いつからか使はれぬ橋桐の花 藤田啓子

木の芽雨教室に子ら閉ぢ込めて 村上光代
 ほうたるを素手に捕へてこそばゆし 市野恵子
 萌黄集 主筆選 三一名 各七句より三句
 山小屋のやうな教会花うばら 一瀬正子
 誰よりも 働く父の冷奴 南 康夫
 毎日がミュージカルなり囀れり 齊藤 忍
 真朱集・萌黄集鑑賞として小寺篤子氏が一句一句丁寧に鑑賞されておる。

玉梓集 主筆選 五句欄秀句より三句
 金属の名前のやうなゼラニウム 岸 直人
 青田波リズム良く揺れ日々新た 上之内崇
 しんがりは末っ子軽梟の宿うつり 齋藤富美代
 中でも心引かれましたのが、学生・子どもの部として十句の投句。

水着着てほくの出べそは魚の目 小6 森下哉太郎
 父の日を無しする姉の反こう期 小5 亀井 椿
 家庭科で新茶の入れ方学んだよ 小5 松澤七葉
 夏休みみごしよ一周は疲れるな 小3 松澤たつ仁
 哉太郎君の句「デベソ」勇氣ある句、魚の目、活きてます。
 楽しいプールの時間がみえてくる。
 亀井椿さんの句、本人ではなく、お姉さんの事を詠まれて、さて本人の気持は？
 松澤七葉さん、松澤たつ仁君、さすが京都の方、宇治の新茶をおいしく頂いた事でしょう。ごしょ一周は疲れますよね。京都ならではの体験。羨ましいです。
 まもなくの二十周年、早めですがおめでとうございます。

『水明誌』

を繙く

(水明十一月・十二月合併号)

黒澤麻生子

(『秋麗』同人)

一湾の良夜さえぎるものなし 森川義子

行く秋や会へぬ人への一行詩

越田栄子

一読、晴れ渡る夜空に満月が上がり、水面を照らしている景が思い浮かぶ。作者は中秋の名月を堪能するために、その地を訪れたのだろうか。湾内の波は穏やか、月にかかると雲もなく、広々と視界が開けていたのだろうか。「さえぎるものなし」という断定が潔く、一句を揺るぎないものにしてある。また「良夜」としたことで、作者がその一夜の月を心ゆくまで味わっていることが窺える。あまりに完璧な景が詠まれてをり、大河ドラマ「光る君へ」でも話題になった藤原道長の「望月の歌」が想起されたが、それは深読みというものであろう。

掲句を読んで、筆者もかつてこのような景をみたことがあることを思い出した。それは数年前の十月、二泊三日で伊豆の断食道場に行った時のこと。夜の瞑想を終えて、ひとり屋上に出た。そこには大きな月が上がり、眼下に広がる海には月の道が現れていたのである。あまりに美しく何も句に残すことができなかつた。見事なまでの月夜は斯く詠むべし、と思わされた一句である。

掲句における「会へぬ人」とは、理由があつて容易に会えない人、もしくは今生ではもう会うことが適わない人であろうか。きつと行く秋を惜しむように、共に過ごした日々を懐かしんでいるのだろうか。季語に思いを重ね、淡々とした詠みぶりの中に淋しさが滲む。しかし作者は悲しんでいるだけではない。静かにその方を思いながら一行詩を詠んでいるのだ。それは魂の交歓であり、折りとも言える。切れ字に余情があり、姿の美しい一句である。

さて、掲句において重要なキーワードである「一行詩」だが、現時点では広辞苑に掲載されていない言葉であることが分かつた。一般的には短歌、俳句、川柳が一般的に知られているところだが、教科書にも載っているへてふてふが一匹韃靼海峡を渡って行ったも自由律の詩のひとつと言われる。このようにジャンルは様々だが、誰かを恋しく思つたり、自然に触れたり、何かに心が動いた時に詠む詩であるという点では共通している。短い詩形だからこを思いを凝縮させて、作者はどんな一行詩を詠んだのだろうか。

句集喝采

菅原卓郎

◆中西厚子「深遠」

文學の森

著者略歴 1956年大阪府守口市生。2011年「槐」入会。
2016年「槐」同人。2024年槐安集同人。現代俳句協会会員。
関西現代俳句協会会員。

句作十三年目の第一句集。未知なるもの、特に宇宙の謎に
対する探究心がかなり旺盛との由。星に関する句が数多く見
受けられる。

新盆や提燈だけの道しるべ
狛犬の目付き鋭く神の留守
銀河澄む過去の光で今を生く
秋の空真しやかに嘘をつく

第二句、神の留守を託された狛犬の目付きに、狛犬の多大
なる忠誠心を感じた。この社は嘸かし平穏であろう。第三
句、確かに星の光は何千年、いや何億年前のもので、宇宙の
壮大さと人間の些末さをうまく読み込んでいる。

春宵や隣り合はせの善と悪
露光り一瞬の生全うす
一人より二人の孤独秋気満つ
冬銀河合理の外に神が居る

第一句、春の宵口は心も体も浮かれた状態で、善であろう
が悪であろうが凡てを甘受する。正に隣り合わせである。第
四句、神は宇宙の道理なぞ関係ない世界に御座し、特に冬場
は満天の夜空にその存在を感じやすいのではないか。景の大
きい荘厳な一句。

◆原 光生「かぶと虫」

文學の森

著者略歴 昭和三十七年群馬県伊勢崎市長。平成二十三年「草林
」入会。平成二十五年「鴻」入会。俳人協会会員。「泉の会」共
同代表。いせさき能実行委員会事務局長。

作者は学生時代より「能」に造詣が深く、現在も地元で能
の普及活動で活躍中。能楽絡みの作品が多数見受けられる。
いちいちの母の指図や芋植うる
母の掌に渡す熟柿の重さかな
赤城山晴れわたるなり餅筵
定位置に今年も掛けるカレンダー
ハロウイーン魔女も天使も同じバス

第一句、老いた母の耕作していた畑に今年も里芋を植え付
ける季節になった。母の代わりに作業を請け負ったが、種イ
モを置く間際、植える深さ、種イモの形状など全てに口を出
して来る母。口煩くても気丈な母への愛情を感じる。

第四句、暦の掛ける場所の壁紙は白いまま。今年も又同様
である。
夏の川秘め事多き「道成寺」
袴能シテの素顔の涼しさよ
濡れ落葉能楽堂へ坂つづく

七日月正妻と並んで爪を切る
第一句、「道成寺」は白拍子等女性の登場人物が多く、中
七の措辞が見事。第四句、年賀の客も落ち着き、夫婦で仲良
く爪を切る景、疲れの中に安堵感が良く出ている。

現代俳句鑑賞

網野月を

富士晩照さて冬支度死支度

遠山陽子

〔俳句四季〕12月号・巻頭句より〕

諦念というより達観である。関東からは「富士晩照」が夕焼けを背負って冬季には一際美しく見える。此処まで書けるということはまだまだなのである。偉大な句です。

後ろからだかれ秋蝶かと泣かれ

鳥居真里子

〔俳句四季〕12月号・あまのたりより〕

なかなか水明誌では見かけない様式である。それだけに虚を突かれた思いがある。他に「また逢ふときのためのてのひら瓢の笛」がある。

音に酔ひ愛に酔ふとき揚花火

江島照美

〔俳句四季〕12月号・愛の嵐より〕

「揚花火」の音響は心地良いものである。見上げる時も遠花火でも、趣は異なるのであるが、心臓の脈に同調するからであろうか。他に「禁断の木の実飲み込む蛇の口」がある。

積み上げし開化の煉瓦罽雲

戸矢一斗

〔俳句四季〕12月号・製糸場の町〕

中七の「開化の煉瓦」はその把握の巧みさに脱帽である。中七の措辞で一句を決めてしまっている。他に「空き多き藤の四角秋の風」がある。

戀虫さらに増しゆく偏頭痛

東 國人

〔俳句四季〕12月号・かりんとうより〕

俳諧味の横溢する句である。それだけに構成力の確かさと力強さを感じる。他に「指差すは教員の癖冬薔薇」―虚子の忌の音たてて食うかりんとう〕がある。

刻まれた石の視線を霜の夜

秋尾 敏

〔俳句界〕12月号・新作巻頭3句より〕

「石の視線」は石への作者の視線と筆者は解した。中七の「…を」の後の間をどう考えるのかで、解釈に幅が出来る句である。もしかしたら「石」の擬人法かもしれない。

金銀のあはひのいろに冬の月

小暮陶句郎

〔俳句界〕12月号・新作巻頭3句より〕

きがねしろがねの「あはひ」の色なのである。「冬の月」の微妙な見え方が演出されている。陶芸家ならではの把握ではないだろうか。

死んだふりして冬の空の愛し方

塩見恵介

〔俳句界〕12月号・俳句界NOWより

「死んだふり」をどのように理解するのかわかりませんが、読み手の力量が問われるところであろうか。筆者は仰向けになって「冬空」を見上げている景を想像した。

飛翔して鷹は光に風の上に

田島三間

〔俳句界〕12月号・くだら野より

「光に」となるという措辞は良く見るのであるが、「風の上に」の追い掛ける様な措辞は中々に表現できるものではないだろう。他に「くだら野や二つに折れし開拓碑」がある。

初産の買物多数小鳥来る

磯部 香

〔俳句界〕12月号・坊ちゃんカボチャより

そうなのである。あれもこれも買い揃えて、それでも安心できないでいる。座五の季語「小鳥来る」がそこはかとない幸福感を醸し出している。他に「初産の予定を数ふ小六月」がある。

ひとつかみ薫焼べ足すや秋鯉

小川 軽舟

〔俳句〕12月号・淡あはとより

土佐作、土佐やきの景であろうと想像した。シンプルな構成に作句の妙を感じる。上五の「ひとつかみ」がリアリティを担保している。

安らかに傾く夜の林檎かな

加藤かな文

〔俳句〕12月号・上履きより

十二句の連作として発表された一句であるが、連作として鑑賞しなくともインパクトの強さを感じる句である。上五から中七への「安らかに傾く夜の」の措辞に心象風景を探ることが出来るであろう。他に「どんぐりの音雨の音また雨の」「上履きで出る山茶花の昼休み」がある。

非正規の柿剥く父でけふをみる

柳生正名

〔俳句〕12月号・ありをりあるより

俳句とはここまで言い尽くすことが出来るものなのである。最たる例であろう。境涯俳句の様でもあるのだが、筆者は作者の境涯を存じ上げないので何とも言えない。他に「ありをりのとどのつまりに残る虫」がある。

義士の日のいつも日陰の古タイヤ

楠本奇蹄

〔俳句〕12月号・風を波をより

連作はみな冬季なので、この「義士の日」は討ち入りの日であろうと想像した。「いつも日陰の古タイヤ」の中に緊張感と安心感が同居しているような奇妙な感覚に襲われる。

まだ砂になれぬ貝殻敗戦忌

物江里人

〔俳句〕12月号・令和俳壇12月より

しっかりと受け止めて心に刻みたい句である。「敗戦忌」と言い切る作者の歴史観に共感する。

入つてはならぬ秋野を蝶自由

丹羽真一

〔句誌「樹」〕12月号・コッペパンより

座五の「蝶自由」にもものあわれを見据えた作者の視座を想像する。他に「秋桜あまねしコッペパン齧る」がある。

水明創刊 95 周年 記念特別作品募集

記念全国大会・記念祝賀会のご案内の通り、水明創刊 95 周年を記念して、下記の要領で俳句・エッセイ・評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外は何方でも応募できますので、奮ってご応募下さい。
なお、受賞者の表彰は令和 7 年 9 月 28 日の記念全国大会にて行います。

応募要領

- 【応募資格】** 選考委員を除く全ての水明会員
- 【応募部門】** ①俳句作品：30 句（応募用紙を発行所迄ご請求ください）
②エッセイ：1 篇（400 字詰原稿用紙 5～10 枚）
③評 論：1 篇（400 字詰原稿用紙 15～20 枚）
- ◆①は応募用紙を使用。②③はタテ書き B4 判 400 字詰原稿用紙を使用する
 - ◆文字は楷書で丁寧に記す（鉛筆書きは不可、黒ペンを使用）ワープロ、パソコンによる原稿も可
 - ◆いずれも未発表作品に限る
 - ◆最初のページの 1 行目に表題（タイトル）と氏名（俳号）を明記する
 - ◆複数部門への応募も可
- 【応募締切】** 令和 7 年 5 月 25 日（日）
（令和 7 年 4 月 1 日から受付開始）
- 【送付先】** 〒330-0064
さいたま市浦和区岸町 4-10-21 水明発行所宛
※「記念特別作品」と朱書する
- 【選考委員】** 主宰・副主宰・編集長・石山かつ子・石井喜恵
◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、受賞者を決定します
- 【授 賞】** 俳句・エッセイ・評論各部門に授賞します
正賞 1 名：賞状と副賞 5 万円
（但し、受賞に値する作品がない場合には該当なし）
準賞若干名：賞状と副賞 2 万円
（但し、受賞に値する作品がない場合には該当なし）

◎ご質問・お問い合わせ

実行委員長 網野月を（電話 080-7580-0208）へ
願います

水明創刊 95 周年記念事業 実行委員会

令和6年

年間作品回顧

期間

〈 令和6年1月号 〉

～ 令和6年12月号 〉



拈華微笑

大橋 迪代

網野月を

夕螢一番星を待ち出づる
ほうたるに甘露すすめる蛇の声

自らの命を燃やし夜を彩るほたる。才能ある女流は螢の句で名をなすとか、女心を熟知した柔らかい句に驚く。不死の霊葉アムリタの甘露をすすめる蛇の声にどきりとする。

築山の石笑ひ出す冬日向
谷に入る今朝の秋日の剛かりし
日を受くる茅葺き屋根や秋大し

秋の太陽は空気が冷たく澄んできて照り方が烈しい、特に入り日は強烈で華やか剛かりしは独特の措辞。古民家の掛時計がけだるく鳴る音がきこえる秋大しは誰もが言える措辞ではない。題名に「界限」の一年を通された事、拍手喝采。

椎野美代子

露人ワシコフ叫ぶ柘榴の爛熟す
空耳はセロファン音冬の雲

一灯の如き遺影や春の闇

西東三鬼に挑む気概にエールを贈る。甘酸っぱいルビーのような実を爛熟とはいかにも。セロファンの音とは独特の感性の持主。ほのかな明るさと、水気をふくんだうるんだような柔らかさをもつ闇、遺影は大きな心の支えである。

緑の夜背を割つて脱ぐロングドレス
向日葵をどすんと活くる面構

背を割つて脱ぐから、もしや恋の火遊びと勘ぐらせるのは季語のせいかも。どすんと活くるは情熱の日向日葵だから、強い気性の表れた人物が備前焼の壺へ活ける豪快に。

池田雅夫

つばくろの一閃天地返しかな
龍天に昇る古城にかかる雲
春の灯や徘徊猫の三つ巴

多くの人が心待ちにしているであろう燕の渡来、天地返しは言い得て妙。春分の生気に乗って天へ駆けのぼるといふ龍、住む人もない古城にかかるむら雲の中にしかと龍。全身身の毛を逆立てて一匹の牝を争う猫にうるむ春の灯。

蒼翠の山野鶯老いを鳴く
街に来て道にまよふ子鰯雲

老いを鳴くにえもいわれぬ哀れを感じ、絶妙なしらべが心にひびく。絵描きの小路和伸に描かせてみたい鰯雲だ。もう

一人の自分が雲の上から語りかけてくるという画風。

原田 秀子

爛徳利取り出す夫や冬に入る

一枝の影を映して冬障子

冷酒から爛酒になる立冬、お酒だけは自ら用意される御主人様。切り貼りの一輪二輪が影なす一枝に咲く柔らかな日ざし、生活に根ざした幸せな日常から生まれる数多の佳什。

濃紺の袴きりりと卒業す

ゴッホにも負けぬ菜の花畑かな

青銅の風鐸 躲す初燕

女子の卒業式はよい香りがして華やか、社会人となる決意の濃紺の袴きりりが良い。ゴッホのひまわりの黄に負けぬとの断定がいさぎよい。壇上伽藍の風鐸が鳴りひびく朝を飛び交う燕を彷彿。月欄へ御昇欄おめでとうございます。

石川理恵

肩甲骨はがす体操春深し

行く春や二人つきりの句会閉づ

髪切つて茅の輪くぐりのかるやかに

フレイル予防の体操実践中の筆者には、肩甲骨はがすに興味津々、猫背に効きめありそう。二人つきりの句会閉づが気

にかかる継続を祈るばかり、惜しむころの行く春が尚更に茅の輪をまたぐその一瞬の明眸の緊張感ありありと。

それぞれの道それぞれに青き踏む

まだ巧く鳴けぬつくつくほふしかな

春になった喜びを満喫し足でじかに踏む実感あり、はたまた青春や人生の進む道とも考えさせる。秋を焦がれ待つ作者が聴いた法師蟬への愛が伝わり平仮名表記が功を奏す。

小林京子

奇人住む木戸に絡まる烏瓜

夜会巻のほつるままに冬の霧

初富士や明日は箱根へ勝ちに行く

変人ならぬ奇人なのがよい。カ行で独特の調べを生む。ほつるままに憶測をたくましゅうする。夜会巻でなおさらに。初富士と勝ちに行くで箱根駅伝と分らせる技に瞠目。自由闊達な気風で句作りの楽しい一年であったに違いない。

春炬燵結婚するかしないのか

籐椅子の父の形に包まれたし

適齢期の孫二人がまだ独身の筆者を代弁してくれている春炬燵である。「マルキスト老い籐椅子の膏質」川村悠太^{あぶら} どうやら籐椅子は殿方に愛されるようだ。

六花

菊池ひろこ

境延昭

龍田姫卑弥呼の国はいまも謎
寒紅や真つ赤な嘘を然りげ無く
山山に砦の跡や山笑ふ

秋の女神龍田姫は、紅葉の名所奈良の龍田山と関連づけられている。紅葉から、三世紀頃の間人卑弥呼が君臨した地方の特定が未だであることにまで言及した句。寒紅は品質良く美しい。女の嘘には美しいものがあるが、さりげないものが真つ赤な嘘であり得ることは、先刻ご承知である。山山の砦の跡が緑になる「山笑ふ」は、山に砦の跡があることに気づかなかつた向きにさえ、ある種の情感を与える。

靴を手に歩く浜辺のさくら貝
春日傘 傾げ 家庭裁判所

「靴を手に」で、濡れた砂や桜貝の薄さが目に浮かぶ。家庭裁判所に入る際いつものように傾げる春日傘、その人の抱える問題をも想像できる。

十倉和子

浮寝鳥夕さざなみに乗りそるふ
大銀杏一夜哭きたるこの落葉
巡業幟立てば総立ちつくしんぼ

波に揺られて一斉に上下する鳥の描写が巧みである。大銀杏が一夜哭いた結果を「この落葉」と見た佳句。力士の巡業の幟が立った。「総立ち」には土筆への親愛感が感じられる。

大青田継ぐと決めたる仁王立ち
寺を辞すひとりひとり月に月高し

御子息様か、「仁王立ち」という言葉から頼もしさと愛情が感じられる。親族への御仏のお守りを信じながらも、寺を辞す他の人々に対するご加護への思いが見える。

森川義子

計らずも知恵の輪抜けて冬ぬくし
沈む陽に光る潮目や磯千鳥
門の緩む裏木戸春一番
逍遙のいつもの野路の雪の果
存分の川風を抱き遅桜

知恵の輪が抜けた安堵感が、この冬の暖かさを改めて感じさせたという思いが感じられる句。磯千鳥のあそぶ夕べの浜

から潮目の一瞬の光を捉えてある。門は以前から緩んでいたものか。春一番で詩的な情景となった。いつも歩く野路ならでは最後の雪の感慨であろう。遅桜として見ていた木、存分に川風を抱いていると見ていることに思い入れが感じられる。

松井由紀子

分針の音の高まる十二月
松過ぎや雲足はやく昏るる街
沼暮れて梢あかるき枯木道
草笛は別れの合図夕茜
添書に旧仮名ひとつ山の落

十二月の忙しさを分針の音で表した佳句。雲足のはやさに松過ぎの昏れ時を見た目は鋭い。暮れた沼から見えた枯木道の梢の明るさに気づいた作品である。草笛の句と夕茜から劇的なものが生まれている。届いた山の落の添書に旧仮名をひとつ見た作者の送り主への心情を見ることができた。

菅原卓郎

赤べこの頷く風や吊し柿
芋煮会湯気のむかうの国訛
鰐口を「こん」とひと撞き空つ風
春の野に音色添へたる水車かな

春日傘開く登りの馬籠宿

べこが吊し柿の方からの風に頷いていると見た佳句。湯気で顔が見えないが国訛りは分かる。芋煮会の雰囲気伝わってくる。鰐口が「こん」と一回鳴る。空つ風の野郎だな。人間なら寺院か神社かで鳴らす回数を変える。視覚的描写が多い春の野へ、水車の音が趣を添えることへの気づきがある。「傘開く」で、馬籠の峠越えへの心を決めた女性が描かれている。

佐々木史女

啄まれ明日は落つるか木守柿
出征兵士送りし杜の帰り花
立春や牛歩で今年一年を
万緑や古城にかかる雲が切れ
にはたづみ雲走りゆく梅雨晴間

木守柿とは知らずに啄みにくる鳥。今日はまだ落ちずにあるという思いの作者。出征兵士は一人か数人か、「帰り花」にはそれぞれのご消息への気持が感じられる。立春は志を立てる時、「牛歩で」の措辞が作者のお人柄を表している。古城にかかっていた雲が切れ、これこそ万緑と思った作者である。走り行く雲を潦の中に見る。梅雨の晴れ間らしい一句である。

随所作主

五明 昇

大橋迪代

剪定や紺の法被の勢揃ひ
執刀は美男がよろし聖五月
七半の男盛りが枯野宿

数多の秀句の中から爽やかな男振りを詠んだ三句を抽出し、庭の剪定に勢揃いした職人衆の法被姿はいかにも凜々しい。止むを得ぬ手術の執刀はせめてイケメンの医師にと願うのはご婦人方の本音かも。ナナハンのバイクにまたがって枯野の宿に躍り込んだ男には放浪のロマンが漂っている。

墨の香の大仏殿や牙返る
雨をんな光る梅雨茸見にゆかむ

東大寺の大仏殿には朱印帳に「華嚴」の文字を頂く参詣者が多く、芳しい奈良墨の香が漂う。梅雨時に朽木に光る「シイノトモシビタケ」の妖しさは——。心に響く旅吟の二句。

山中みどり

雷と花火が競ふ隅田川

寝静もるスカイツリーや月今宵
風花や墨堤を行く人力車

昨年は墨田川花火大会に雷が参入し、図らずも花火と共演する仕儀となった。十五夜の月が寝静まる六三四（むさし）の塔を照らす様は神々しいまでに見事だろう。いなせな若者が曳く人力車が風花をつけて墨堤を走る姿はレトロそのもの。東京・本所にお住いの作者が大川端の魅力を詠んだ三句。

藍染めの麻よく似合ふ卒寿かな
頑は無き子戻り夫と見る花火

若い頃から粹を通したご夫君には卒寿を迎えた今でも藍染めの麻がよく似合う。齢を重ね漸う子戻りの過程に入ったご夫君と見る隅田の花火。しみじみとした夫婦愛に感動する。

町野広子

ひこばえや今も故郷に木の駅舎
故郷遥か大平洋の卯波見る
水仙や沖を小樽へ向かふ船

福井生れの作者の望郷の三句を掲出した。故郷に今も残る木造の駅舎には懐かしい思い出が詰まっている。大平洋の卯波に、遠い故郷の日本海を偲ぶ作者の思いはいかにばかりか。水仙の花が咲き乱れる越前岬の沖を小樽へ向かうフェリーには、かつて大阪と蝦夷地を結んだ北前船の面影が宿る。

二度揚の秋鮎頭から食らふ
家族てふ小さきしがらみ晦日蕎麦

焦がさずに中までしっかりと火の通った二度場の秋鮎は頭から食べられる。家族のしがらみは断ち難く、今年も揃って年越し蕎麦を啜っている。何気ない日常の幸せが嬉しい。

松宮保人

啜り込む音も馳走や冷素麺
立冬やカフェの薫る熊川宿
箸で食むガレットの店山眠る

素麺（素麵）は冷やして食べることが多いが、啜り込む音も清涼感を高める一因か。カフェはコーヒーなどの飲料を提供する店だが、場所がレトロな熊川宿とあつては感慨も一入。ガレットはそば粉の生地を薄く焼いたフランス料理で、箸の方が食べやすいかも知れない。食を詠んだ軽妙な三句だ。

野良のまま柏手打つて社日様
通草熟れ断崖に蔓手繰り寄す

「社日」は農業、特に稲作にとつては大切な節目で、野良着のまま土地神に柏手を打つ篤農の姿は尊い。甘い通草あひぢに惹かれて断崖に延びた蔓を引き寄せる作者には著者の童心が疼く。

越田栄子

感性の触れ合ふ君よ花ミモザ
点と点結ぶ縁や夏の星
歩みよる心の距離や青蜜柑

ミモザの花言葉は「優雅」「友情」で、大切な人への贈り物にぴったり。恒星の配置を人、神、動物、物などの形に見立てた星座には、多くの伝説や神話が伝わる。青蜜柑はまだ堅くて酸っぱいが、いつか甘い果実となる予感がある。心の触れ合い、縁、距離感をさまざまに例えて巧みである。

バス停のそれぞれにある秋うらら
暮し振りほのと匂ひぬ白障子

身の周りにある日常の光景を平易な言葉で詠み上げており、好感が持てる。バスが止まる度に刺し込む秋の麗かな陽光、白障子に匂う家々の佇まいが目に見えるようだ。

西幅公子

山小屋の丸寝の鼯明易し
槍に立ち見る日本や天高し
たたなづく穂高を跨ぐ冬銀河

山ガールを超越した山岳俳句に感動した。丸寝の山小屋で高軒で眠れる御仁は本物の山男だ。標高三一八〇メートルの槍ヶ岳山頂から一望する日の本は壯観の一語に尽きよう。奥穂、前穂、北穂、西穂、涸沢岳が重なりあう穂高岳（三一九〇メートル）を跨ぐ冴え冴えとした冬銀河に魅了される。

初場所や廻しをさぐる左四つ
新大関の笑みは決意ぞ春遅し

左差し、右押つけの確固たる型を持つ力士は若元春か。琴櫻は昨年の春場所後に大関昇進、九州場所ので初優勝して綱取りへの挑戦を開始した。相撲好きを唸らせる二句だ。

桜花爛漫

境 延昭

星野和葉

朝日燦つんつん尖る雑木の芽
酒蒸しの浅蜷ぷあつと気がよれる
ふはりといふ他は術なき春シヨール

いきなりの擬態語にその効能に舌を巻く。世の通常の修飾語にない新鮮味があり、作者独自の詠法となる。作者の感覚が頼み、成功の擬態語は作者の造語に近い。写生が句に昇華の過程に特別な装置でも有りそうである。

群游の目高一瞬散り散りに
膝枕の額の秋の蚊いかにせむ

亡夫は水明前主宰の光二氏、今年十月に七回忌を迎えた。夫唱婦隨の仲睦まじいご夫婦であった。在りし日を偲ぶ夫恋の一句である。

永野史代

嫋やかに灯台を抱く春の海
樹樹と風風とわたくし風薫る
ゆふぐれはホルンを鳴らすかたつむり
作者の句には独特の空気感がある。おらかな景の中に満ち足りた作者がどっかり座っている。ポエムの持つ本質を外さない。作者には今もまだ青春の風が吹いているのだ。

梅雨晴や散髪し合ふ夫と妻
今年またわたくし色に年暮るる

梅雨晴れの句、安穩で幸せな日常が平易に表現されている。一方、色と形のない句を難なくものにしてしまう。全てわたくし流が決まるのである。

森本早苗

満面の笑みと桜とランドセル
新樹光嫁御収まる蛇の目傘
風薫る港神戸の色乗せて

句の場面設定が見事である。名匠の絵コンテを見るようで、物語の始まりを思わせる。風薫るの句、六甲中腹からの景と
思う。地元神戸を自慢の気分がある。

初旅や踊る阿呆に成り済ます
きつね面着けて入りたき枯野かな

作者の水明賞、季音賞受賞の際の隠し芸を思い出す。南京玉すだれと腹話術の手製の相役人形とのダンス共に見事な芸達者であった。

梅澤佐江

城跡を八方攻めに田水張る
つづら屋の漆の匂ひ路地薄暑

八方攻めとは面白い表現である。四方八方に田水が張られ恰も城跡が孤立したように見えた。つづら屋とは葛籠の工房であり商う店。上品は強い和紙を重ね漆を塗り防湿・防虫の効果がある。現場を知らぬ者を納得させる力量がある。

鬼の子の浮世をのぞく日和かな
木偶人形に命吹き込む西鶴忌
綿虫に思慕の重さや人恋し

旺盛な知識欲には舌を巻く。作者の吟行はまるで取材記者、細かなメモを欠かさない。しかし豊富な知識を抑え、句面にしやりしやり出さぬのが好ましい。

檜鼻ことは

せせらぎへ晒す右の手柿若葉
石ひとつ投げて家路へ冬の川

初夏と冬、季は違うが共通の爽快感がある。小学校高学年ほどの少年を思い描く。句に漂う気分と言う他はない。作者

の胸には今も少年の様な清新な気風があるようだ。

焼きもんはいづれは割れる春の夢
美しき箸の使ひ手初秋刀魚
行く秋や草の庵に立つ煙

焼きもんは陶磁器を指すローカル色の強い表現、作者の住む若狭に近い白磁で名高い出石焼を想像する。はかなさかそれとも諦観か。見た春の夢にも因りそうである。氏は水明の姉妹紙「鳥羽谷」主宰、活躍を願ってやまない。

梅澤輝翠

土手青む櫛と化したるダンボール
冷酒酌む切子グラスに映る海
紙香水忍ばせて行く盆踊
のら猫に幾多の名あり日向ぼこ
歌留多取りひとときは高き恋の札

ダンボールを櫛にして遊ぶのは近くの大宮第二公園の瓢箪池の土手でお馴染みの春の景である。混雑の車内の強い香水には閉口するが、紙香水なるもの踊りの所作に応じて香る慎ましいものであろう。

「歌留多」は鎌倉末期の藤原定家による小倉百人一首である。恋の歌と言えば、恋多き女の異名ある和泉式部の歌か。それとも「逢ひ見ての…」「君がため…」など想像する。読み手にそれぞれ好みがあり、声の調子でそれを知るのも楽しい。

一陽来復

島津初花

鳥羽和風

赤紙の父は還らず終戦日
葛の花昔土葬の石隠す
父母も鬼籍に入るや法師蟬
黙禱にプレー中斷終戦日
裏返す風の白さも真葛原

毎年巡ってくる終戦日は、日本国民が戦争という悲劇を忘れないための日です。「行つて来ます」と涙で別れた幼な心の記憶のまま毎年この日が巡つて来ます。父を思い出す作者の特別な日なのです。四句目の黙禱も高校野球大会の競技を中斷して会場で黙禱の行われるのも恒例です。

若狭では、子供の頃、死者を土葬する場所が決まって居て、今も空地となつて名残りが残ります。秋風が葛の葉を裏返し濃紫の小花が咲く峡に父母がねむる特別な場所を感じます。

五明昇

鯉こくに余寒を解く峡の宿
生国を信濃と発し春炬燵
三月や別れを急かす発車ベル
木曾節を流す日永の蕎麦処
大八州浮かべて揺蕩ふ春の海

大八州、生国は信濃と自己紹介から始まります。鯉こくでどっぷり籠もつて居られた様子。信濃の冬も三月の声を聞くときすがにじっとして居られなくなった作者です。コロナで禁止されていた旅行も解かれ、先ずは近場からと。木曾節の流れる蕎麦処で満喫とはいいいですね。

最後の句、日本地図を広げてみれば、春の海に揺蕩う大八州に、まだまだ行きたい処は満載です。さてどちらへ……。

近藤徹平

歌がるた一瞬早き華奢な指
師範代の組手披露や初稽古
冬萌やビルの谷間の不動尊
寒卵シエフは手練の片手割り
寒日和荒川を発つ練習機

年が明けると新年の行事が始まります。歌かるた大会も二

ユースに上がり、華奢な指から連想しますと、指先が細く、反応が素早い事から晴着の少女と思われれます。

空手の初稽古の会場に、師範代の少年が模範の型を披露する場面が浮かびます。

春の陽気の荒川添を歩いていると空に多分練習機と思われる小型飛行機が見えた。立ち寄ったランチの店のシェフは、片手でコッソリと卵を割る手練れ技に感服された様子が見えま

小倉倭子

別所沼日永の影の二人連れ

来世でも水明俳句花の影

振り返る句道に帰心いぬふぐり

いぬふぐり星屑咲かす野辺を行く

忘却とは寂しき想ひ三月十日

浦和近くにお住まいの皆さんが良く別所沼の句を作られるので、ある時若狭の四人で、帰りの発車時刻までの間に別所沼を訪ねたことがあります。

噴水と戯れる水鳥、沼周辺で遊ぶ人、かな女句碑などの句材はいっぱいあることに納得しました。散歩していると足元にいぬふぐりが星のように散らばっている様子も一句に。

最後の句、三月十日。東京大空襲によって多くの命と家を失われた事は決して忘れることは出来ない日です。

篠崎紀子

富士山を窓より拝す初景色

初景色ただ一筋の雲を追ふ

早梅の香りただよふ日暮かな

早梅や何はともあれ酒旨し

早梅を竹筒に差し香り増す

富士山と聞いて、この句に出合えた事に感謝します。窓を開けると目の前の初富士と対話などと誰にも邪魔されたくない初景色ですね。梅の花は春一番に咲き、香り良く。さらに一枝活けても背筋がピンと張る心地して、一献それも良し。

菅原真理

水盤の余白が語る華の道

真青なる海を泳ぎし鰯焼く

たつた一駅武蔵野線の秋の旅

冬木立その生き様の美しきかな

新珠賞受賞おめでとうございました。自選二十句の中から一句一句飾らぬ言葉が爽やかさを連れてすつと心の中に入ってきます。たつた一駅で充分満足出来る旅など一度でも経験したいものです。(真青なる海を泳ぎし鰯焼く)などは洗練された句づくりと海の色に青が一際鮮やかに心に残ります。

心情を詠ず

松宮保人

茂木和子

裸婦像のまとふは春の光なり
代る代る抱かるる赤子桜餅
踊るなら桜吹雪の真ん中で

何処かの公園だろうか。膨やかなブルンズの裸婦像が暖かくなつた春の光を纏っているかの如く柔かく光を放っている。知り合いの赤ちゃんなのだろうか。あまりにも桜の花弁のように可愛いので、皆んなが順に抱かせてもらう。当の赤ちゃんは大変でしょう。踊り好きの貴方なら輪の中に入って踊つたのであろうと想う。

母が居てその母がある日日草
父の胡坐にすぼつとはまる素足の子

日々草とは、初夏から晩秋まで次々と花が咲くのだそうだ。母が居てその母が居ると言うことは、親子三代が居ると言うことなのだ。少しずつ世代が変わって行くが、健康で毎日を通せることはありがたいことなのである。

石山かつ子

田仕舞の煙地を這ふ夕間暮

田へこぼれ畑へこぼれて寒雀

農家では一年の作業が終つた後、家族や親戚でお祝いをすることを「田仕舞」と言うが、ある農家ではモミガラくん炭を作る作業が残っている。風のない夕暮には、田のあちこちでモミを焼く煙が地を這うように又、静かに棚引している情景を目にする。ああ秋の農作業が終つたのだなあと思うと同時に一抹の淋しさを感じるのである。

拭き瘦せの格子戸京の路地薄暑
鬼気迫る琵琶の語りや夏の夜
堅琴を弾くも芸なる涼しさよ

古民家それとも旅館の玄関であらうか。京都の古い街並を散策している作者が自ずと句作したくなるような初夏の風情である。又、次の「鬼気迫る」であるが、私も琵琶調を観賞させてもらったことがある。恐ろしく不気味な気配、そして真剣なさま、氣迫にあふれた様子を感じたものである。

鈴木康世

持てあます夜寒の刻を半跏趺坐
春炬燵母の詩吟を聴く姉妹

私の家は曹洞宗なので坐禅につくことが幾度かあつたが、私のような凡人にはなかなか身に付かないものだ。「持てあます」には、暇で時間を持てあます、又手足など体をもてあますの意味がある。作者の謙遜であろうかと思うが、たとえ「半跏趺坐」であつても勇氣と忍耐がいるものだ。

次に詩吟と聞くと大変興味がある。私、何十年詩吟を嗜んでいるが、心身の鍛錬と精神統一、集中心の養生に効果があると言われている。貴方も是非詩吟を始めては。

翡翠の捕食一瞬彩放つ
大夕焼無尽の空を眩しめり
故郷の天のほころび喜雨来たる

かわせみは「空飛ぶ宝石」とも称され、水中の小魚やザリガニなどをとる。その獲物を捕る一瞬に美しい空色の体の一部分を見せるのである。

青木鶴城

梵鐘の余韻を曳きて年惜しむ
雑踏をひたすら生きて鼓草
半夏生後期高齢てふ舞台

大晦日の夜（深夜零時を挟む時間帯）それぞれの菩提寺では梵鐘を百八回撞く行事であるが、「除夜の鐘」と呼んでいる。その鐘の音が各家に流れ来ると行く年の無病息災に感謝し思わず手を合わせたくなるのである。

薄れ行く父の思ひ出流燈会
線香の煙ひと筋虫すだく

自分を一生懸命育ててくれた父であり母であつても亡くなって歳月が流れてしまうと、本当に申訳のないなあと思ながらも現実の暮しに忙殺され、記憶が少しずつ薄らいで行くのである。仏壇に線香の一本も上げようかと思ひ心静かにお参りをしていくと、外には秋の夜の虫達がしきりに鳴いていてではないか。

大場順子

凭れば大樹のぬくみ寒の明
欄干を火の玉駆くるお水取
筍をむけば輝く童子仏

筍とはふつう孟宗竹（中国原産）の竹の子である。皮を剥いて食べられるようになるには、大きなものでも大部小さくなってしまふ。作者が感じたようにまさに瑞瑞しい「童子仏」の誕生というところであろうか。

一品は貴船の風や夏料理
平家谷の裔を守り継ぎ蕎麦の花

昔、平家の落武者が暮しを立てて行くため、代々蕎麦を耕作して守り継いで今に到っている所が日本の各地にある。ロマンがあつて良いですね。

岡田宣子

神苑を掃く巫女ふたり神無月
「考える人」見つめ考ふ冬うらら

秋も深まる頃に神社の境内では、巫女さんが落葉を閑かに掃き清めている光景を詠んだ俳句。何んと言つても新鮮さを感じる。

嬰兒の瞳に映る石罅玉
大方は背広にリュック春の朝
羅の僧侶の読経堂ぬくる

新卒の新人社員朝の通勤風景であろう。スーツ姿にリュックを背負つての通勤。昔はこんな情景を見ることは無かつた。良く覚えて見ると、軽快で活動的であり、何も不自然なところが無いのである。

心の詩

町野広子

波多野寿子

友来り両手を握る小春の日
鈴の鳴る糸切鉞雪の夜
形よき冬至南瓜を両断に

穏やかなある日、友が訪ねて来てくれた。嬉しさと懐かしさでお互に手を握り合う。旧知の友との会話は尽きず、小春日が優しい。手の中に納まる小さな握り鉞は細かい作業に使われる。付けられた小さな鈴が、作業に合わせてチリリと鳴る昔の絶えた雪の夜の一コマ。あの堅い南瓜を両断とは何と痛快なこと。今夜は冬至、小豆と共に甘く煮含めましょう。

眞つ白な僧の鼻緒やお中日
オルガンで弾いた讚美歌聖五月

言われて気付く。僧も神職も白が基調。玄関に脱がれた履物の鼻緒に目が行く作者に敬服。幼稚園も低学年の教室にも置かれていたオルガン。讚美歌にはやはり、ゆつたりと趣きのあるオルガンがいい。作者の優しい笑顔が見えて来る。

石井喜恵

煮凝や少し反りたる落し蓋

晦日そば下宿で啜るカップ麺
手相見に小さき日溜り初天神

寒い朝魚の煮汁が固まり煮凝りとなっている。その鍋の木蓋が少し反っていて、使い込まれた歴史を感じた作者。年末にも帰省せずに年を越す人。カップ麺を啜りながら除夜の鐘を聞く。下宿にいる学生かも知れない今ならではの一句。正月二十五日その年最初の天満宮の縁日である。数多の店の間に、小さな机一つの手相見がいる。冬の微かな日がそこを照らしている。幸運の予感がする。

小流れに笑くば数多やあめんぼう
白芙蓉風の触れゆく喪の袂

池や小川に漂うあめんぼう。その群れが泳いで出来る水の輪を「笑くば」と詠んだ作者の感性。喪装の袂を風がそつと触れて、えも言われぬ寂しさと優しさが入り交じる。白芙蓉の美しさが心に沁みる。

井上燈女

長短を揃へ夫婦の掛大根
子の机使はず捨てず年暮るる

洗った大根を干す夫婦。長短を揃える息の合った二人の、実直な暮らしが伺える。既に成人し家を離れた子供達。色んな物を処分したのに、机だけは同じ場所に置かれたまま。親も子も大切な品。懐かしさに満ちた一句。

菜の花や夕日の中の車椅子
種浸し千の泡生む小さき音
良き事は近くにありて新茶汲む

夕日に照らされる菜の花。一台の車椅子に乗る人と、そつ

と寄り添う人。まるで一枚の絵のような一句。保存してあった種糶を水に浸す。数多の種が泡を出し水を吸う。そして命の音をたてる。平凡な毎日や普通である事の幸せは身近にあるもの。一杯の新茶を味わった時に、ふとそれに気付く。

高島寛治

美しき眼揃へて鰯の競り
初春や鳩は胸から歩き出す

水揚げされたばかりの鰯が頭を揃えて並べられている。その眼は黒く大きく、何かを訴える様にも思える。神社に付き物の鳩。身体の割に小さな頭を振り、発達した胸をつき出して歩く。眺めている作者の穏やかなある一日。

沈黙のアンモナイトにある余寒
手のひらは優しき器初螢
螢火や母に抱かれて居る写真

アンモナイトの大きな物は直径二メートルに及ぶ化石。展示されているそれは、あくまでも沈黙で、春とは名ばかりの博物館は広く寒い。手のひらに乗せた小さな螢。柔らかく包み込むそれを感じる作者の心がなおも優しい。螢を見ていると幼い頃を想い出す。母に抱かれている一枚の写真が、遠い日の記憶に繋がりが胸が熱くなる。心引かれる一句である。

曲淵徹雄

赫灼と雲よせつけず冬の月
春浅し天地返しを待つ
朝桜 仰ぎて眩む 齢人

冴え切った冬空に光り輝く月。一片の雲さえ寄せ付けない

唯一無二の存在である。春には畑も土起しを待っている。立派な野菜を育てる為の欠かせない作業「畑が待つ」逆の発想が面白い。日課として朝の散歩。日々変化していく桜が開いた。仰ぎ見れば朝日の眩しさと、足元の不安定さにふと眩んでしまった「齢人」がいい。

走り終へ遠き眼差しダビー馬
寡黙なる床屋の主人熱帯魚

走る為に極限まで改良飼育されたダビー馬。スタートの瞬間からゴールまで騎手とは一心同体。達成の眼差しを向ける。個人経営の床屋に馴染客が訪れるも主は無口。それが良く通う人が多い。熱帯魚も黙って泳ぐその静けさが良い。

元田亮一

古書街の秋灯ともす喫茶店
ウオトカのお湯割り濃い目冬の月
傘かしげ曇るる橋にすれ違ふ

日中から古書店を巡り、ふと気付けば喫茶店に灯が入っていて、時間の経過を思う。冴え冴えした月の夜には、いつもより濃い目に作ったウオトカの水割が身体を温めてくれる。雲が霰になりやがて雪になる。掲句は冬のはじめ小さな橋の上で傘をかしげ合う奥床しい姿が見えて来る。

初晴や上棟式の餅拾ひ
白杖の友の背中浅き春

地域の風習なのであろう。生涯一度の上棟式。お餅を撒いて喜びのおすそ分けをする。大人も子供も幸を拾う。白杖を必要とする友。その背に春の陽が優しく当たっている「ここ迄よく頑張ったよな」と、友を見る作者の声が聞こえる。

山本鬼之介 選

水明集

駅伝の二転三転神在月
つがひ鶴鶴一声交はし翔びたてり
鶴鶴の声を背に聴き庭を掃く
色変へぬ松の真中や天守跡
落日の三体の影案山子かな

さいたま 岡田宣子

一天の青さを写し秋の川
冷たさが素足に沁むる秋の川
子等が去り川底透くる秋の川
木洩れ日を茸狩の指這ひまはる
ファッションは明るい色と決め秋野

篠崎紀子

江戸情緒遺せし秋の金魚坂
匂だけ残して暮るる刈田かな
アールグレイ紅深々と秋澄めり
通り過ぐすべてが秋の匂させ
防風林越ゆれば碧き秋の海

さいたま 菅原真理

朝霧に船頭の唄消えゆけり
菅笠のとんぼ動かず川下り
源流の一滴はるか秋の川
秋出水中州の形変へにけり
阿弥陀仏まつる神社の秋簾

池田瑠子

青雲の志あり頼祭忌
物語のつづきは明日星流る
猪に放つ一発甲斐の山
母子して胎児のかたち夜寒かな
百年の土間こそ我が家残る虫

小林京子

信濃路や車窓満目蕎麦の花
長生きの秘訣なるとやとろろ汁
秋麗や亀に肖る長寿会
軒下を鑑ふがごとき吊し柿
七粒の仁丹の味秋の味

反町 修

エチユードのごと流れくる秋の川
水草の自由奔放秋の川

さいたま 霜多光代

秋川の丸き小石と言ふ過客
茸狩の遠くなりゆく友の鈴
新米を祝ふ祭りや巫女の舞

当選履歴冷やかに見る籤売場
冷やかに笑ふ彼女の片まぐほ
秋風に棹整へて渡る群れ
秋風に弾むボレロのリズムかな
星月夜青き夜空を飛行船

利根 倉田星歩

薪風呂の火の粉の行方黍風

寺町知子

秋さびし遠くとほくのひとつ星

さいたま 飯田忠男

野分過ぐ芋の葉そりり立ち上がる
コスモスや甘え上手な女の児
良夜かな陸橋といふ特等席
秋の宵ひそかに刻む置時計

マネキンの服を脱がすも秋思かな
望郷や奥つ城に揺れ吾亦紅
物価高裂けた石榴が呆れてる
朝冷の電柱信号は赤

午前二時秋思の先の絵空事

清水桂子

道訊かれ教ふる指や秋の風

平塚 丸屋詠子

誰が為の涙の宿り蛩草
高望みせぬ身の丈よ十三夜
路地裏に残る駄菓子屋秋さびし
秋の朝望みつなぐる平和賞

針に糸やつと通して夜半の秋
秋寒し座敷童の住む里へ
我が街の空を椋鳥占領す
秋風や音沙汰のなきなじみ客

溯上する魚頭の滾る秋の川
新涼に尖る灯台天を刺す

皆川更穂

湯の町に漏るる二上がり星月夜
我が影の映るガラス戸秋ともし

さいたま 大熊健司

ふるさとの門火を撫づる通り風
蓑笠や雨を甘なふ捨案山子
熊避けの鈴の罨や菌狩

廃業の貼り紙夜の露しとど
鄙の宿膳に地酒と秋の鮎
昔ほど鳴らぬ口笛花野行く

秋懐のにぶき楳音川下り
老農の黙の湯治や曼珠沙華
披講する声に減り張り菊日和
跂望する富士の入り日や破れ案山子
猪をさばく孤老の武勇伝

伊奈 菅原卓郎

三代の夢の杜影竹の春
落日や刈田に浮かぶ影法師
嗚へと鴉飛び立つ刈田かな
わが秋思リユツクの底の古写真
ぴか・どんの無きを望めり星月夜

越谷 阿部幸代

秋寒や夜の引継ぎナース室
茅葺きの軒端に光る吊し柿
湧水に沈む白雲水の秋
金木犀風に零るる遊歩道
うそ寒や村に伝はる神隠し

さいたま 加藤でん治

秩父嶺に抱かれ刈田は休眠に
群れをなし尾瀬の空舞ふ赤とんぼ
飛ぶ姿刺繍にしたき赤とんぼ
秋色の信濃路ゆけば母の里
「考える人」ブロンズ像の秋思かな

さいたま 山岸久美子

達人の不気味な寡黙茸狩
船頭の思はぬ美声秋の川
いせ辰の藍染泳ぐ秋の川
新米の三角にぎり旅かばん
曼珠沙華奥州の地に炎立つ

新 曆文

新涼の朝市朝採り蟹の声
満天の星に応へて水澄めり
水澄みて湖面にしんと山を置く
露けしや青磁の壺の肌にも
花嫁の金欄緞子山紅葉

本橋稀香

露けしやわれに二つの泣きぼくろ
栈橋の出船の銅鑼や露の袖
青く透く手の血管や秋灯
寄席跳ねて小さんを偲ぶ走り蕎麦
品書の筆文字細し子持鮎

森美枝子

秋惜しむ溪流朱く染まりけり
息合はず雅楽の世界秋惜しむ
山水に遊び暮れゆく秋惜しむ
平和賞祝ふ栗飯被団協
見上ぐれば仁愛の額秋深し

千坂平通

新蕎麦は常念岳の水つけて

さいたま 森下山菜

レクイエム奏づる釣瓶落しかな
冬隣目病み地藏の目には味噌

冷まじや「血まみれマリ」垂るる顎
蛇笏忌の甲斐の草木は軽く折れ

星流る小瓶に入る星の砂
流れ星戦禍の子等を眠らせて
瓜坊やどうぞどうぞと譲る婆
枕辺に詩集の在りて賢治の忌
風どどど北上川へ胡桃落つ

さいたま 綿引まりこ

十月の空を伸びやかアルト笛

大阪 遠藤人美

盆栽の並ぶ大棚小鳥来る

生真面目に茜空ゆく雁の列

一膳のもろこし飯の和睦かな

夕暮れに柝の音極まり色葉散る

水澄むや嘘の上塗り映る顔
水澄むや谷の宇宙に規律あり
蓑虫の声聞きたげに風の吹く
蓑虫やそつと顔出し目を逸らし
秋の暮四通八達街灯り

鈴木香音子

試験終へて秋の風受けバスに乗る

さいたま 元田亮一

疾風の二年過ぎたる秋の朝

秋の日のやり取り絶えず骨董市

抑揚なき「次は終点」夜寒かな

ゆつたりと秋風に乗る星の声

赤とんぼ保育園児の肩の先
十五夜に親子五人の長き影
球場のトライアウトや竹の春
闘病の義妹の果ての赤蜻蛉
遠近の眼鏡新調秋涼し

阿部貞代

をちこちに夫婦や青き秋の蝶

団栗に兎の気づきたる早さかな

三輪車支ふる兄や櫟の実

桃色のキックボードや秋日和

秋の蝶精尽くるまで空高く

吉川拓真

上尾 室井早都子

六弦を締めつ鳴らしつ秋灯
庭先の猫が足振る草の露
白露に尾羽を濡らし寺の鳩
信心に勝る新蕎麦善光寺
落鮎の旅は片道夜半の酒

かぐや姫還り来さうな竹の春
転職し再起の娘竹の春

秋晴の銀座四丁目の雑踏
秋晴や能登からも来る県人会
飛ぶ虫と会話し庭掃く秋の晴

実家より新米届き手を合はす
スーパーへ枝豆買ひに行く息子
芋煮会なかなか出せぬ土地の味
店頭に吾を招くや久喜の梨
味はふや一粒ごとのマスカット

秋の灯や猫には猫の影法師
新蕎麦を音無く啜る法事客
朝の露のせて野菜の御裾分け
秋の灯や墨の香残る朱印帳
落ち鮎やどつと日暮るる山の宿

歳時記に葉としたる紅葉かな
水引草ぼつぼつと来る山の雨
秋風や半分に割るメロンパン
鯉ゆらり波紋広がる池の秋
ねんごろに間引菜洗ふ女の手

さいたま 北出久美子

杉戸 佐々木史女

さいたま 穴戸洋子

若狭 山崎郁子

週末の予報は雨や龍田姫
訳ありの二人色無き風の中
行く秋やいよよ濃くなる法令線
尻取りのやがて喧嘩や秋の行く
言ひ訳をせぬ好漢よ冬隣

約束の果たせぬまや龍田姫
秋行くや夫かたはらにあるやうな
行く秋の社の幟ついでと出づ
風空のまん中にある龍田姫
十三夜教師口調の言ひ訳や

白さ増す輪島漆器の新豆腐
聞き役に徹する夫や新豆腐
人生を味はひ尽くし新豆腐
園服のポッケに隠す鬼胡桃
川か地か胡桃落つる場運しだい

あと一回「18切符」鬼やんま
碧き眼が北斎の道栗の道
末枯や箱だけ残る配置菓
短日や包み余りし餃子たね
誤字多き訃報のメール十三夜

川口 木村小麦

新井のり子

所沢 飯室夏江

さいたま 田中弘子

秋風やミサイル落つる日本海
末つ子は四児の父なり鯛雲
新蕎麦や相席で喰む黙の客
眠る森どんぐり落つる音幽か
霊場の靈気震はす鹿の声

若狭 松村笑風

秋澄むや遠くなりゆく貨車の音
スカイツリーの東京の空秋澄めり
お遍路の背を押す釣瓶落しかな
小鳥来る望遠鏡の視野の中
小鳥来る天気予報は雨模様

さいたま 竹澤和子

色づきし実に早々と小鳥来る
ややの笑み情愛誘ふ秋日和
検査良好晴れ晴れとして刈田道
水琴の音がとどくや秋澄めり
山道を釣瓶落しの帰路急ぐ

さいたま 森下美智枝

秋澄むや鳥になりきるグライダー
童謡流す釣瓶落しの拡声器
過去消されをりし私や秋彼岸
秋風や防虫剤の香り立つ
ランチ後映画釣瓶落しの帰路につく

小川洋子

悠久の時を紡ぐや走り星
精霊の爆ずる息吹や流れ星
岩陰は猪の縄張り水入らず
秋深し千のたましひ風となる
禊して供ふる柿や百度踏む

秋谷風舎

法要の参道灯す石路の花
泡立草はびこる土手の凄みかな
神有月速報響くノーベル賞
冬ぬくし脇に半裸の仁王像
初霜や学童通ふ靴の跡

若狭 岡本祥子

爪を切る親を看とりし夜半の秋
来し方を振り返る歳になり秋
我が脳は活動自粛秋の夜
達筆な友の字揺るる夜半の秋
夜半の秋スマホで童話読み聞かせ

東京 畑宮栄子

策をねり鳥と張り合ふ残り柿
星飛ぶや明朝に着く船の宿
遮断機の下りて遠くに流れ星
栗をむき存分に食ふ夕餉膳
蹴散らすや勝手知つたる山の猪

さいたま 篠原さよ子

黄金色祖父と見まがふ案山子かな
穂が垂れて案山子が払ふ田圃かな
天高し十分間の空散歩
秋風や笛の音聞こゆる一ノ谷
秋祭下に下にと槍が舞ふ

さいたま 小駒さち子

常念の稲妻横へ走りけり
空堀を攻めのぼりたる藪枯らし
アマゾンの吠え猿の声星月夜
俊寛像迎へ船待つ星月夜
新蕎麦のつゆは辛めの江戸好み

さいたま 石黒由美子

チャップリンのごと忙しなき石叩
亡き夫へ恨み言添へ菊脛
怪しばむ路地を鶺鴒すましゆく
「食べちやうの」幼にピンク菊脛
あつけらかんと刺青腕に紅葉鮒

吉川 杉浦千祐

清秋や樹木の息を聴きをりぬ
魚河岸に太き声とぶ秋刀魚漁
釣糸を垂れて居眠りはぜ日和
秋茄子や忘れし頃に二つ三つ
幾何模様一糸乱れず雁来る

和歌山 嶋田洋子

お下がりのジャージを纏ふ捨案山子
成田屋の睨みきかせて立つ案山子
城址の竹春分つ外環道
ゆつくりと杖つく母に赤蜻蛉
「月見てる」ラインが繋ぐ月今宵

さいたま 高山みどり

団栗のはかまを並べ思ひはせ
秋の夕日にもみぢの如き木の姿
家々のすき間からみる宵の月
彼岸花木もれ日受けて立ちすまし
切り株の並ぶ刈田に山望み

東京 大島千恵

浜風と「六甲おろし」呼ぶ野分
列島を「ガメラ」過ぐごと野分跡
そぞろ神に誘はるるまま月夜草
果樹園の二十世紀の棚低し
彼方此方が亜熱帯化の野分あと

平野 楽

年経ても変はらぬ思ひ流れ星
猪や全力疾走耳かさず
山粧へば林道ゆくもまた楽し
胡桃採り食するまでの待ち時間
生存のわからぬ友や七竈

さいたま 川島夕峰

無農葉田の案山子の目くつきりと

さいたま 前田夏野

田遊びや昔語りの豊年祭
栗剥くや三つ目転げかくれんぼ
師の三味に合はせ琴弾く秋の夕
「黒髪」の楽譜何処に白式部

暮の秋法令線の窪みかな
施設入り決めたる叔母や暮の秋
残る虫疲れたる夜の内耳かな
列に沿ひ十キロ完歩秋の空
繕ひは諍ひの穴障子貼る

さいたま 木谷葉子

秋の雲ビル立ち並ぶ城下町

三浦真由美

彫り深き店主は寡黙暮の秋

石井直子

蕎麦店の水車の陰に残る虫
洞窟の遺跡の仏残る虫

伊勢志摩ゆきの列車入線柿日和
栗駒の無人販売柿の秋

手の甲に見つくるしみや暮の秋
暮の秋金色堂の荘厳さ

菊日和数寄屋造りの屋敷町
茸狩ちらり横目で籠の中

旅の夜や猪鍋囲む伊那の里

宮代 中村留美子

秋晴やぐんぐん飛ばす高速道

湯浅 和

束の間の流星仰ぐ二人かな
単線の小さき浦浦カンナ咲く
雨止んで一層赤き蔦紅葉
闇裂けて地鳴りの如く鳥渡る

秋晴や門の仁王が伸びをする
幾歳月錆しレールの花野かな
口笛のかすかに流れくる花野
秋晴れて遠き赤城が近くなる

夜の湿り隙を窺ひ茸の生ゆ

東京 山中いちい

竹の春厨の窓に一つ星

北山建治郎

紅き茸闇に誘ふ森の縁
山宿の土間の彩りきのこ籠
歓声や茸香りたつ土瓶蒸し
夜長かな二度目の湯浴み旅の宿

くねくねと念仏寺の竹の春
秋晴や婿の来る日の薄化粧
秋晴に家族写真は皆背伸び
河童釣り胡瓜吊して秋うらら

日々続く平和な暮し冬うらら
詠む人の詠み込む気迫枝垂梅
梅林の千の蕾が万開く
生き生きの余生を想ひ日向ほこ
風花の花の刹那に青き空

さいたま 香田裕誌

百体観音数へて登る信濃秋
木道をリュック連なる尾瀬黄葉
衣被店主の高声じつと耐へ
信濃路の秋の旅路や七曲り
わびとさび午方宿に秋ともし

さいたま 山下ユリ子

ほつこりとうれし香し栗ご飯
雨止めば勢づきて虫集く
秋七草疎遠をわぶる面々と
秋の夜の眼鏡はづして宙仰ぐ
木犀の香る裏道人の声

東京 柳父はる

衣被夫と分け合ふコップ酒
あきもせず昔話を衣被
久久の母との会話衣被
校庭の銀杏黄葉や子ら元気
雨の庭銀杏黄葉の明るさよ

高原和子

落鮎の家路を急ぐ思川
土の香の混じりて花の盛りなり
落鮎に踊るが如き化粧塩
聖母マリアを慕ひて起こる大花野
落鮎の命を繋ぐ木曾三川

さいたま 落合和枝

夜長なり誰ぞ訪ねてくれまいか
秋の川笹舟無事に流るるを
鳥獣戯画に迷ひ込みたる夜長かな
水筒に残りし水や日暮急
野良猫の薄目開けたる秋思かな

小山あつ子

太刀魚や串に刺したる焼き加減
一斉に変はる信号落葉ふむ
雁や群れで飛び立つ朝の空
雁渡る津津浦浦の母集ふ
友の事ふと思ひ出す秋の暮

和歌山 南條きわゑ

次々と刈田の空へ熱気球
スーパームーン鎮座タワーマンションに
彗星のつるべ落しや永久の旅
刈り集め束ねて活けてねこじやらし
鉛筆を削り続ける夜長かな

駒谷行雄

日帰りの伊香保の花展秋日和
秋うらら診察前の深呼吸

さいたま 武田重子

出発の号砲高き秋日和
探索の見沼十キロ小鳥来る
今年米計り売り場の長き列

朝明けや岩を翔びたつ黄鶺鴒
稲妻や妻と二人の夕仕度
靴底の汚れを落とす秋の山
鎌を置きマッチの香る稲田かな
哀楽を見守る能登の案山子かな

さいたま 播磨 進

減反や納屋に横たふ今案山子
減反や案山子横たふ納屋の外
衆議院解散するや桐一葉
諸の蔓を刈りて園児ら待つ農夫
白檀の色なき風の増上寺

糸井しるく

海底に元寇の船秋の晴れ
抜け出せば妖気の失せし芒原
角打ちや店主の奢り新走り
秋来ぬを水の教ふる手水鉢
越後より届きし新酒猫と酌む

鈴木藻好

夜嵐に肋をさらす案山子かな
椀抱へ三三五五の芋煮会
待宵や「宇治十帖」の恋は闇
蓑虫の雌よ世の中見ぬままに
ほんとの空安達太良山の水の澄み

羽島秀子

時々は首をかしげて赤とんぼ
十代の思ひ出ひとつ十三夜
すずなりや赤く色づくなつめの実
藤の実の日に日に重くたれさがり
二歳児の歩け歩けと秋の夕

藤岡 加藤ナヲ子

店主との新酒の会話唾を飲む
空きつ腹染むる新酒にうつとりと
そろそろか新酒に問ふや十七時
行く秋や朝の迷走今日の秋
冬隣城壁のプロジェクションマッピング

小田三茅

とろろ蕎麦町の灯と味はひて
近づけば息ころしたる残る虫
明け方のバイクの音や残る虫
街路樹の赤き実見上げ秋深し
半袖の染みみつけたる秋の暮

さいたま 今西 操

やつと来し祭り太鼓に虫時雨
運動会一位通過の孫娘

東京 桐山遊童

まつたけを焼いてほぼぼる夢心地
稲を刈り田んぼアートで呑むお酒
秋晴に檜の小屋であく初日

深沢りこ

原木の椎茸刈られ立ち並ぶ
土手に生ゆる白き茸に見入る人
長き夜をいくとせ経たる楠よ
年輪を刻みし切株放置され
舞茸の歯ざはりよけれ鍋つつく

藤 沢 小島喜代子

誕生日あわてて咲きだす金木屋
故郷に向いて孤独の曼珠沙華
喧嘩して泣きべその帰路罽雲
毒秘むるダチュラは白し夜半の秋
起き抜けの体操さぼる秋の雨

東京 清水美千子

父の忌に供ふる好物芋煮汁
「また明日」子らの声する秋夕べ
衆院選挙選ぶ人なし敗荷
ハロウィーン南瓜も魔女も高笑ひ
どこにあれつましく強き野菊かな

さいたま 伊藤美津子

稲穂波SL待つやカメラ手に
行く秋や表札外し家じまひ
行く秋やわたしはどこへゆくのだらう
秋澄むや防災訓練声は「よし」
新酒の香したり顔する下戸なれど

石関六弦

緞帳のゆるりと下がる暮の秋
行く秋や縄文土器の波模様
太古より追ひつ追はれつ稲雀
結界の扉開けたる遠びぐらし

横山礼子

野良犬の昏き眼や捨案山子
影長く野道に映る案山子かな
ゆるキヤラの案山子並びて鳥追はず
秋霖や新聞届く午前二時

門真宏治

好きだけ鳴いて下さい残る虫
長生きに良きこともあり残る虫
残る虫これから俳句入門す
大谷のホームラン長寿の秋のプレゼント

長子生れ岡一面の秋桜

小学校行事刈田に母子遊ぶ

昏れゆきて富士の遠望刈田原

金木犀香る垣根の立ち話

秋天や庭師の鋏よくひびき

街案山子見覚えのシャツ父の服

揚揚とメダル下げたる案山子かな

割引は三パーセント栗おこは

輪になりて役割分担くるみ割る

胡桃割り三代揃ふ里の膳

夫曰く「黙つて食べろ」新豆腐

慎重にしゃうゆ一滴新豆腐

十三夜望遠鏡に見るくぼみ

藤袴から浅黄斑の現はるる

本を読む木蔭のベンチ初紅葉

初挑戦成長をみる運動会

宮代 関谷多美子

さいたま 樋口元美

緒方みき子

鬼石 榊原聰子

行合の空にはかりて双つ星

秋の日の静けさ無上この稔り

紅葉舞ふ白亜の書架に君は居り

多羅葉のメモに鬼灯そへ去りぬ

庭先にたわわな蜜柑空き家にも

洪柿に夢重ねつつ眺めをり

陸奥の心奪ひしマスカット

埼玉やフルーツ王国梨葡萄

秋寒しのど飴三つポケットに

過疎の谷村守り人の案山子たち

師の描く栗ほつこりと秋深し

コスモスにかこまれてゐる母の笑み

蝶生れ碧き地球は黄金色

流星や以心伝心乾杯す

星屑は丘に降りゆき瑠璃草に

駄頭の肩より沁る春シヨール

さいたま 大熊道郎

榎本道代

稲野幸子

所沢 関根千恵

藤沢 藤田寛二

作品鑑賞

山本鬼之介

つがひ鶺鴒一声交はし翔びたてり 岡田宣子

スズメ目セキレイ科の小鳥の総称と説明されている鳥である。日本に棲息しているのは五種類で、その内の背黒鶺鴒・黄鶺鴒・白鶺鴒の三種が河原や畑地などで、また時には住宅地や人通りのある市街地で見掛けることもある。季語「鶺鴒」に「石叩」「庭叩」という傍題があり、その長い尾を上下に小刻みに振る習性を上手く表している。また、「妹背鳥」とか「恋教鳥」といった傍題もあるので、鶺鴒と同様に雌雄の仲がよろしい鳥なのであろう。

たまたま作者が見掛けたのが番と目される二羽の鶺鴒で、しばらく一緒に尾を振りながら近辺を飛び回っていたが、その内どちらからともなく声を交わして飛び発って行った。人語であればどのような言葉であったのか、いろいろと想像を巡らし、心豊かなひと時を過ごしたのであった。

一天の青さを写し秋の川 篠崎紀子

一片の雲も無い完璧な秋空である。そして、その下を流れる川も非の打ち所の無い清流である。余りにも舞台が整いすぎていて気色が悪いとも言えようが、作者の目には、川が空の色に確りと呼応しているのが判るのである。申し分のない好日に心を満たされた作者の歎びが溢れている作品である。

匂だけ残して暮るる刈田かな 菅原真理

好天に恵まれた一日、撓に実った稲が刈り取られ、その景色を一変させた稲田である。西空を染めていた夕陽が沈み、夜の帳が下りようとしている時刻、農夫の周囲には何も無い薄闇の空間が広がっている。無事に稲の収穫が出来た喜びとは別の寂寥感を感じているのではなからうか。しかし、豊穣の稲の香だけはしっかりと刈田に残されている。農夫に与えられた田の神の褒美なのである。

源流の一滴はるか秋の川 池田珪子

周囲の紅葉を映して流れる川縁に立ち、この川の源に思いを馳せている作者である。源は、雲を従えるような高山かも知れないし、源流が少しずつ流れの幅を広げ、水嵩を増してくる間に幾つもの人里を通り抜け、多くの人の目に触れてきたのであろう。そのようなことに思いを巡らしていると、普段思ったこともない物語が生まれてくるような気がしてくる。秋という季節がもたらす心の高揚であろうか。

百年の土間こそ我が家残る虫 小林京子

築百年にもなる旧家の土間を想像すると、そこから数多くのドラマが浮かび上がってくるような気がする。敲き土にした土間も風情があるが、何ら手を加えず自然のまま時の経過によって仕上げられた土間はより一層の風情があると思う。生まれ育った実家の土間に立つと、其処を起点にしているような想い出が還ってくる。晩秋の一夜、土間の隅から聞こえてくるか細い蟋蟀の声に、一人心の疼きを覚える。

今年も昭和元年から数えて丁度百年、「昭和も遠くなりなけり」を実感する。

七粒の仁丹の味 秋の味 反町 修

昔は仁丹の愛用者が多く、街や駅のホーム、電車の中などで仁丹を口に放り込む人をよく見掛けたが、今はこういう光景を見ることは稀である。それにしても几帳面な人である。七粒という量がその人にとって快いものである。秋の爽やかさと共に、清涼感を一層引き立てる七粒の仁丹である。

茸狩の遠くなりゆく友の鈴 霜多光代

そこそこの高さの山に入って茸狩をしている。茸狩バスマアナーなのかも知れないが、皆が熊除けの鈴を携行して茸を探

している。今まで一緒にいた友の姿が消えて、鈴の音が離れてゆく。ついつい夢中になる茸狩である。

良夜かな陸橋といふ特等席 寺町知子

旧暦八月十五日の名月の夜か、旧暦九月十三日の後の月の夜の何れかであろうが、夜の散歩か外出の帰路か、顔を上げたところにまん丸の見事な月が輝いている。俳句で詠んだ良夜を実感し、道路を渡る陸橋の鉄柵に凭れて改めて鑑賞した。たまたま他人が通らず、貸切席の醍醐味を満喫した。

路地裏に残る駄菓子屋秋さびし 清水桂子

駄菓子屋は子供の頃の郷愁として心の奥に仕舞われている。作者と同様の年齢である筆者にとっても、町の片隅で婆ちゃんや細々と営んでいた駄菓子屋へ、小銭を持って毎日のように出掛けた頃のことを懐旧される。水飴・伸し烏賊・ゼリーなど、今になって思えば不衛生の塊のような店であったが、終戦当時の子供には天然の抵抗力が備わっていて、皆丈夫に育ったものである。

昔に比べれば店構えや商品の様子も違うのだろうが、近年いわゆる駄菓子屋が復活しているようである。掲句の駄菓子屋は、代替りして昔ながらの商いを続けているのかも知れないが、客の居る様子はなく、枯葉のような寂しさがある。

蓑笠や雨を甘なふ捨案山子 皆川更穂

近年では、田や畑に案山子が立っている景色を観る機会は減多に無く、ましてや蓑笠を着けた正統派の案山子にまみえる機会は皆無と言っても過言ではない。本句の案山子は、その年の役目を終えて田か畑の脇に捨てられた案山子であろう。そぼ降る雨にどつぷり濡れた蓑と笠がその哀れさを強調しているし、「甘なふ」の一語が人間のエゴを表現している。

星月夜青き夜空を飛行船 倉田星歩

快晴であった昼間の空がそのまま続いているような夜空なのであろう。星が瞬き月が出て明るい夜空を飛行船がゆっくりと進んで行く。有人なのか無人なのか、何処から何処へ行くのか、その目的はと、いろいろと疑問が湧いてくる。作者の眼は、嘗て「少年倶楽部」を読んだ冒險少年の頃の気持であり、今、謎の飛行船の行方を追っている。

秋さびし遠くとほくのひとつ星 飯田忠男

所属句会では、自他共に「天文博士」で通っている作者である。太陽や月、星や星座に関することで質問すると明快な答が返ってくる。秋の一夜、庭に出て宵の明星（金星）を眺めている作者。幼児のように、見えている星に手の届かぬも

どかしさを感じているし、金星も同じ思いをしているのではと、たわいないことを思ったりしている。まさに秋懐の情である。

道訊かれ教ふる指や秋の風 丸屋詠子

街で道を訊かれたり、また、逆に道を訊くことがあるが、口頭だけの説明よりも手指を使つての説明の方が分かり易い。教える場合、自信があれば手指が明確に動くが、少しでも疑問があると手指の動きが鈍くなる。この俳句の場合は如何であらう。快い秋の微風を受けて動く人差し指はぴんと伸び、自信を持つて分かり易く道を教えている。相手は感謝の目差してその場を去って行く。

昔ほど鳴らぬ口笛花野行く 大熊健司

口笛を鳴らしながら花野を遊歩するのは気持よいものだろう。昔は、行き交う人や飛ぶ鳥までもが驚くほどのかつこい口笛が吹けたが、寄る年波には勝てずもどかしい。しかし「昔取った杵柄」で気分よく花野道を歩いて行く。

猪をさばく孤老の武勇伝 菅原卓郎

今では現役を退いた老ハンターなのであろう。久し振りに猪の大物を射止めて捌いている。傍で仕事ぶりを見ている里

人が昔のことを質問すると、重い口を開いてぼつりぼつりと熊や猪を射止めた昔の戦果を語り出す。戦国時代の武将が敵将の首を挙げた時のような高揚感に包まれているのであろう。古老ではなく「孤老」の文字に人物像が刻み込まれている。

秋寒や夜の引継ぎナーズ室 加藤でん治

季節感と共に緊迫感の走る俳句である。一週間から十日程の短期間ではあるが、数回入院経験のある筆者にとつて、病院のナーズ室における夜の引継ぎの緊張感が理解出来る。定時における看護業務とは違い、最小限の人員で一夜を対応しなければならぬ夜勤看護であるから、それに当たるナーズは、特別の心理状態におかれるのではないかと推察する。病室からの呼出しコールが鳴る度に緊張するのである。朝晩の寒さを感じるようになった晩秋、てきぱきと引継ぎの言葉が交わされている。

達人の無気味な寡黙茸狩 新 曆文

茸採りの達人ともなれば、当然穴場を識っているであろうが、素人衆を案内するような場面では、敢えて穴場を避けてゆくのではないかと思う。穴場は避けても茸のありそうな場所は判るから、敢えて沈黙して、靈感を得て茸のある場所に案内するようなテクニクを使うのではないか。

棧橋の出船の銅鑼や露の袖 森美枝子

六十年も経っているが、神戸港から九州へ新婚旅行の船旅をした会社の先輩を見送った想い出がある。沢山のカラーテープが乗客と見送り者をつなぎ、華々しい銅鑼の音にのつてゆつくりと客船が岸壁を離れて行く。互いに何か叫んではいるが、銅鑼の音に掻き消されて聞こえない。現今でもこのような光景があるのだろうか。「露の袖」が、洋装であれ和装であれ、何とも艶やかである。

わが秋思リュックの底の古写真 阿部幸代

永い間使わなかったリュックを開いたら、底から写真が数枚出てきた。何だろうと思いつつながら確認したら、若い頃の山仲間の写真であった。懐かしい顔が並んでいる。深まりゆく秋のひと時を、色濃くする想い出の写真であった。

「考える人」ブロンズ像の秋思かな 山岸久美子

あの有名で多くの人の目にとまっている「考える人」の像である。その姿を真似て写真を撮ったりする人は多いが、その像が何を考えているのかまでを真剣に考える人は少ないのではないか。でもこの俳句の作者はそのことを考えているようだ。それが秋思と云うことなのか。考え過ぎは危険です。

水琴窟

(水明集十一月・十二月号鑑賞)

池田雅夫

剪定の常磐木抜くる風や処暑

飯田忠男

「常磐木」は特定の木ではなく、「常緑樹」と呼ばれているもの。厚く堅い葉の多い常磐木は風の通りがよくなさそうだが、厳しかった暑さもおさまるといふ「処暑」のころ。剪定を終えた木を爽やかに風が吹き抜けている。印象深い句。

閑取の乳房めぐりて汗拭ひ

本橋稀香

閑取の中で肉付きのいい丸々とした力士を「あんこ型」といふ。大相撲の仕切りの場面であろう。仕切りを重ねることに全身が紅潮してくる。名古屋場所は暑さの盛りである。制限時間前の仕切り。「乳房めぐりて汗拭ひ」に臨場感がある。

安売りの曲り胡瓜を買ひにけり

山崎郁子

「安く売っている胡瓜を買いました」としか言っていないが、そこには野菜の流通の事情が詠み込まれている。規格に合わないものは出荷できなく、直売所などで安く売っている。

取的の四股踏む声の極暑かな

阿部貞代

特に暑いといわれる大相撲名古屋場所。稽古に熱がこもる。

したたり落ちる汗。転がった力士は砂まみれになる。稽古の基本の「四股」。何度もくり返す四股。体の芯から発する声に力が漲る。見ているも「極暑」としか言いようがない。

悔し紛れにその身を弾く鳳仙花

小川洋子

「鳳仙花」の擬人化の句として読む。鳳仙花の実は縦に割れやすく、触れただけで弾けて種が飛ぶ。完全に熟す前に何かに触れたのだろう。「悔し紛れ」に、人の心情を重ねて機微を現わしているところに深みが生まれる。共感する。

雲海に浮かぶ天守や朝日影

羽島秀子

「天空の城」として有名な兵庫県の「竹田城」。円山川の川霧によって「雲海」が生ずる。日の出る前に観察できる所に登ったのであろう。朝日に照らされて雲海は、金色から茜色へと幻想的に彩を変えてゆくのである。幸運を悦びたい。

秋めくや空突き抜くる紙飛行機

伊藤美津子

秋の空は青く澄みきっていて、一年中で最も美しい。ほどよい風の上上の天気には広場で遊ぶ少年。手作りの「紙飛行機」を飛ばしている。「空突き抜くる」に少年の未来が重なる。

る。

菊人形武者猛々と甦る 糸井しるく

各地の神社などで菊まつりが催されている。その花形として「菊人形」が展示される。その中でも「武者人形」は一段と人の目を引く。大河ドラマの登場人物や野球選手などにも。「猛々と甦る」に、その製作者への敬意が感じられる。

鬼蜻蜒いつも自分で決めてきた 石関六弦

「鬼蜻蜒」は山地に棲む日本最大のとんぼである。大きな目と、黒と黄の胴と尾が特徴。威厳があつていかにも強そうである。「いつも自分で決めてきた」に己の姿を重ねているのであろう。人に頼らずにきた自負が鬼蜻蜒の姿に重なる。

登山道片手ですくふ命水 嶋田洋子

日本の各地には霊山と呼ばれる山がある。また、百名山など、そこに登る人も多数である。ごく身近な山でもきつく感じることもある。険しい道を登ってきたのだろう。湧き出る清水に「片手ですくふ命水」として息ついているのだ。

鉄鍋で焙るかのごとき酷暑かな 畑宮栄子

「酷暑」を「鉄鍋で焙るかのごと」と形容したところに発見がある。今年、観測史上初とか最長などと記録的な暑さであった。口語、文語の一貫性など推敲の余地がある。

初秋や夕日とろとろ信濃川 室井早都子

「夕日とろとろ信濃川」の措辞が詩的にひびく。信濃川は新潟県呼び名で、長野県域では千曲川と言ひ、日本一長い川。「秋は夕暮れ」といわれるように高い秋雲をいつまでも茜色に染める夕日。その残照に信濃川が白く浮かび出る。

新涼や一番槍の大漁旗 持永喜夫

「一番槍」は、最初に功績をあげること、と辞書にある。夏の暑さが一段落し、よみがえるような新鮮な涼しさを感じる「新涼」。秋になると秋刀魚や鯖などの漁がさかんになる。「一番槍の大漁旗」に、漁港の活気があらわれている。

人住まぬ家の前にも迎火や 小島喜代子

過疎地であろう。町場に引越してしまい、もう誰も住む人がいない空家の前にも「迎火」が焚かれていたのだ。祖先の御魂が帰ってくるのは、やはり元の家である。「住む人のなき家の前」とすれば、「にも」を省くことができる。

衣被長幼の序の在りどころ 落合和枝

「長幼の序」は、年上と年下、あるいは、年長者と年少者の序列である。里芋の子を皮のまま茹でた「衣被」は名月に欠かせない供物の一つ。親芋と子芋をなぞらえたのだ。

網野月を選

山紫集

再会をかみしめ歩む水の秋

川島夕峰

山旅の終りに掬ふ秋の水

渋谷さいち

バンパイアの深き眠りや水の秋

正木萬蝶

色騒ぐ津和野の堀や秋の水

新 曆文

秋水や二倍に増ゆる飲み菓

高橋満耶子

たんじやくの筆に染み入る秋の水

武田重子

山路来て喉潤すや秋の水

田中章嘉

秋水に映りし空のより高し

寺内洋子

手水鉢雲を映すや秋の水

寺町知子

秋の水役目終へるや真つ直ぐに

飛永 鼓

秋の水底まで見ゆる魚の群れ

南條さわゑ

秋の水痛みの海へ注ぎけり

河野はるみ

蛇行する流れは速し秋の水

井上玲子

秋の水風に応ふる自由律

丸山マスマ

水の秋年縞の湖鎮まりぬ

松宮保人

蹲踞にあふるる秋の水笈

菅原卓郎

魚群れて向きをひとつに秋の水

森 和子

みちのくの傾く祠へ秋の水	西浦千枝子	現るる魁夷の白馬秋の水	松井由紀子
上高地手が痺れくる秋の水	西幅公子	靈山の姿宿すや秋の水	丸屋詠子
秋の水掬ふ掌生命線	野口和子	草影の細き流れや水の水	宮崎チアキ
郡上の古き町並み秋の水	野村美子	母校へと続く坂道秋の水	元田亮一
やりとげし達成感や秋の水	畑宮栄子	高瀬舟洛中巡る水の水	本橋稀香
流木の影を映して秋の水	原田秀子	小流れの厨に続く秋の水	森川義子
秋の水飲みて葉のやうなもの	樋口元美	軍旗はたはた伊吹の秋の水こんこん	森下山菜
気の澱む終の住処に秋の水	日高道を	魚の模様はつきり見える秋の水	森下美智枝
水の秋水一杯の旨さかな	檜鼻ことは	研ぎ上げて厨の軽き秋の水	森美枝子
水の秋ここより先は柚の域	福田千春	川底の小石きらきら秋の水	山岸久美子
なまこ壁に沿うて堀割水の水	保坂翔太	水の秋鯉の赤黒連なりて	山下ユリ子
手を浸ししばし物思ひ秋の水	曲淵徹雄	澄むことの痛いほどにも秋の水	山中いちい

佐久鯉の鱗のみ動く秋の水	湯浅 和	スカイツリーひとつ揺れたる秋の水	石関六弦
秋水を堪へてダム湖樹々映す	横山君夫	秋の水ひとりキャンプのカレー飯	石田慶子
鳥影の真白く映ゆる秋の水	横山礼子	鈍色の龍の口より秋の水	石川理恵
参道を抜けてまことに秋の水	吉川拓真	掬ひたし千鳥ヶ淵の秋の水	糸井しるく
秋の水あなた任せの一葉舟	綿引まりこ	山里や音だけ聞ゆ秋の水	上戸千津子
斜陽受け映ゆる金閣水の秋	青木鶴城	秋の水杉玉揺るる石畳	内田恵子
分水嶺凜と旅立つ秋の水	秋谷風舎	沢下る音きんさんと秋の水	梅澤輝翠
根茎の眠る池底や秋の水	阿部幸代	流線形に立つ白鷺や秋の水	梅澤佐江
名を変へて流るる川や水澄めり	荒井俱子	余人てふ吾でなきひと水の秋	遠藤人美
常なるや利根大堰の秋の水	飯田忠男	底をゆく色なき魚や秋の水	大場順子
秋の水鯉の背鱗の矜持かな	池田珪子	秋水に映り歪むるなまこ壁	岡田宣子
秋水の二尺に宿す光りかな	池田雅夫	放牧の牛がなめづる水の秋	加藤でん治

人面魚の貌くつきりと水の秋

熊倉千重子

しのめの抱く山影水の秋

霜多光代

秋水の飛沫碎けて虹刹那

倉田星歩

秋水の硯の海へひとしづく

下川光子

布引や赤道越ゆる秋の水

小駒さち子

乱反射の川面ちりちり水の秋

菅原真理

娘らの粧ひ映す秋の水

小林京子

パトカーの赤灯躍る秋の水

杉浦千祐

演説の嘘くささ見む秋の水

小山あつ子

夕日ごと谷間に落ちぬ秋の水

鈴木藻好

虹出るダム湖の祭り秋の水

近藤徹平

神宮にさざれ石あり秋の水

鈴木玲子

ゆつたりと三尾の鯉や秋の水

榊原聰子

夕闇に淡淡流る秋の水

関谷多美子

秋の水古地図の川を船のゆく

佐々木史女

水切りの石より硬し秋の水

瀬戸雄二郎

秋の水水琴窟に音ひろふ

笹本啓子

北山の逆さ金閣秋の水

染谷風子

月しづか月を映して秋の水

篠崎紀子

秋の水天を泳げる鯉二匹

反町 修

秋の水きみやく織り出す川面かな

篠原さよ子

菊水と小さき看板秋の水

清水桂子

山紫集作品評

網野月を

秋の水痛みの海へ注ぎけり

河野はるみ

中七の「痛みの海」が何を意味するものなのか、解釈に拠って句の幅も深さもかわるであろう。文字通り解釈は読者に任されているということである。筆者は、石牟礼道子の世界を想像した。何年の歳月がかかるのか計り知れないが、いつしか「秋の水」によって、清浄化されるであろう水俣の海の有在りし日の姿に帰ることを祈念しているように解釈し、人為の過ちは自然の治癒力によって解消されてゆくという希望的観測を抱かせてもらった。楽観主義というのではなく、祈りにも似た感慨である。

蛇行する流れは速し秋の水

井上玲子

一般論的な蛇行の流れではなく、作者の目の前にある蛇行する流れなのである。大きく外回りをしている蛇行の外側の水程流れが速そうである。がそうした知識の蓄積である客観性の流れではなくて、個別の、それ自体の流れと筆者は解釈している。

この「蛇行する流れ」には不穏な水の流れを感じた。いわゆる出水のたぐいであるが、その速さに危険を察知した作者がいるのである。水に敬虔になることを諭すような一句である。

秋の水風に応ふる自由律

丸山マスキ

座五の「自由律」はなるほど、「風に応」えて生まれるものなのである。納得させられてしまった。筆者は、俳句における、もしくは本来定型の韻文詩に対する「自由律」であろうと解釈した。が、他の諸科学の分野の「自由律」もまたあり得るということは周知の事実である。

上五の季語「秋の水」は激流などではなくて、風に波立つ静穏な水面を想定しているように思われる。人為の自由は、自然界の自由にはるかに及ばないことを宣言しているようである。「俳句自由」の精神を謳歌している。

水の秋年縞の湖鎮まりぬ

松宮保人

福井県の三方五湖の「年縞」のことであろう。秋は紅葉の時を経て秋水に湖は鎮まり、落葉を難なく受け容れて湖底に沈ませ貯めるのである。

福井県年縞博物館の「年縞」を見る時、自然の悠久と人間の歩みとの対比を考えさせられる。座五の「鎮まりぬ」は作者の自然に対する畏怖なのである。

蹲踞にあふるる秋の水筈

菅原卓郎

自然の中から人間が聞き得る音は、風の音、水の音であろう。人為が加わると火の音もまた聴くことがある。「銜」はそうした水の音の一つである。また聴覚だけではなくて、視覚的にも把握できるかもしれない。つまり水の流れであり、また跳ね返りである。中七から座五への季語「秋の水」の句跨りにもなっている破調を中七座五と一気に読み下して解消している。十二音の連続が、「あふるる」水の勢いを想像させている。

魚群れて向きをひとつに秋の水 森 和子

この「秋の水」には水流があるのである。小魚はその流れへ向かって頭を揃えている。主人公は群れ魚であるが、主人公を取り巻く「秋の水」に作者の視覚はフォーカスされている。

再会をかみしめ歩む水の秋 川島夕峰

さぞ待ち望んでいた再会なのでしょう。句中の「水の秋」は物静かな水の流れを想起させる。流れの遅速は分からない。大きな流れなのか細い流れなのかも分からない。この「水の秋」は時空的に捉えられていて、時間の経過を象徴しているように解釈できないであろうか。

「再会」は人物なのか事物なのか判然としないが、作者の心の拠りどころとなっている事柄でしょう。その「再会」は「かみしめ」るほどのものなのである。

山旅の終りに掬ふ秋の水 渋谷きいち

登山口にもどった作者は、そこに湧いている清水を掬い取って口に含んだのである。「終り」が無造作な置き方だが、作者のルーティーンになっている山霊へのご挨拶なのかも知れない。旅の始まりも終りもその人物が心に覚えることである。秋水を「掬ふ」ことは「山旅の終り」を自らに言い聞かせている行為なのである。

バンパイアの深き眠りや水の秋 正木萬蝶

配合の一句であり、配合の見事さを示している。「バンパイア」は吸血鬼なのか、はたまたバンブのことなのか。どちらにしろ、ここまでシリアスに配合されるとむしろ気持ちよく感じられる。

秋季のそれも「水」をテーマとしたところに「バンパイア」の安息の居所が設置されている。「秋」はある意味総りであると同時に凋落の季節でもある。「水」は古来、最高位のものであり、老荘思想では低きへ流れるある意味したたかさを有する物質でもある。

色騒ぐ津和野の堀や秋の水 新 暦文

「色」は何でしょう。津和野の殿町の堀割でしょうかから、初夏ならば菖蒲でしょうか、秋季では鯉でしょうか。対象を名指しすることなく「色」に修辭したところに俳味以上に、詩の本質を感じることが出来る。メタファーの最たるものである。

大村節代 選

鼓
笛
集

風条条たゆたふ落差冬の水
潺潺と行路のままに冬の水
冬の水翅際やかに鳥立てり

築百年どこに座れど隙間風
一列に干し物乾く冬あたたか
冬日和母はひつそりサンルーム

片栗粉少し多目につつべ汁
昆布締めの笹にのせたる鱈かな
突出しのこがね色なる菊膾

霜多光代

加藤でん治

池田珪子

冬晴や神野紗希氏の句会けふ
冬晴や十三年振りの早稲田
黒猫やカフェ・ソウセキの冬日向

白息や距離のほどよき夫婦仲
竹輪麩が好きな女のおでん酒
着ぶくれて空き手に軽き旅靴

蒼天に山裾伸ばし山眠る
しぶき立つテトラポッドに冬の浪
独り居に柚子を貰ひて湯に浸る

冬ダリア心平らぎ風にのる
しぐるるや化粧坂行くをんなひとり
すれ違ふ心にきらり冬銀河

一つ落ち今日は柚子湯の冬至かな
君は君俺は俺なり冬至が来
今朝冬至止めても又鳴る枕元

レモン囁る記憶の颯つと鳥の影
屑籠の昨日を捨つる冬すみれ
院長はサンタに小児病棟クリスマス

吉川拓真

菅原卓郎

岡田宣子

菅原真理

飯田忠男

本橋稀香

大銀杏黄金のマントすつぱりと
天がける黄金の銀杏圧感たり
黄葉は小判にも見ゆ大銀杏

山岸久美子

湯煙をふわあと吐きて山眠る
酒蔵の暗き売店新走り
冬ぬくし保育園児の列散歩

湯浅 和

新雪の心清しき富士仰ぐ
トンネルを抜けて雪国目に眩し
雪の国駒子角巻忍ぶ恋

佐々木史女

煮大根湯気の向うに戦あり
夫のため食はず嫌ひの大根煮る
大根引く老も若きも競ひ合ふ

畑宮栄子

初冬に個展のはがき二枚来る
初冬に仕込む男の腕まくり
初冬や鉄壁の櫓反り返へる

北山建治郎

十二月友の訃音は娘より
冬虹や駆け登りたし友のもと
凍星よ友を仲間に加へ給へ

小山あつ子

梅東風や団子嗜む地藏様
LINEもて打打発止猫の恋
雲上のティーブレイクや山笑ふ

秋谷風舎

小鳥来る木立の中の夢二館
合掌の子の手小さきや七五三
天国の酒豪の夫へ今年酒

武田重子

立山の宿から仰ぐ冬銀河
苔庭に真つ赤な紅葉三千院
焼いてとろりと甘き汁なり下仁田葱

森下美智枝

雨あがり鳥に冬木の彩うつる
冬深しきれいに忘れたる吉夢
幼児へこぼさぬやうに冬いちご

遠藤人美

冬うらら香具師の親分店地割り
着ぶくれの十二日市のパトロール
おかめ笑む担ぎ手さらに大熊手

横山礼子

☆

☆

鼓笛集作品評

大村 節代

風条糸たゆたふ落差冬の水 霜多光代

冬の水に限らず、水は生き物にとって生存上欠かせない。冬の水が流れる様は何とも美しい。特に寒に入って九日目の水は、寒九の水といって、薬になると言われる。上五、中七には、冬の水の透明感、清らかさが伝わる。

築百年どこに座れど隙間風 加藤でん治

木造住宅の耐用年数は法定では二二年。適切なメンテナンスを行えば、百年近くとも言われる。

木枠の窓やら木の廊下、断熱材もない。中七、下五によって築百年の家の風格と隙間風が家中に抜ける。

法隆寺は一三〇〇年の歳月をほこる。世界最古の木造建築である法隆寺は「地域の仏教建造物」として世界遺産に登録されているという。

片栗粉少し多目ののっぺ汁 池田珪子

「濃餅」とか「能平」と書くのっぺ汁とは、島根県津和野地方から、新潟や奈良ほか各地に伝わる郷土料理と季語にある。一方けんちん汁は、鎌倉の禅寺建長寺に中国の僧が伝えたと言われる。レシジビを見ると野菜を先に油で炒めるのがけんちん汁、そのまま煮込んで片栗粉でとろみをつけるのがのっぺ汁、いづれにしても寒い冬には欠かせない御馳走であろう。

鼓笛集巻頭（十一・十二月合併号）

私の好きな一句（自句自解） 元田 亮一

手のひらにねむの木の庭冬ぬくし

先日、小春日和の日にねむの木の庭に行きました。ねむの木の庭は、JR五反田駅から徒歩十分程度の閑静な住宅街にある小さな庭園です。上皇后美智子さまの生地跡を整備し、園内にはねむの木を中心に美智子さまゆかりの樹木や草花が訪れる者を楽しませてくれます。その日は、秋薔薇プリンセスミチコが可憐な花を咲かせていました。手のひらに乗るような静かな庭園に心が洗われるようでした。

水明塾・全句講評講座

網野月を

水明塾の全句講評講座は今回で四回目になりました。二十八名の参加者、五十六句の応募があり、良句が揃いました。全体的に添削句はありません。従って講評の主眼は、どうしたら作品により工夫された表現が出来ないかということに集中できました。

今回は句中の動詞に着目しました。動詞の主語を考えることにより、句の構成の歪みを正すということを考えたのです。複雑な表現に過ぎる句作りには是非にも取り入れて欲しい作方です。よりすっきりとした表現にするにはどうかという提案です。

ウインドウうつるわが身の末枯や

「ウインドウ」は自宅の、電車の、ショーウインドウでも構わないでしょう。空間の指定は読者の読みに任されているということですね。下五の切れ字「……や」は難しい技法ですね。「映る」は自動詞ですから「末枯やわが身を映すウインドウ」もしくは「末枯るるわが身を映すウインドウ」として、他動詞「映す」を用いると作者の存在感が句中に反映されるでし

よう。

名画座の余韻ぬくむる冬帽子
「ぬくむる」の主語は何でしょうか。「名画座の余韻」が主語で「冬帽子」が目的語という構成で解釈することが順当だろうと思います。

初時雨お地藏さんに蓑そつと

ママです（このママで良い、と言う意味です。以下同様。）
童話の世界ならば、「蓑」ではなくて「笠」でしょうか。技法としては倒置法の感じがします。上五と座五を入れ替えたらどうなるでしょう。その場合中七には「お地藏さんへ」の用法も成り立つでしょう。

追憶と未来ちりばめ冬銀河

冒険句（チャレンジ句）です。今を見つめて過去と未来へ思いを馳せていると解釈しました。「ちりばめ（鏤め）」の主語は何でしょうか。句中には主語が存在しないで、天（運命）の大きな力が主語として働いている、とも解釈できるでしょうか。

母の風邪吾の風邪鍋を共に食ふ

母親と作者が仲良しであることが分かる句になっています。「鍋を……食ふ」にも少々季感があるでしょう。上五中七の並列の構図は意味的に繋がっていますから三段切れにはなりません。

露西亜語の表紙金文字霜降月

「金文字」はなかなか良いアイテムだと思います。「露西亜

「語」との相乗効果も抜群です。掲句は「……語の」の後に例えば「聖書」なり、「本」が省略されていると解しても良いかと考えられます。

緑葉の珠すべり落つ冬の霧

冬霧の日に緑葉の葉、常緑樹もしくはまだ緑を残している葉を珠（露）がすべり落ちたということでしょう。中七の「落つ」（終止形）の文語表現が切れを作り出しています。「緑葉を珠すべり落つ冬の霧」が主宰の添削でした。

風や好きな季節を一つ飛び

秋の短さを詠んでいる、ということでしょう。上五の「……や」切れは、昨今汎用性が高いので、中七座五の口語表現にも合うと思います。

芋の露東雲色に染りをり

「東雲色」が良いです。「露」「東雲」ともに平安から鎌倉の和歌の世界では後朝の別れの感覚を有しています。「露」と符合するのではないのでしょうか。『広辞苑』では「染まる」の表記、『日本国語大辞典』では「染る」の表記になります。

冬しぐれ川のせせらぎ明月院

この「せせらぎ」は「明月川」でしょうか。三段切れになっていますから、「せせらぎのしぐれに染める明月院」「時雨るるやせせらぎを聞く明月院」くらいにする方法もあります。

冬桜語りかけたきその白さ

「冬桜」へ語りかけようとする心情を「たき」に込めています。「その」連体詞には是非があるかも知れません。たぶん、

「冬桜語りかけたき白さかな」とするか、作者は悩まれたかなあと思います。

冬に入る使はぬままの皿の数

ママです。出ています。この「冬」は季節だけではなくて、心象的な意味合いを含んでいるとも解釈できます。そうすると中七座五の句意の解釈が広がりますね。季語を「立冬」「冬来たる」としなかったところが良い結果を生みました。

シャンパンの栓を抜いたらクリスマス

口語表現に生活観を感じます。上五の「……の」は、半切れ（半分程度切れを感じさせる）の効果を出しています。

星冴ゆる深海魚展の帰り道

「深海魚展」が何といっても面白いです。それだけに中八が惜しい気がします。「荒星や深海魚展からの帰途」として中七と座五を繋げてしまう方法もあります。多少、破調感がありますが、句の意味を考えるとかえって合っているように思えます。

七五三ババは一日カメラマン

所謂あるある、です。日常を活写していて可愛い句に仕上がりました。

冬の旅富弘のふみ胸に沁む

渡良瀬川への旅でしょうか、それとも他所でも「富弘のふみ」（富弘の絵葉書？）は出せますから空間的にはいろいろと解釈できます。座五の「胸に沁む」が勿体無いです。直接の感情表現をさけて、より客観的にしてみてもどうでしょう

か。「冬の旅富弘のふみ二度三度」として読み返している景にまとめる方法もありますね。

大向日葵 一花の種数ふる児

種を数えているのは何処のお子さんでしょう。句中には情報はありません。それでも可愛らしい句になっています。向日葵は辞書的には一輪もしくは一本と数えますが、この句は「一花」で良いと思います。「向日葵や（大向日葵）一花（いつか）の種を数ふる児」と助詞の「を」を補ってみました。

クリスマス虹色ドレス五歳児よ

可愛いですね。「五歳児」を強調したかったのだと思います。上五と座五の入れ替えが可能でしょうか。「五歳児の虹色ドレス聖夜かな（クリスマス）」

挂甲の埴輪の並ぶ開戦日

秀句です。構成のしつかりとした句作りが来ています。読み手によっては反戦の思いを託した句と解釈することもあるでしょう。

小春日やサックス聞こゆるテラス席

小春日和とのんびりしたテラス席が合っています。意味的には繋がっていますが三段切れになっています。主宰の添削は「小春日やサックス聞こゆるテラス席」です。筆者は「サックスの聞こゆるテラス小春風」としてみました。

縄文の集落の今雪もよひ

「縄文」時代と「今」現在の時の流れを描いています。「今」でなくて「跡」という言い方もありますが、それでは時間の

流れがなくなってしまう。ここは、「今」が大正解だろうと思います。

通さるる茶の花匂ふ奥座敷

上五もまた中七も並列して座五に繋がっている構成です。少々複雑な表現方法を使用しています。「通されて茶の花匂ふ奥座敷」とすると整理できるようです。筆者は、生け花ではないように想像しました。

岩手山麓大根引く間の深呼吸

中七座五「大根引く間の深呼吸」が良いですね。筆者は大根を引く瞬間と解釈しましたが、何本か引いているその間にも解せるでしょうか。上五「岩手山麓」は説明し過ぎかなと思い、「岩手富士大根引く間の深呼吸」を提案しましたが、作者はやはり「岩手山麓」なんですという言でした。そのこだわりは大切です。良いことだと思います。

ささくれの棧を宥めて障子貼る

ママです。本来「宥（なだ）める」は精神的・抽象的な場面に用いるのですが、掲句の場合は物体への用途に展げて、快です。

ドリツプの落つる一滴秋の色

コーヒーでしょうか、それともワインの澱引きでしょうか。作者が分かり、コーヒーだろうと思いました。「ドリツプ」は意味的に「落つる」と重複感があるようです。「ドリツプのしまひの滴（しずく）秋の色」くらいではどうでしょうか。

小春日やパンジーの苗ニューフェイス

「ニューフェイス」は新種の園芸品種のことと解釈しました。「バンジー（三色蓮）」は春の季語ですが、昨今は初冬に移植する品種が増えましたね。理屈としては季重なりですが、「小春日」がこの句の本季語としてしつかり機能していますから、筆者は問題ないかと考えます。

塩振らば光集むる秋刀魚かな

「光集むる」が良いです。この措辞が良く出てきたと思います。上五の「振らば」は未然形ですが、「塩振れば光集むる秋刀魚かな」として既に光を集めているという句意の方が景が良く見えると思います。

山頂の磐座吸はれ冬夕焼

「山頂の磐座」が冬の夕焼の中に没した、と解釈しました。どこの山頂でしょうね、前書きが欲しいくらいです。上五は「山頂に」として助詞を入れ替えた方が意味が定まると思います。

情を炊く母のもてなし栗ごはん

ママです。「栗ごはん」にお母様は「情」を炊き込んでいます。「情」は（まごころ）と解釈したいですね。嘗ての思い出なのか、自分が「母」なのかは分かりませんが、筆者は思い出と解釈しました。

冬めくや独り夕餉の塩むすび

夕食なのに「塩むすび」であるという謙虚さ、つまりここに諧謔性があるのです。諧謔性は表現の範囲ですが、謙虚さの押しつけは読者にどれだけアピールするのか、疑問のこ

ろがあります。

第九聴く日ありてうれし十二月

「聴く」と明示したところで明確さが増しました。昨今は「第九」だけでは歌うのか、聴くのか分からないからここに工夫のあとが見られるわけです。「第九」は季語かどうかの議論がありますが、季語として収録している歳時記もあります。「うれし」が少々生な表現かも知れませんが。

冬銀河天使ころがす銀の鈴

句意からの想像（解釈）では、「ころがす」の主語は天使でしょう。天使がころがしている鈴とも解釈できます。主語が「銀の鈴」とも解せます。その場合は、「銀の鈴」がその力に拠って天使をも動かすことが出来るということになります。

良い時に訪ねてきたる風邪の神

「良い時に」の意外性が秀逸です。一句仕立ての句であり、また口語俳句になっています。ただこの手のユーモアに慣れない読み手は多いかも知れません。

身凍るロシア紅茶にウオツカを

上五の「凍る」は「こほる」と終止形で読んで、切れがあると解しました。「ロシア紅茶」は葉の種類ではなくて飲み方でロシアンティーでしょう。「ウオツカ」の表記は辞典によって異なりますから要注意です。

シュレットターバリバリ謳ふ小六月

「ぱりぱり」のオノマトペは新味があります。Paris Parisならば「小六月」を「文月かな」にする方法もありますね。

眼には眼を白内障に冬の霧

句全体の構図が線対称のスキームになっています。「眼には眼を」には少々ネガティブな感覚があるかも知れませんが、句の雰囲気には緊張感がありますね。

叢雲は銀となる冬満月

「叢雲(むらくも)」「銀(しろがね)」ともに格調のある字句で、使用する語彙に統一感があります。上五を「や」切れにするか、中七を「なり」の終止形にするかしてリズムを整えることも出来ます。

冬の風ほほにさしこむハートの矢

この「冬の風」は嫌なものではないのでしょうね。意味が通りづらいかないと感じますが、何やら十代の作家の句のようでもあります。「ハートの矢」は瑞々しいですね。

孫誕生のメール飛ぶ飛ぶ冬ダリア

「飛ぶ飛ぶ」は斬新です。「冬ダリア(皇帝ダリア)」の幹旋も秀逸です。メール＝電波ですから、「翔ぶ翔ぶ」にする方法もあります。「翔ぶ」はより観念的・天体的な雰囲気を持っていますから。

文化の日カレーの辛さ選びけり

秀句です。「文化の日」の幹旋は筆者の好みです。

茶の花やじゃんけんグリコ・チョココレイト

良句です。「」の使用については、いろいろと議論があるところですが、この句の場合には何か工夫がありそうです。「茶の花やじゃんけんグリコチョココレイト」などはどうでしょうか。

空きつ腹の横隔膜へ除夜の鐘

秀拔です。語彙の意外性と座五の季語への大胆な転換は見事です。

年賀状顔が浮かびてやめられず

昨今の年賀状事情を詠んでいます。つまり誰にでも分かりやすく話題性もあります。「年賀状」は新年の季語です。「やめられず」とありますから、「賀状書く(暮の季語)顔の浮かびてやめられず」とした方が良いでしょう。

足捻挫家中遠き冬ごもり

家の内に居て、且つ「冬ごもり」の諧謔性は何とも言えないものです。面白いです。「足捻挫」が語彙的に説明的な印象を持たれるのではないかと、筆者は考えます。「足捻挫」家中遠し冬ごもり」くらいでも良いかと思えます。

水琴窟河童の像に秋の水

好ましい句になりました。上五と座五を入れ替える方法もあります。「水の秋水琴窟に陶河童」

冬の朝コーヒーの香とピチカート

座五の「ピチカート」が斬新です。ヴァイオリンかチェロを想像しました。それとも何かの音を譬えているのかも知れません。それだけに「コーヒーの香」と取り合わせたときに「ピチカート」に唐突感もあります。句の解釈は読者にお任せでもいいと思います。

冬銀河終はるとき知る恋のいろ

失恋したことで大人になったという意味が「冬銀河」に担保されていると、筆者は解しました。季語の幹旋について云々は無いと思います。とにかく大人へなる為のイニシエーション

ンを感じます。

人の渦モネの「睡蓮」冬来る

季語を天文にしたい場合は、例えば「人の渦モネの「睡蓮」冬うらら」という方法がありますね。季語の斡旋は、時に（時候）、時に（天文）のようにジャンルから決めることもあるでしょう。

風やかんたろう翔ぶ運動場

「かんたろう」が何処まで通用するのですが、筆者には充分通用します。「かんたろう」に譬えられたのは、「運動場」とありますから子どもたちなのか、それとも他を想定した方が良いでしょうか。それこそ読者に任されているところでしょう。

三の酉ある年謂れ口口に

上五の「三の酉」だけで「ある」は句中に滲み出てくるように思います。つまり「ある」を省略する可能性もあるのではないかと思えます。例えば「三の酉災（さい）のいはれを口口に」「三の酉年の謂れを口口に」くらいで読者へ通じることと思います。

小春日や民話の里の土人形

ママです。景が浮かびます。旅の句と言う作者の言でしたが、よく出来上がった句になっています。

蜂屋産購ふや渋柿剥きぬ

五五七のリズムがニューウエーヴですね。「蜂屋柿」は有名ですから分かります。その分、「渋」は整理できるかも知れませんか。

寺の秋父のはらから生ひ立たず

お父様の「はらから」（大きな世界観）から成長できないでいる自分を感じる、と解釈しました。とすると難しい内容を詠もうとしています。「はらから」の解釈が同胞でしたらもう少し身近な解釈も成立するかもしれません。

把む手に銀杏落葉の光あり

「銀杏落葉の光」が良いですね。ただ「把む手に」の意味が判然としませんでした。誰かと手を繋いでいるのでしょうか。「掌（てのひら）に銀杏落葉の光あり」くらいでも良いと思います。上五を「拾ふ手に」「掬ふ手に」とする方法もありそうです。

父送る車窓に見ゆる時雨虹

「父を送る」と解釈しました。「車窓」は自動車の車窓でしょうか。同乗しているのかどうか、シチュエーションは分かりませんが、追悼の意味合いで座五の季語「時雨虹」が斡旋されたのであろうと思います。

時雨るるや煉瓦煙突濡らし去る

「煉瓦煙突」がよく出てきました、実景かもしれませんが、言切った表現です。「……去る」の表現は省略できる可能性があるように思います。例えば、「しぐるるや煉瓦煙突濡らしをり」のようにです。

今回の全句講評講座は、日高道を氏の司会で、主宰、青木鶴城氏、保坂翔太氏、曲淵徹雄氏のパネラーも共に参加してください、多角的な視点で講評をすすめられたと思います。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子 報

万年青の実日の斑の遊ぶ甃
万年青の実日差しを吸ひていよ濃し
ままごとの大盤振舞万年青の実
そぞろ寒噂話の含み声
崩し字に含蕃語り秋深し
庭先にしのぶ烏や万年青の実
花よりも艶めく姿万年青の実

マスマ
〃
〃
由紀子
卓郎
徹平
京子
——以上特選

万年青の実石灯籠が傾ぎをり
含差みの君の面影新豆腐
信号待ち長し万年青の実も赤し
秋の夜赤本含む草双子
あの紅は好き嫌ひあり万年青の実
明治生まれの父が遺せし万年青の実
余生を生きる力貰ひぬ万年青の実

順子
由紀子
和葉
節代
喜恵
亮一
延昭

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

綿入れや乳含まする夜泣きの子
文化の日虚数を含む学術書
深窓の佳人のごとき万年青の実
里烏かすめ取つたり万年青の実
二十の子含羞ほのと利き酒す
含みある古老の言葉秋の暮
突き抜けの青空万年青の実が真つ赤

稀香
徹平
京子
卓郎
マスマ
チアキ
和子

しぐるるや差入れに買ふあんこ玉
初時雨店主虚ろなキツチンカー
枯蟻嬢寅さん叱る笠智衆
無防備に晒す関節枯蟻嬢
葉隠れの枯蟻嬢に道を聞く
枯蟻嬢後期高齢皆盛ん
生きぬくや枯蟻嬢枯蟻嬢
時雨るるや田舎の駅に口一つ

慶子
〃
峰雄
鶴城
〃
士史
亜弥子

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄 報

小夜時雨笠を手にして露天の湯
棲を取る襟足白き時雨坂

いちい
みどり
——以上特選

夕暮れを取り込むやうに秋深む
夫あれば相槌うれし枯蟻嬢
猫殿に定位置のあり小春かな
石の上亀は動かず時雨受く
北風や空の青さを吹き渡る
東屋に犬と駆け込む時雨かな
東山燃え残る火や初時雨
最上川時雨るる中を船下る
小さき傘連らねて登校朝時雨
枯蟻嬢小さき悲鳴の秘密基地
傘傾げ道譲り合ふ時雨かな
山時雨作務衣忙しき庫裡の朝

サカエ
亜弥子
士史
いちい
峰雄
慶子
みどり
鶴城



暮の秋籐椅子揺らす手は誰ぞ
比翼塚に赤き折鶴暮の秋
托鉢の草鞋いたはし初時雨
行く秋や遠き目をして陶狸
橋詰に淡き街灯暮の秋
秋暮るる九輪を過る雲一朵
身を削る溪の一川秋暮るる

萬蝶 康世 雅夫 順子 徹雄 昇

雀らを木木は隠さず暮の秋
義仲寺に俳聖偲ぶ暮の秋
芋煮果て大鍋かたす男衆
整枝する鉢の響き暮の秋
山茶花の庭より会釈好好爺
掃きぐせの作務の箒や秋暮るる
古書市に迷ふ一冊暮の秋
秋高し潮目を正す日本海
城壁に焰と紛ふ鳶紅葉

以上特選 千祐 順子 萬蝶 星歩 雅夫 康世 理恵 徹雄 昇

第四例会 (浦和)

熊撃てば大き苅や山揺るる
苅え苅えと雲おく池塘冬に入る
白熊を染めて朝のローラ空を舞ふ
立冬や茶柱凜と朝の卓
今朝の冬切つ先ひかる轆轤匏
立冬や軒を寄せ合ふ伊根の家

石井喜恵 反町修報

翔太 玲子 行雄 マスミ 延昭 寛治 以上特選

以上特選

熊除けの鈴鳴らしゆく那須山路
聡き目をして母熊の歩のゆるき
立冬やぴりつとしたる血のめぐり
ゆつくりと舐めるキャラメル冬に入る
今朝の冬三毛猫膝に乗つてくる
裏山へ熊よけ鈴をやたら振る
白熊のホットレモンにゆくと水族館
立冬やホットレモンの手の温み
脚の無き小芥子立ちんぼ冬来る
熊汁や板間に呷る茶碗酒
熊の皮裏に残るは銃の跡
親子熊人家の暮らし試みる
止まぬ雨立冬の朝の別れ
身仕度に手間取ることも今朝の冬

玲子 由紀子 恵子 光子 マスミ 曆文 延昭 昇 寛治 翔太 行雄 喜恵

第五例会 (浦和)

降り積みし枯葉も庭の一角に
禪林の静寂をやぶる枯葉散る
苅え苅えと遠望の富士冬めきぬ
吐く息の少し振へて冬めけり
枝先の枯葉一枚意地を張る
風わたる瀬戸穏やかに冬めけり
枯葉舞ふ道ヒロインのごと歩みゆく
昨夜の風より冬めく朝となりにけり

梅澤佐江 河野はるみ

玲子 千祐 義子 佐江 以上特選

少年の顔して強く枯葉踏む
冬めくやおんぶのぬくみ背に覚え
冬めくや湯気立ち昇る鍋のふた
通勤の枯葉踏む音忙はしなく
冬めくや茜にしづむ秩父嶺
軒の端の枯葉に夕日たまりけり
くつきりと稜線藍に冬めけり

若松例会 (京橋)

石田慶子 正木萬蝶

枯薦や岐の神を覗かせる
ポケットに檸檬ヨットハーバーは雨
冬紅葉散るや遠流の隠岐島
まだ疼く昨夜の一言檸檬喰む
檸檬盛りある小卓の風通し
土岐川の古代の欠片うす月夜
牛窓や檸檬の灯る隠れ宿
七日目のレモンを切つてティータイム
檸檬かじり退屈な日に活入れる
曖昧な岐路はあれども帰る花
鉢植糸の細木にでかい檸檬かな
レモンの恋イフイフばかり仮定形
檸檬汁争ひ好きの国と国
くし形のレモン一片しほる指

はるみ 千祐 知子 宣子 玲子 義子 佐江 月を 京子 佐江 マスミ ひろこ 萬蝶 以上特選 月を 千春 ひろこ 是るみ 稀香 鶴城 慶子

檸檬の香青春といふ危草
岐路あまた惑ひながらも秋の末
伊邪那岐の神話に浸る夜半の秋
北風やあの落球が分岐点
黄昏や卓に明るき檸檬の黄
機内食に檸檬二切れ成田発

佐江 千祐 詠子 千春 京子 萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

しぐるるや矮鶏駆け戻る庫裡の裏
吊鐘を撞いてゐる間の夕時雨
古民家に手水鉢あり花八ツ手
無住寺の崩るる塀や時雨来る
六地藏の頭巾を濡らす夕時雨
留守に友一筆を添へ富有柿
空耳や軒にまつ赤な帰り花
姑の化粧手伝ふ敬老日
北斎の「浪裏」見入る瀬戸小春

和子 道子 洋子 千枝子 満耶子 千津子 人美 ノルン 早苗

——以上特選——
洋子 千津子 道子 人美 ノルン 千枝子 嶋田洋子

十二月分

第一例会（浦和）

茂木和子報
小林京子報

鳥の糞まみれを洗車小六月
山茶花咲く小節をきかず演歌かな
手に負へぬ庭木はつさり神の留守
堂ふかく小夜しぐれ聴く涅槃像
奥嵯峨や時雨るるも佳し二人旅

千世子 千世子 さわゑ 満耶子 和子 早苗

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城報

近道といへども嶮岨寒鴉
寒晴や笑ひ弾くる病院食
年の瀬の大きく窓拭く美容院
痛飲の挙句入院年忘
二の鳥居人待ち貌の寒鴉
冬霧のに静寂に座す奥之院
遠を見る哲学者めく寒鴉
餌あさるも逃ぐるも一羽寒鴉
旋回し様子うかがふ寒鴉
柚子の湯に手の皸浸し労ひぬ
冬桜料理に挑む男をり
カピバラの数に及ばず柚子湯かな
遠方に後立山冬至の湯
ふぐ供養碑の脇に咲く冬桜
古日記繰るれば父母のをりし頃
墨東に座敷童と冬館
人形町で買ふ牡丹刷毛冬桜

喜恵 和葉 稀香 徹平 卓郎 マスミ 京子 由紀子 和子

——以上特選——
拓真 節代 はるみ 延昭 順子 チアキ 千祐

——以上特選——
みどり 士史 敏江 サカエ 慶子 いちい 峰雄 敏江

ぬつと出るATMの札師走

土佐か阿波それとも伊予か江戸袖湯

クレインの見下ろす街は師走入り

脇役の女優楚楚とし冬桜

約束は記憶ちがひか冬桜

遣り残す事のあるこれ冬至風呂

一年を巻き戻しをり冬至風呂

第三例会（東京）

五明昇報
曲淵徹雄

詩を愛す人には見えて帰り花

「序の舞」の焚くには惜しき古曆

居間からの死角にひそと帰り花

捻じれ立つ老木の先狂ひ花

整然とつづく竹垣冬の雨

遊女塚真紅の木瓜の帰り花

大字に遣る旧村返り花

帰り花山楼仰ぐ遭難碑

泣きたき夜先に哭き出す虎落笛

二度咲や群れて華やぐ未亡人

廃校の下駄箱に文帰り花

帰り花眼下を過る青列車

帰り咲くはまゆふ白き基地の街

父の声聞こえたるかに還り花

通ひ路の垣に二輪の帰り花

竺仙

士史

りこ

千春

亜弥子

みどり

鶴城

昇報

順子

理恵

千祐

雅夫

康世

昇

〃

〃

以上特選

萬蝶

千祐

星歩

順子

理恵

康世

熟爛や決意のほどをとくとくと

招くよに冬浪の音稚児ヶ淵

柚子姫と愛を語らふ仕舞風呂

第四例会（浦和）

石井喜恵
反町修報

無住寺の法事を営むる隙間風

隙間風建具ひとつの四畳半

母の部屋隙間風とて懐かしき

汽車の音つれて隙間風通る

隙間風も独り居の友自在鉤

民譚の終りあはれや隙間風

隙間風防犯二重窓硝子

枯葉道窪みを避けて遠廻り

手捻りの皿に挑戦隙間風

枯葉舞ふ岬へ長き九十九折

生き様を鼓舞する如く枯葉舞ふ

日だまりのベンチの前を枯葉行く

地震にゆれ目覚むや闇に隙間風

蔵の町枯葉と遊ぶ鬼瓦

陽だまりの枯葉を詰めし背負籠

姿なきサタンと干戈隙間風

掃除当番枝の枯葉を数へつつ

枯葉舞ふ銀杏並木のアーケード

故郷捨て住まふ都の隙間風

雅夫

徹雄

昇

修報

延昭

玲子

行雄

マスマ

由紀子

喜恵

寛治

恵子

昇

曆文

行雄

でん治

マスマ

由紀子

翔太

光子

修

延昭

禅林の静寂の中をまふ枯葉

枯葉踏む雨も小止みの石畳

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ

白鳥を幼は夢へ連れ帰る

白鳥のしづかに己が影を曳く

白鳥や頸に鋼を秘め憩ふ

湖に光のシャワー冬の星

寛解の医師のひと言寒昂

失ひしものの数ほど冬の星

見送りはいつも此まで冬の星

異国より戦の塵帯び白鳥来

冬の星マリアの像と交信中

千切れ雲のごとく湖上へ大白鳥

白鳥の頸嫺やかに鳴き交はす

シャンソンの余情にひたり冬の星

白鳥は花びらのごとく愛を舞ふ

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子

はせせにも虚子にもなりて枯野かな

手を振りて妻の駆け来る枯野原

酒樽を社務所に納め年用意

酒匂川激流囃す富士嵐

玲子

喜恵

千祐

義子

知子

玲子

宣子

佐江

以上特選

義子

知子

はるみ

千祐

玲子

宣子

佐江

以上特選

萬蝶

慶子

石田

正木

萬蝶

石田

慶子

石田

正木

萬蝶

石田

慶子

竹めば枯野に微妙呼吸音
酒蔵に醗の踊る深雪晴
枯野人何処へただだ黙黙と
紫野標野も枯れて妹いづく

極月の朝のたびごとむかへ酒
神の留守盗み酒とは乙なもの
見送りは地藏尊のみ枯野道
照り翳る日差しは堅き枯野原
数へ日の芝居のはねて酒席かな
枯野原やんはり包む月明り
解き放ち枯野の犬となりけり
思ひ切り有漏捨てにゆく大枯野
枯野原静夜の空に星座浮く
根深汁焼けつく舌に酒ながす
鐘氷る狂ひはじめた地球人
枯野抜けにつこり笑ふ道祖神
枯野より来て口遊む古旋律
先達を追ふも届かぬ枯野道

☆

☆

——以上特選

千春
マスマ
鶴城
萬蝶
月を
千祐
詠子
マスマ
京子
はるみ
稀香
佐江
星歩
千春
鶴城
慶子
ひろこ
萬蝶

昔話あれこれ44

敦明親王 東宮退位

三条天皇の皇后腹の第一の御子は敦明親王である。三条天皇が讓位されたので、東宮となった。二十三歳であった。ところが二年ほどして東宮を辞めたいと言いつ出した。もちろん母の城子皇后は「もつての外です」と反対した。思いついて道長に相談した。道長も、「父君三条院の御血筋が絶えてしまう事を御承知の上ですか。悲しいことです」と反対した。しかし東宮の退位の意思が固かったため、上東門院の子敦良親王が東宮となった、前東宮は小一条院と称した。

小一条院、東宮辞退の真相

世継の翁は、道長公の果報の強さに庄倒されなさったか、元方卿の怨霊のせいでしょう。と話していたが、聞き役の侍が、私は別の話をきいております。といつてその真相を話し出した。三条院の生存中は良かったが、院が亡くなられると、殿上人等が参上して管弦の遊びを催す事もなく、東宮の話相手をす

る人もいなくなり、親王時代のように気軽な外出も出来なくなり、しきりに昔を恋しく思うようになられたようです。稀に訪ねて来る人は、

道長公や上東門院さまは、敦良親王を皇太子に立てたいとお思いのようだと世間では噂しています。

それを聞いて東宮は、無理やり退位させられる前に、自分から辞任を申し出ようと決意し、母城子皇后にも内密に事を進めた。道長公への使者として藤原能信(道長妻・明子の子)を頼み、

「故三条院のお決めたことになつたことに違背し、私が東宮であることに期待を抱かれています。私には申し訳ないが、退位して寺社詣で等、安楽に過ごしたいのです。そのために院号を頂き、年俸も頂きたいのだが、どうだろう。願いが叶うよう道長公にご伝言頂きたい」と話した。能信は翌日早く、人目を避けて道長に報告した。

道長は東宮自らのお申し出に驚きつつも心の内で歓喜し、素早く東宮退位、院号授与の処置をした。以上が侍の話。

その後道長は小一条院を御匣殿寛子(明子の娘)の婿とした。

山茶花 (浦和)

秋深し木木の語りに耳を貸し
菊人形「光るの君」は若づくり

美江子
マシミ

和歌山水明句会 (和歌山)

北山しぐれ素手もて磨く杉丸太
鳴りつづく社の太鼓七五三
此処よりは女人結界銀杏散る
手術後のついつい動くぬくき冬
鍋奉行の出番すくなし小春かな
家並をこがすが如く冬夕焼
林檎煮る厨房甘き朝日さす
はかどらぬ松の菰巻昼チャイム

和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ
洋子
廸代

蘭の会 (浦和)

廃屋を沈めて映す野菊かな
冬薔薇一輪を剪るやうに逝く
冬薔薇や心の棘を抜きし友
自画像の見つむる先に石路の花
ペガソスの翔くる天空星冴ゆる
左手の甲のざらつき冬めきぬ
初恋の詩よ真つ赤な冬林檎
芳しきキンモクセイの橙色
冬めくや胡弓の音の澄みきつて
連山の影タンポポの忘咲き

寿夫
和子
伸子
小麦
風子
珪子
まりこ
三千子
留美子
月を

絨毯のどこまで銀杏落葉かな
天翔て領地睥睨蒼鷹

鶴城
京子

水明澤つくし句会 (大阪)

さざなみの水際までも秋の淀
ラジオからカーペンターズ小夜時雨
花八つ手創作料理のしやれた店

智恵子
人美
洋子

雛の会 (浦和)

さしかくる傘に笑顔が冬の雨
風牙ゆる赤き頬つべの信濃の子
金継の揺るぎなき手や冴ゆる夜
薪を割る音の重たく冴えわたる
冴え渡るシンバル一打終楽章
戦争の愚かさ怒り星冴ゆる
牡蠣鍋や心許せる人とゐて

はるみ
公子
輝翠
燈女
喜恵
チアキ
佐江

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

飛石はふるき礪臼枯葉ふる
筋トレに励む神主神の留守
雲速く流るる朝や冬支度
神の留守睨みを利かず「セコム」の日
八寸に添ふる一葉薦紅葉
いち早くもみづる鳶のワイン蔵
開票の熱狂余所に積む枯葉
撫牛のまどろむ昼や神の留守

延昭
健司
洋子
俱子
由美子
美枝子
早都子
昇

皐月の会 (浦和)

散る紅葉眺むる吾にある余生
茶の花の雨に烟りぬ門跡寺
茶の花や村の辻なる石仏
校倉の切り口ぬらす初時雨
竹林に消ゆる人力初時雨
抜け道を塞ぐ事故車や神無月
紅唇の飲み干す御猪口金屏風
俳句の手ほどき (岩槻)

山菜
光代
美佐尾
珪子
曆文
きいち
更穂

凧や火の見櫓ののこる辻
手の甲に口紅試す小六月
凧にあらぬ方向く風見鶏
山眠る熱水の噴く試錐孔
凧に星洗はれて耿耿と
寒造り試飲の客へ笑む売子
半眠とざらつく口と凧と
凧や木の葉の海は荒れ放題
冬灯おつおつ試す芋版画
木枯の一瞬の黙足を止む
こがらしに黙の夕餉の共白髪
硝子戸を揺らし凧鳴きゆけり
山茶花垣の香りほのかや試歩の路
小春日や流動食の試飲かな

延昭
佐江
義子
徹平
忠男
翔太
桂子
美子
幸代
久美子
卓郎
知子
チアキ
かつ子

珊瑚の会 (浦和)

民話聴く立て付け悪き障子かな
室の花朱印いたたく異邦人
川船や障子に揺るる波の影
暗唱の文語の聖句白障子
室咲を育て子のなき夫婦かな
声歩く障子の向かうは通学路
影絵の狐障子の裏で「こん」と啼く
障子閉め猫戯らかして一人かな
締め切つて障子の内の謀りごと
手捻りの器に一輪室の花

櫟の会 (浦和)

水仙や久しき友の薄化粧
小雪や赤松の肌なほ赤く
火伏護摩貼りし山門黄水仙
小雪や窠出し壺の仄温し
小雪や具沢山の汁母の味
野水仙岬めぐりのバス揺れて
蛸の会 (浦和)
鈍色の空落ちくるや冬初め
顔見世や振り落とされる浅葱幕
蜜柑挽ぐ悪さゝ残す白き帯
諍ひの果ての沈黙蜜柑むく

喜恵 マスマミ 昇 恵子 史代 広子 和葉 節代
あつ子 朋子 裕誌 富子 文子 千重子
夏野 ひさの しるく 秀子

背伸びして天辺に星聖夜かな
転げ落つみかんは甘し伊豆の山
お日さまの溢るる山の蜜柑かな
らくだ色の毛布ぬくぬくあと二度寝
冬の蝶地に落ちてなほ青き翅
伸びをするとき爪隠すこたつ猫
蒼天のバルーンフェスタや冬はじめ
ぎこちなき朱の木履や七五三祝
たかなな俳句会 (川口)
姿よき作務衣の僧の冬構
拾ひをる数多の色の柿落葉
古家の窓のしつらひ枯落葉
一雨に路地を彩る柿落葉
夜祭は神の旅出の宴かな
神の旅出雲オーバートーリズム
若楠句会 (浦和)
近所よりお裾分けかな年の暮
飛來待つ望遠カメラ冬浅し
冬初め一汁一菜身も軽し
筆太の「臨時休業」冬めけり
青春の思ひは覚めず返り花
近松の泣き人形や冬芝居
ベビーカー芝生に集ふ冬浅し
もう一度青春します帰り花

礼子 元美 さち子 幸子 風舎 月を 鶴城 宣子
義子 小麥 のり子 謙一 福美 鶴城 葉子 真由美 直子 風舎 鶴城 京子 宏治

円卓の会 (浦和)
曲屋を描く水彩柿落葉
初時雨活字を探す印刷工
柿落葉すぐりすぐりて葉とす
北風を押し退け歩む下校生
柿落葉つもる築地の紋瓦
氷る夜や回転ドアは人を吐く
新雪を濡れるごとく登りゆく
北風や時間通りのバスダイヤ
歳晩のシラーの頰や息深し
柿落葉明日の風は明日の色
若枝句会 (浦和)
拝殿にひびく鈴の音七五三
縁側で語る友との暮早し
大根引山すそ照らす夕日かな
父も着た紋も晴れやか七五三
七五三親子で競ふ晴れ着かな
一雨に浅黄息衝く石路の花
替へ靴は祖父が持つなり七五三
水明熊谷句会 (熊谷)
冬に入る馬場に茸毛の息遣ひ
裸婦像に小袖着せたき今朝の冬
塵はらふ南部鉄瓶冬に入る

翔太 亮一 輝翠 卓郎 道を 京子 拓真 月を 鶴城
美佐子 しょうろ 泰生 敏江 みどり 泰子 貞代 卓郎 風子 秀子

冬銀河億光年の現在形

立冬や柚子が黄を増す棘の中
シーソーの傾きしまま冬に入る

枯野道なれど明日へと続く道

大枯野竜虎の戦見し地蔵

茫茫と一色となる枯野かな

ミモザの会 (横浜)

うす味に大根を煮て齡かな

包丁研ぎいざ大根の桂剥き

煮大根湯気の向かうに戦あり

大根の透きて香りの仄かなり

凍星や樹間をぬけて電車音

激動の世界や今日は煮大根

大根や吾子の重みを確かめる

読み終へて恋の余韻や大根煮る

十二月分

たかなな俳句会 (川口)

初雪や肘掛窓を少し開け

決心をして白菜に刃を入るる

鴨居には父の遺愛の冬帽子

初雪のひと色の空友悼む

年毎の髪の過疎化や冬帽子

道男

忠男

燈女

栄子

徹平

茂子

水明熊谷句会 (熊谷)

少年の気迫のトライ息白し

金釘流それも一興賀状書く

本命の人馬一体息白し

白息やデッドヒートの山下り

牛の鼻湿り豊かに息白し

炬話に急須の茶葉のほどけゆく

閻王の招き断り賀状書く

息白くもやひ解かるる掛り舟

永平寺朝の勤行息白し

ミモザの会 (横浜)

冬の空酸素ボンベと研修医

冬晴や神の水なる三方五湖

アメ横に濁声ひびく十二月

おでん鍋先づははんべんはふはふと

ラジオから聖歌流るる歯科医かな

医者通ひダブルヘッター冬三日月

あちこちに脚立の出番十二月

円卓の会 (浦和)

浮鳥にひと夜添ひ寝の繋り舟

天頂の寒星よりも吾を愛す

苦吟して荒川畔浮寝鳥

冬星のこゑ聞え来る殖生かな

揺籃の水面まかせの浮寝鳥

ささやきは溜息になる聖夜かな

晩節や輝きまして冬の星

「おはやう」とぬくき瞳や白き鳥

浮寝鳥水面に残る日の匂

浮鳥や旅の疲れをどつこいしよ

若楠句会 (浦和)

都鳥忙しくつつく三番瀬

枯野から枯野へとうと千曲川

逢引に寄りて口出す都鳥

大枯野焼却場の煙立つ

客待ちの船や揺蕩ふ都鳥

その空は平穩ですか都鳥

世田谷ぼろ市景徳鎮と言はれても

哲学の道知るや知らずや都鳥

皐月の会 (浦和)

平和通りを追い越し去りぬ雪女郎

冬の街号外の鈴けたたまし

まだ引かぬ大根肩を出してをり

冬の空自問自答を繰り返す

鋤焼や漁りつくせし箸のかず

初雪に音たて走るランドセル

通人の遊びは密か泥鰌掘る

静謐な湖に広がる冬の空

修

京子

輝翠

翔太

道を

鶴城

葉子

操

風舎

直子

真由美

鶴城

京子

宏治

山菜

光代

珪子

紀子

暦文

美佐尾

きいち

更穂

鶴城

のり子

小麥

義子

謙一

鶴城

櫻の会 (浦和)

誇らしき顔で担ぐや大熊手
生垣に今朝も鎮座の冬帽子
頑なに師走の慣習守る老
煤逃げや書店ぶらぶら飽きもせず
万人の第九の合唱十二月
秩父夜祭とどろく太鼓天揺らす

蝌蚪の会 (浦和)

短日の庭師の技や玉散らし
どたばたの連想ゲーム忘年会
凍鶴や赤長靴にピョンと跳ね
金銀の折り鶴添へむ齒染飾り
日に増して錆ぶる記憶暮早し
上を向き寄り添ふ鶴よ永遠に
冬満月映る港に連絡船
連日の買ひ出しメモや年用意
大風の糸に連なる輩の手
木屋や冬満月に連なりて
為すことの手帳を埋めて日の短か
冬日和アートの島を連絡船

俳句の手ほどき (岩槻)

遊び毛を頸に光らせ日向ほこ
力瘤確と溜めたる枯櫛

あつ子 朋子 裕誌 富子 文子 千重子
元美 ひさの 幸子 夏野 風舎 さち子 礼子 元美 月を 鶴城 宣子

延昭 佐江

裸木の放つきらめき雨上がり
枯芒つづく夕陽の遊歩道

「百穴」にコロポックルの影枯木
回峰行真似て小走り枯木山
新品の電柱もあり枯木立
枯木立リースのやうにこぼるる陽
裸木に電光飾る新都心
六本木のイルミネーション枯木星
遊印に「知足」と刻む小春かな
枯木立茜の空にそそり立つ
枯木星話し相手のいらぬ夜
天恋ふるかに枝突き上げて枯木立

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

忘れ花瀬戸をぼんぼん蒸気船
夕日さす窓の絵ガラス冬館
起き抜けのしむる奥歯や霜の花
トテ馬車の巡る湖畔や霜の花
夫婦てふ茶飲み友達冬うらら
尖塔の先の明星冬館
路地照らす裸電球霜の夜
冬日和真つ直ぐ上る野良の烟

繭の会 (浦和)

縄文の村を眠らせ冬北斗
人の恩返すと誓ふ冬の星

チアキ 義平 徹太 翔代 幸子 桂子 美子 忠男 卓郎 久美子 知子 かつ子

和子 伸子

忘れなきこと二三年忘れ
貧乏神も呼んで乱痴気年忘
各々がそれぞれに観る冬北斗
温かき匂友句縁の年忘れ
夜空には春よ春よの冬北斗
冬北斗幾星霜を焔めけり
満天に切り絵のごとき冬の星
体を成し永遠の旅路や冬北斗
冬北斗柄のかりたる塔の先
人生はゼロの除数や冬北斗
停戦の救ふ命や冬北斗
子は親の心を汲まず冬北斗

雛の会 (浦和)

独り寝の目覚めうながすしづり雪
胸に抱くトロフィーポインセチア燃ゆ
ポインセチア第九の響く大都会
凍滝の触るるをこばみ棒立ちぬ
ポインセチア抱きて優しき人の声
慎ましき居に猩猩木は緋を尽くし

芙蓉句会 (浦和)

星一つ見つけいよいよ日短
陽だまりを情と仰ぐ短き日
短日やまた月曜の始まりぬ

小麦 風子 夕峰 まりこ 三千子 留美子 さよ子 風舎 寿夫 月を 鶴城 京子 輝翠 喜恵 公子 チアキ 燈女 佐江 税子 美子

和歌山水明句会 (和歌山)

十二月ひと日ひと日をねんごろに
銀杏落葉地上に描く別世界

和子
道子

茶の花の蕊ふくよかに笑みさそふ
茶の花や古寺のさ庭に日の光

玲子
道を

櫻蔭句会 (浦和)
巻きもどす今日一日を蒲団かな
焼きし葱空仰ぎつつ根元から

久美子
行雄

暮早し二転三転せし花席

千枝子
千世子

銃身の黒びかりして枯野原
ゆつくりと指採みほぐす柚子湯かな
節々を組み立て直す冬至風呂

かつ子
節代

関東平野葱畝走る青青と
蕎麦揃ひ囁る葱箸香り立つ
句作りも蒲団の中で四苦八苦

真理
公子

三日後の老骨痛や今朝の冬
冬紅葉人それぞれにある個性

満耶子
さわゑ

波立てて袖湯に溶かすあれやこれ
枯野刈る地上絵の如走り行く
カラフルな一輛電車ゆく枯野

和葉
章嘉

深谷葱おつ切り込みなたつぷりと
里の家長き廊下に干蒲団
泣き寝入りせし子へ花の掛蒲団

茂子
美智枝

うかうかと過ぎたる日日や十二月
ふれ太鼓銀の水尾ひく城の鴨

洋子
廻代

湯上りの肌に柚子の香ほのかなり

恵子
和子

休日の蒲団干す日にパンを焼く
満州の落暉葱畑果てしなく
葱洗ふきゆきゆつと白き素肌かな

美子
由紀子

野ばらの会 (浦和)

睦まじき家族の歴史古暦
冬の星重きノーベル平和賞

秀子
栄子

りそな俳句会 (浦和)
天帝の怒りか空は寒落暉
天を突く城暮れ残る冬夕焼

道を
寛治

鶴川山百合句会 (町田)
集まりて咲いても淋し花八ツ手
鞠玉や仄かに八手ほの咲けり

幸代
多美子

アンコール止まぬ第九や暦果つ
海側の車窓追ひ来る寒昴

茂子
夏江

富士山も冬夕焼の脇役者
寒夕焼お好み焼きを裏返す
夕茜小江戸を統ぶる時の鐘

建治郎
マスミ

よく笑ふ赤子八手の花開く
花八つ手ばさんと折れば骨の音
角出せし妻を宥むる花八手

史代
広子

古暦点点とある画鋏跡

みき子

冬夕焼門に出て待ち焦がれる子

雅夫

隣家との境は冥し花八手
八手の花あなた可愛い本当だよ
あそこにもここにもひとつ花八手

千春
萬蝶

芽吹句会 (浦和)

数へ日や満月愛でて旅しまひ
高層に老女五人の年忘

チアキ
富子

小梅の会 (浦和)
風花や茶碗二つの一人酒
シャンパングラス重ねる先は「ニューイヤー」

進

花やつで後ろ姿の夫無言
苔むした羅漢咲笑花八手

理恵
美千子

数へ日や待ち侘びあたる人帰郷
バスを降り狭山茶の花香る道

久美子
千重子

北風流れの上の沈下橋
年重ね何もせぬのも年用意

隆文
隆然

道

うさぎ
まじか

茶の花や歯を見せ笑ひ皇女たり
数へ日やロボット配膳迷ひなし

ひろこ
弘子

道

道

道

玲子

若狭水明会 (若狭)

枯れ落ちて姿さらけし枯尾花
昨日より歩数のばして小春かな
句碑文字の彫りの深さや小六月
小春日や開店前の大花輪
小春日や影引き連れて農仕舞
小春日や極楽浄土は縁側に
山茶花の散るやはらりと苔の庭
山茶花やいにしへ偲ぶ道すがら
山茶花や話の弾む垣根超し
玉串を捧ぐ夫の背小春かな
碑となりて見守る里や冬に入る
風神の遊びし跡や枯尾花

りんどう俳句会 (浦和)

冬ざれや走り根太き杉並木
掬ひとる牛乳の膜冬の朝
道場に響く一本冬の朝
連結器軋む電車や寒き朝
年の瀬やゆり根こんにやく黒豆か
つんつんと根魚の魚信寒日和
編みかけのセーター胸に恋終はる
年酒を受くる大杯根来塗
根本中堂不滅の灯火冬ぬくし
セーターに籠もる手編みの下心

新樹の会 (浦和)

虎落笛卓に寝ころぶ徳利かな
空風にめげず元気な女高生
冬ざれや古利根川の捨て小舟
空風に背中を押され下校かな
ちやんばらで遊ぶ子供ら空つ風
ボス猿は背筋を伸ばし空つ風
足利の学徒三千冬の星
神戸大池句会 (神戸)
辛うじて狭庭華やく散紅葉
黙禱に始まる句会室の花

野菊の会 (与野)

環珞のやう揺落の銀杏黄葉
寒菊や動物病院混み合ひぬ
生かされて余命未知なり日記買ふ
ひとり居の迷想幸せ小六月
ふはふはの馬房の寝藁クリスマス
山眠る武人埴輪の目の憂ひ

青葉の会 (浦和)

広き野や天を仰げば冬銀河
プレセント握りしむる児赤手袋
奈良公園になほも数多や冬の鹿

若鮎句会 (浦和)

数寄屋造りの組子障子や冬景色
手袋の片手ばかりの小抽斗
雪洞に蠟燭仄か冬銀河
大事にし過ぎ皮手袋に黴の跡
手袋の五指で語るや女学生
煤払ひ汚れかまはず数寄屋足袋

あゆみの会 (浦和)

溪流の音さらさらと山眠る
蓮枯れて連れ呼ぶ鷺の声のみぞ
枯蓮や竜の伝説残る沼
湯煙をぷわつと吐きて山眠る
枯蓮の狭間に鯉のぎよる目かな

美啓子 公子 洋子 和子 輝翠
重啓子 俱子 藻好
真子 ひとみ 稀香 香音子 芳春 拓真 山菜 鶴貴 月城 喜夫

さざきサークル (浦和)

古戦場に誰が泣く声ぞ虎落笛

流木の打ち上ぐ浜や虎落笛

虎落笛こつてり煮上ぐタンシチユー

虎落笛囲炉裏に滾るじやつば汁

虎落笛ベンチ一つの無人駅

虎落笛神高し一の宮

虎落笛風忍び込む障子穴

熱の子を看取る夜更の虎落笛

めだか句会 (浦和)

枯蓮やびたびた歩く鳥の列

肌荒れて赤いほつぺの乾風かな

枯はちす弁天の青浮き上がり

乾風来て顔の無駄毛の伸びにけり

頭垂れ足下に宝枯れ蓮

年の瀬や街に始発の連結音

枯蓮の無惨の姿空暮れて

二十六夜の静寂劈きあなじ来る

野晒しの縁起ばなしや蓮の骨

枯はちす戦塵は何を語るや

珊瑚の会 (浦和)

お伽話のほんとは怖し霜の夜

青春に前期と後期冬もみぢ

昇

啓子

俱子

由美子

健司

和枝

和子

和子

和子

知子

妙子

三茅

道楽

六弦

章嘉

はるみ

月を

鶴城

鶴城

かつ子

かつ子

喜恵

姫街道吐息のやうな冬紅葉

入日燦峡の湯宿の冬紅葉

炎の走る庵主の眼冬紅葉

霜夜なり若狭の仏目を隠り

よく切れるキッチン鋏霜の夜

折り紙の折りぐせ強き霜の夜

旧友の文いくたびも霜の夜

冬紅葉坂道続く小さな旅

マスマ

昇

恵子

史代

広子

和子

和葉

節代

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

【指導者】 網野月を

【作品】 5句 【受講料】 1,000円

【方法】 ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110円切手を同封 ④返信用封筒は不要 ⑤締切なしで随時受付

【送付先】 網野月を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

令和7年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。
新人登龍門の主旨をよく理解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)
水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
- 締切** 令和7年2月末日(発行所必着)
- 応募方法** 令和7年水明1月号に応募用紙添付

水明忌のご案内

- 【日時】** 令和7年2月24日(月) 12時 受付
12時30分 投句締切
- 【会場】** 浦和コミュニティセンター第13集会室
(JR浦和駅東口前パルコ10階)
- 【投句】** ・「紫荊」(「花蘇枋」「蘇枋の花」可)
・「当季雑詠」(従来の「秋子忌」および「如月(きさらぎ)忌」を含む)
各1句、計2句(※受付時にお投句ください)
- 【会費】** 1,000円
- 【申込】** 2月5日(水)より受付開始、20日(木)までに申込書
に会費を添えて発行所総務部宛にお申込みください。

「水明忌」は長谷川秋子第2代主宰、星野紗一第3代主宰、星野光二第4代主宰の忌を修する日です。日時をご確認の上、奮ってご参加くださいませ。

- ※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。
※なお、コロナ感染症の状況に拠っては内容等を変更する場合があります。

事業部

水明創刊 95 周年 記念祝賀会・全国大会のお知らせ

■記念全国大会

- 日 時 令和7年9月28日（日曜日）
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
〒330-0062 さいたま市浦和区仲町2-5-1
行 事 ・水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、鼓笛賞、山紫賞
の表彰
・季音昇欄同人、新季音同人、新同人への委嘱状授与
・大会記念作品の表彰（俳句、評論、エッセイ）
・大会兼題句の入選発表、表彰、講評

■記念祝賀会

- 日 時 令和7年9月28日（日曜日）
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
〒330-0062 さいたま市浦和区仲町2-5-1
行 事 ・来賓挨拶（高野ムツオ現代俳句協会会長）他
・アトラクション他

※大会・懇親会の時間および参加費等の詳細については改めてご案内致します。

春の吟行会のご案内

- 【日 時】 令和7年3月30日（日） 11時 受付
12時30分 投句締切
【会 場】 本所ビッグシップ／1階大会議室
【投 句】 当日の囑目2句
【会 費】 2,000円
【申 込】 3月号に添付の申込書に会費を添えて発行所総務部
宛にお申込みください。

※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。
※会場には10時から入れます。ご持参の弁当などを食べていただけます。

主担当 第2例会、支援 事業部

風 声

○俳句四季十一月号——「季語を詠む」欄

うつ田姫吾を追ひ抜きにつと笑む

鬼之介

○現代俳句十一月号——「第一回現代俳句『風を詠む』」欄

高欄の唐金こがす西日かな

池田珪子

稲を刈る農夫の手の平すぐ乾く

井上燈女

不忍池茫茫と敗れ荷

小林京子

借老の緩り散歩や萩の花

原田秀子

慈母観音のお膝をしばし秋の蛇

丸山マシミ

布団打つ音がこだます鴟日和

本橋稀香

口笛に呼応してくる虫の声

葛城千世子

○現代俳句十一月号——「現代俳句年鑑2024」を読む」欄

瀬藤芳郎氏の感銘十句抄に

雛納戦禍を記す新聞紙

本橋稀香

矢野二十四氏の感銘十句抄に

地虫鳴く五重の塔の心柱

由良ゆら女

○現代俳句十二月号——「列島春秋」欄

泥つきの葱読売新聞紙

網野月を

○現代俳句十二月号——「第一回現代俳句『風を詠む』」欄

風見鶏ぐるりと年始告げにけり

秋谷風舎

夫婦して酔ふ粕汁の夜は更けて

永野史代

七半の男盛りが枯野宿

大橋廸代

冬帽子横つちよに被り猫駅長

西浦千枝子

○現代俳句十二月号——「永年会員記念作品」欄

三十年永年会員作品に

初日影バベルの塔のようなビル

内田恵子

青年の歩幅五月を一直線

星野和葉

○くぢら（中尾公彦主宰）十一月号——「受贈俳誌美術館」欄

序の舞の形にひらく秋扇

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）十一月号——「受贈誌拝見」欄

鳥唄はことばを紡ぎ夏の月

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）十一月号——「受贈誌御礼」欄

鳥唄はことばを紡ぎ夏の月

鬼之介

○駒草（西山睦主宰）十一月号——「句誌巡り」欄

木脇 祐貴氏の鑑賞により

喫水深し母港へ急ぐ鯉船

鬼之介

鯉船が大漁旗とともに母校に帰ってきた。船の喫水線が沈んで見えるほど多くの鯉を取ったのがわかるのである。

我腕に眠る子猫の軽きこと

町野広子

子供は、抱いてみると見た目よりも重かつたり軽かつたりする。腕の中で眠る子猫は、全てを委ねているようである。

○玉梓（名村早智子主宰）十二月号——「他誌拝見」欄

噴水が準備してゐる次の曲

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）十一月号——「諸家近詠」欄

噴水が準備してゐる次の曲

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）十二月号——「諸家近詠」欄

川幅を広ぐるやうに流灯会

鬼之介

○餅（山本一步主宰）十一月号——「受贈誌の一句」欄

半夏生日本銀行券あらた

小林京子

（日高道を抄出）

水明通信

美しい村連合

さいたま 香田裕誌

日本には最も美しい村連合と言う組織があり、首都圏には四ヶ所ある。その一つ栃木県那珂川町小砂を過日訪れた。

この村には棚田や森林が多く住民は少ない。この様な環境に身を置くと自然と人の共生が作り上げた原風景が観られ満目の田畑に感動し此処に生きる大切さを実感する。

都会の世情とは大違いである。

水明發展基金御礼 (敬称略)

— 令和六年十一月三十日現在 —

山本鬼之介	丸山マスマ	笹本啓子	飯田忠男	柿沼三千子	星野和葉	小林京子	寺町知子	中村留美子	河野はるみ	近藤徹平	鳥羽和風	畠中八重子	小駒さち子	大場順子	保坂翔太	菊池ひろこ	綿引まりこ	井上燈女
50	10	5	10	5	5	5	1	5	5	10	20	3	10	10	5	10	3	5
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□

三浦真由美	森和子	小倉倭子	清水桂子	石川理恵	高島寛治	松田朋子	佐々木史女	宍戸洋子	水野興二	水明塾より	曲淵徹雄	保坂翔太	皆川更穂	寺町知子	河野はるみ	石関六弦	松井由紀子	秋谷風舎
5	3	20	5	5	5	3	10	20	5		2	1	1	1	1	1	10	5
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□		□	□	□	□	□	□	□	□

水明發展基金御礼 (敬称略)

— 令和六年十二月三十一日現在 —

石山かつ子	丸山マスマ	染谷風子	清水桂子	越田栄子	笹本啓子	大塚茂子	日高道を	網野月を	正木萬蝶	匿名	保坂翔太	石井喜恵	加藤でん治	田中章嘉	阿部貞代	倉田星歩	鈴木康世	石田慶子	松山清子	原田秀子	元田亮一	綿貫ひさの	大島千恵	伊藤美津子	越田栄子	下川光子	
3	1	1	1	1	1	1	1	100	20	50	10	10	3	3	10	10	10	10	10	10	10	3	3	3	10	3	3
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	

合計	合計
305	290
□	□

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界

2025年3月号

特集

句に刻まれた

師系を語る

● 論考 俳句の師系の特徴 井上泰至
● 私が師系を選んだ理由

矢野景一 江見悦子
淵脇護 阪西敦子

● 自句自解〜句に刻まれた「師系」
守屋明俊 高田正子
草深昌子 長谷川慎子

〔クラヒア〕俳句界NOW 染谷秀雄

特集 心を揺さぶられた俳句

矢作十志夫 手拝裕任 中西夕紀
奥田好子 中内亮玄 西生ゆかり

〔注目の句集・一冊〕吉岡乱水 『不知火』
如月真菜 『湖を出る川』

充実の連載陣

- 俳人のあり方・結社のあり方 宮坂静生
- 近現代俳人の肖像 青木亮人
- 俳人の本棚 川越歌澄
- 評伝小野燕子―俳句弾正事件 栗林浩
- 高濱虚子の人物関係史 坂口昌弘 ほか

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！
充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。



株式会社 文藝の森

お求めは…〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

角川「俳句」別冊「カドカワムック」

12月6日
発売予定

予価3300円(税込)

俳句年鑑 2025 年版

2023.10・2024.9

口絵

二〇二四年一〇〇〇句選……小林貴子選
写真でたどる二〇二四年の俳壇

【巻頭提言】

橋本榮治

年代別 二〇二四年の収穫

諸家自選五句……約六〇〇名！

今年の句集ベスト15 四協会の一年

今年の評論ベスト7 各俳句賞のひとびとほか

合評鼎談

― 総集編 ―

横澤放川・辻村麻乃・抜井諒一
今年の秀句を振り返る
〈令和俳壇「心に残る秀句」発表！〉

● 全国結社・俳誌 一年の動向 都道府県別目次付き！

● 全国俳人住所録 約二〇〇〇名を一挙掲載！

※内容は変更になる場合があります。

KADOKAWA

発行：角川文化振興財団 発売：株式会社KADOKAWA
● お問い合わせ先(注文) TEL.0570-002-008 (KADOKAWA購入窓口)

後記

今年の大寒は、思ったより暖かくほっとしました。しかし、日本列島は、各地かつてない程の大雪に埋まりました。

一方、雨が少なく、空気が乾燥し、火事が、日本のみならず世界中に発生し、雨乞いの祈祷が必要なのかと思ったりしました。

今二月号では、第八回「水明塾」(令和六年十一月三〇日)における「秋尾敏氏(現代俳句協会副会長、「軸」主宰)の講演「境涯俳句と写生句」を掲載しました。遠方やらご都合で不参加だった方は、ぜひご覧下さい。

また、恒例の年末回顧をお書き頂きました。年末年始の慌ただししい中、ご執筆の皆様にはご協力頂きまして、本当にありがとうございます。

新珠賞の締切りが迫っています。昨年のご応募二十篇の中から、新珠賞作家がお二人誕生しました。

選考会では、審査委員長はじめ、推薦委員、選考委員の発表が終り新珠賞に選ばれた二人の名前が発表されると一同びつくりしたり、納得したりでした。

昨年に増して、より多くの方が応募なさいます様にと、願っています。応募に当たつての主宰からの注意事項です。まだ間に合う方は是非ご参考に。

- ① 文字は丁寧を書く
 - ② 誤字脱字を無くす
 - ③ 送り仮名・旧仮名遣いを正しく
 - ④ 季語の配列を考慮する
 - ⑤ 題名を熟考する
- 以上ですが、これ以上詳しくは、昨年の水明五月号主宰はじめ選考委員の皆様の方をご参考になさって下さい。ご健闘を祈ります。
- インフルエンザと新型コロナウイルスはなかなか下火になりません。そしてテレビ等で後遺症等が、真しやかに語られる。やはり予防が一番マスク、手洗い、うがいのようです。お気をつけて……。

(節代)

今月のはてな？

- 翳(かす)む
- 和顔施(わげんせ)
- 天が紅(あまがべに)
- 族(まぶし)
- 歧望(きぼう)
- 潺潺(せんせん)
- 戯(じゃら)かす
- 根魚(ねうお)
- 瓔珞(ようらく)
- 乾風(あなじ)
- 劈(つんざ)き

99 99 98 98 94 78 56 36 26 23 15 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内にお願ひします。)

水明

令和七年二月号
通巻一三三三号
令和七年二月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区高野四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

令和7年「水明忌」参加申込書

〈申込締切 2月17日〉

水明忌 2月24日(月)	参加費 1,000-	出席します
-----------------	------------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

2025年2月 日

住所	〒		
氏名		電話	()

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)
水明俳句会

[緊急連絡先電話番号]

電話番号	()
氏名	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。緊急時のみに使用し他の用途には使用いたしません。

季音抄

山本鬼之介

今朝の冬切つ先ひかる轆轤鉤
海鳴りの昼に鱒酒ゆるされよ
通ひ路の垣に二輪の帰り花
風鐸の音色はやさし時雨呼ぶ
船小屋の柱は丸太初明り
点されて仏間の障子仄暗し
行く秋や遠き目をして陶狸
手の甲に口紅試す小六月
大木を祀る荒縄初景色
ふはふはの馬房の寝藁クリスマス
風呂吹や屋台の椅子を詰め合うて
小春日や水路の亀と歩を合はす
渡月橋わたりきる間の時雨かな
砂子路の彼方の島や秋の雲
手袋の片手ばかりの小抽斗
三島忌や夕陽に映ゆる二重橋
隣家との境は冥し花八手
少年の小枝のタクト枯葉舞ふ

境延昭
島津初花
鈴木康世
十倉和子
鳥羽和風
永野史代
大場順子
梅澤佐江
池田雅夫
内田恵子
丸山マスミ
高島寛治
横山君夫
保坂翔太
笹本啓子
染谷風子
石川理恵
下川光子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆▼

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

つがひ鶴鴿一声交はし翔びたてり
 一天の青さを写し秋の川
 句だけ残して暮るる刈田かな
 原流の一滴はるか秋の川
 百年の土間こそ我が家残る虫
 七粒の仁丹の味秋の味
 茸狩の遠くなりゆく友の鈴
 良夜かな陸橋といふ特等席
 路地裏に残る駄菓子屋秋さびし
 蓑笠や雨を甘なふ捨案山子
 星月夜青き夜空を飛行船
 秋さびし遠くとほくのひとつ星
 道訊かれ教ふる指や秋の風
 昔ほど鳴らぬ口笛花野行く
 猪をさばく孤老の武勇伝
 秋寒や夜の引継ぎナース室
 達人の不気味な寡黙茸狩
 棧橋の出船の銅鑼や露の袖

岡田宣子
 篠崎紀子
 菅原真理
 池田瑠子
 小林京子
 反町修
 霜多光代
 寺町知子
 清水桂子
 皆川更穂
 倉田星歩
 飯田忠男
 丸屋詠子
 大熊健司
 菅原卓郎
 加藤でん治
 新曆文
 森美枝子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂小 木林和京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山青 中みどり 木鶴 城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 昇 曲淵 徹 雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井 喜 恵 反町 修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐 江 河野 はる み
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬 蝶 石田 慶 子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋 勉 代	森本 早 苗

水 明

令和七年二月一日発行 毎月一日発行

(第九十八巻 第二号)

定価 一〇〇〇円